

腰部外科

卷三、四

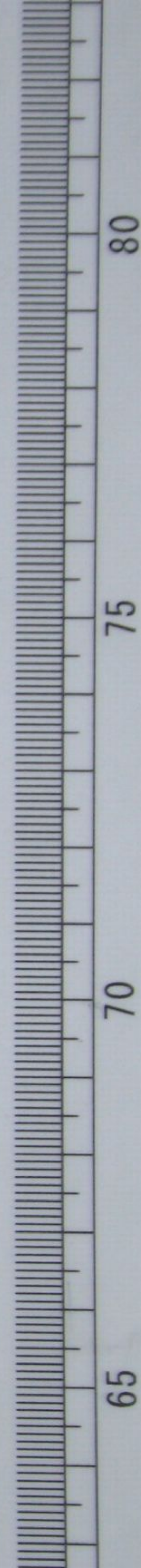
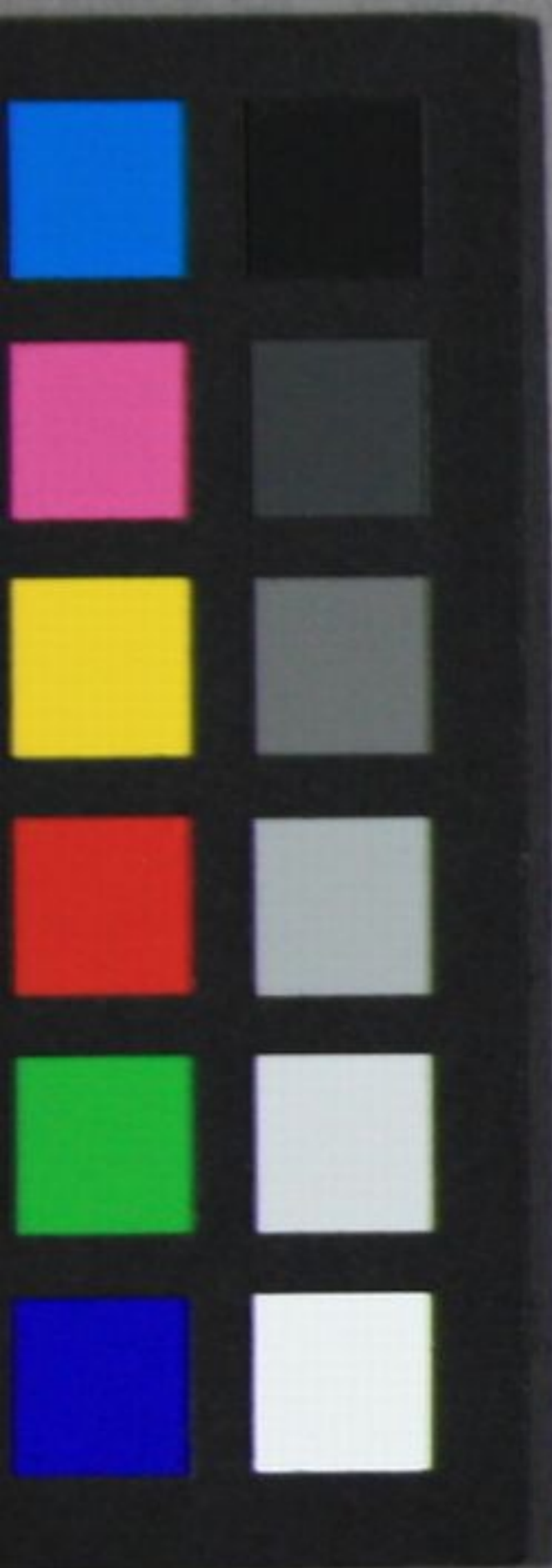
膀胱结石
攝護腺炎(肥大)
精系靜脈瘤

特別

イ 4

3159

B 41



Faint handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

14
3159
B41

明蘭亭始後一病治證

第三卷

痔瘻
痔核
直腸癌
歇爾尼亞
膀胱結石
軟性下疳
陰囊水腫
精系靜脈瘤
辜丸及副辜丸炎
橫護腺肥大

結核性股關節炎
第四卷



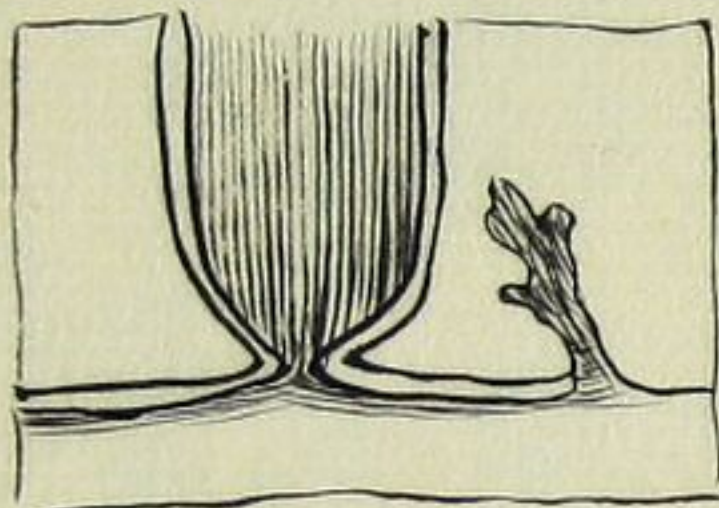
區別

第五 直腸瘻又痔瘻

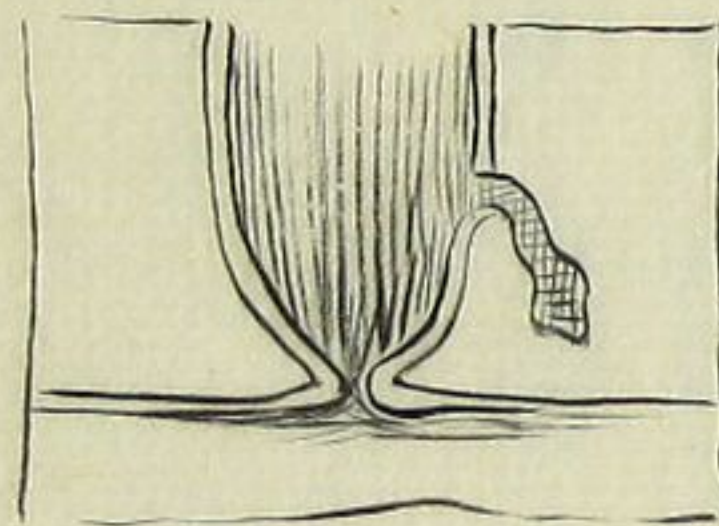
本症ハ肛門及直腸下部ハ周囲ニ於テ膿汁ヲ漏
泄スル瘻管ニシテ之ニ三種ノ別アリ

(一) 外不全痔瘻 トハ瘻孔ハ肛門周囲ノ
皮膚ヨリ肛門部ノ一定ノ高サニ達シ直腸壁ヲ
穿孔セサルモノヲ云フ

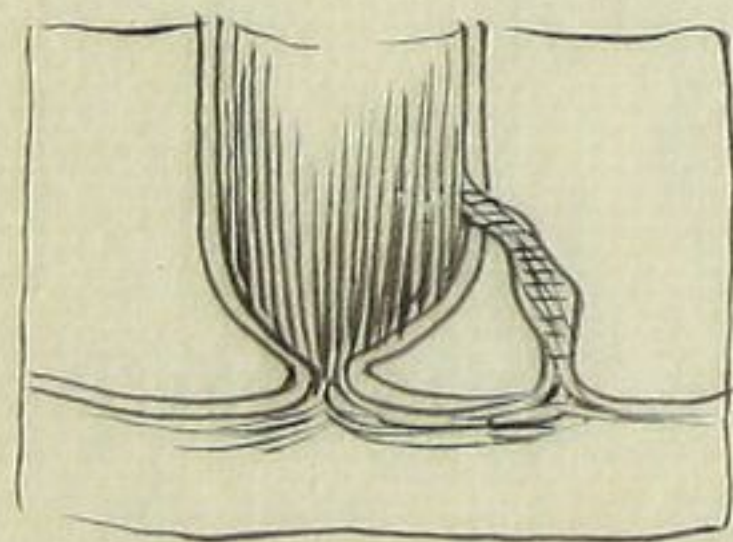
瘻瘻全不外



瘻瘻全不内



瘻瘻全



(二) 内不全痔瘻 トハ瘻孔ハ直腸壁ニ在リテ

瘻

外表ノ皮膚ニ通セザルモノヲ云フ
三) 全痔瘻 上ノ瘻口ハ皮膚及直腸粘膜ノ
兩部ニ在リテ多少長キ瘻管ニ由リ互ニ相交
通スルモノヲ云フ

原因

直腸瘻又痔瘻或ハ肛門周囲ニ於テ
外方ヨリ生シ或ハ直腸内ニ於テ内方ヨリ生スルモ
其ニ多クハ急性機轉ニ基クモノニテ時トシテ外
傷ニ因リテアリ即ケ外不全痔瘻ハ肛門周
圍ニ痔腫及膿瘍ヲ発シ遂ニ皮膚ヲ破開ス
ルニ由ラ生シ内不全痔瘻ニ在テハ慢性直腸
炎直腸周囲炎直腸潰瘍等之ガ先驅症
タルヲ常トス又全痔瘻ハ始メ多ク不全痔

瘻ヨリ成ルモノニシテ本症ニ在テハ通常直腸粘膜卓
一ノ瘻口ヲ存スルモ皮膚ニニニノ瘻口ヲ開ケラタ
シトス而テ皮膚ノ瘻口ハ多ク肛門ノ外側方ニ
在リテ其後側方ニ在ルハ罕ナリ又瘻口一部
ニ實質状ヲ為スモノアリ或ハ彎曲スルモノアリ

症候

上文述ヘタルカ如ク痔瘻ノ生スルマ始メ
其原因タル肛門ノ痔腫及膿瘍直腸及其
周囲ノ炎症直腸潰瘍等ノ症候ヲ存スルモ既ニ
瘻管ヲ形成スルニ至レバ其症状極メテ輕微ニ
シテ患者自ラ之ヲ覺知セズ只膿性分泌物
增多スルニ由リ始メテ之ニ注意スルガ如キ一屢之
レ有リトス但シ膿ノ分泌量ハ各症甚異ニシテ

全痔瘻ニ在ラモ膿中ニ糞屎ヲ混ズルハ稀ナリ
是瘻管ノ徑路ハ多ク斜行シ且直腸粘膜内
ノ瘻口狹小ナルニ因ル然レモ瘻管ノ一部窈状ニ
廣濶ト為リ常ニ其中ニ膿ヲ蓄積スルキハ直
腸壁ハ漸次其周圍ノ結締織ヨリ剝離セシ
遂ニ大ニ膿瘍ヲ作ルニ至ルアリ又内不全痔
瘻ニ在ラモ瘻管内ニ分泌物蓄積スルアリ以
テ殊ニ便通ノ際疼痛ヲ發スレテ往々之レ有レ
氏外不全痔瘻ニ在ラモ自覺的ニ症候ヲ呈セザ
ルヲ多シ但膿ノ分泌絶エザルキハ肛門之カ
常ニ湿润スルヲ以テ患者不快ニ堪ヘス且其分
泌多キハ漸次身軀ノ衰弱ヲ招クモナリ蓋

シ斯ノ如キ症ハ大ニ結核症ニ疑フ容ル可キモノトス
此他直腸ト其隣接器官殊ニ腔、尿道、膀胱
トノ間ニ瘻管(直腸、腔瘻、直腸、尿道瘻、直
腸、膀胱瘻)ヲ形成スル一罕ナラス又骨盤骨
或ハ脊柱骨ノ炎症ニ由リ直腸周圍蜂窩
織中ニ膿ヲ流注シ来リ遂ニ直腸ヲ破開ス
ルキハ恰モ内不全痔瘻ノ如キ症狀ヲ呈スルニア
レモ既往症ヲ審ミ且消息子ニ由テ精密ニ
検査スルキハ之ヲ鑑識スルニ難カラス

△ 診断 瘻管ノ肛門周圍ニ開口スルモノニ在
テハ診断容易ナルヲ常トス即チ患者ヲ側臥若
クハ仰臥セシメテ檢スルニ多クハ肛門ノ外側方ニ

於テ屢々只一個ハ細小ナル瘻口ヲ存シ或ハ間々
小ナル肉芽ヲ著ルアリ或ハ瘻口一時閉鎖
スルモナリ(此ノ如キモノニ於テハ指頭ニテ肛門ノ皮
肉ヲ強ク撮ルハ皮下ニ硬キ索状ヲ呈スル瘻
管ノ通路ヲ觸知スルコト多シ)或ハ又數多ノ外口
ヲ見ルコト少カラス是ニ於テ先ツ球頭消息子ヲ取
リ之ヲ前後左右ニ屈曲シテ瘻管内ニ送入シ同時
ニ左示指ニ油ヲ塗り肛門内ニ送入シテ探檢スル
ハ瘻管ノ直腸内ニ通スルヤ或ハ否ラザヤ又
其何レノ部位ニ達スルヤ等ヲ檢知ス可シ此際
全痔瘻ニ在テハ内口ニ相當スル部位ニ於テ屢
稍隆起セル軟キ小肉芽ヲ觸ルコトアリ或ハ消

息子頭ハ直腸粘膜ノ直下ニ達スルモノヲ存
セサルコトアリ然レモ内不全痔瘻ニ在テハ時ニ
診斷容易ナラサルコトアリ故ニ之ヲ診斷スルニハ
先ツ其既往症ヲ審ニスルヲ肝要トス即チ本症
ニ在テハ始メ直腸周囲ニ疼痛ヲ覺エ次テ肛門
硬結ヲ生シ後ニ必リ肛門ヨリ多量ノ膿ヲ漏
出シ或ハ便通ハ際膿ヲ排シ此際疼痛ヲ
起スコトアリ或ハ指頭ヲ以テ肛門附近ヲ壓迫
スルハ膿ヲ漏スコトアリ又示指ヲ肛門内ニ送入
シテ觸診スルニ瘻口部ニ於テ稍隆起セル小肉
芽ヲ觸ル可ク肛門鏡ヲ送入スルキハ之ヲ自
睹スルヲ得可シ

豫後

單純ナル痔瘻ハ豫後善良ニシテ治術
ヲ施ス片ハ全治シ又自然ニ治愈スルモノ無キニ非
サレバ結核性痔瘻ハ豫後不良ナリトス是レ本症
ハ手術ヲ施スモ通常ニ在再治愈ニ至ラズ
或ハ再ヒ乾酪変性ヲ起シテ破潰スルノミナラズ
亦肺臟結核症ヲ合併スル一宜カカラサレバナリ
但シ單純ノ症ニ在テモ久シク放置スルキハ結核
症ニ感染スルノ虞アルヲ以テ可及的速ニ手術
ヲ施スヲ得策トス

療法

ハ主トシテ瘻管ハ全長ヲ全ク切開スル
ニアリ即チ先ツ手術ノ前日ニ下劑ヲ與ヘ手術
前ニ更ニ浣注器ヲ以テ直腸ヲ十分ニ洗滌シ

麻醉ヲ施シ(コカイン)ノ局所麻醉ヲ以テ是レヨリ
患者ヲシテ截石位置ヲ取ラシメ瘻口ヨリ層
核性ノ有溝消息子ヲ送入シ之ニ沿テ尖刀ヲ送
リ瘻管ノ全長ヲ切開ス

痔瘻切開術式



○直腸高部ニ瘻口ヲ有スル
痔瘻ニテニ沿テ切開スル
ノ面ニ刀尖ヲ當テ切開
スルトコロ

○低部ノ痔瘻ニシテ單ニ
消息子ニ沿テ切開スルト
コロヲ示ス

全痔瘻ニ在テハ上記ノ法ニ由リ外部ノ瘻口ヨリ直腸内ニ有溝消息子ヲ送入シ瘻管ノ全長ヲ切開ス可キモ不全痔瘻ニ在テハ先ツ之ヲ全痔瘻ト爲シ切開ヲ行フ可シ即ケ外不全痔瘻ニ在テハ外部ノ瘻口ヨリ消息子ヲ通シテ直腸粘膜ヲ穿破シ全長ヲ切開シ内不全痔瘻ニ在テハ之ニ及ス但シ内不全痔瘻ニシテ其瘻口直腸ノ高部ニ開クモノニ在テハ括約筋ノ皮下伸展法ヲ行フカ或ハ時宜ニ由リ後部括約筋切開法ヲ施シテ瘻口ヲ露呈スルヲ要ス一アリ又總テ括約筋ヲ通シ或ハ括約筋下ヲ通シ瘻管ニ在テ固ヨリ之ヲ切斷セザレバ可カス之ガ爲メ一時大便失禁ヲ来スモ久シカラズニテ治スルヲ常トス

往時ハ此手術ニ所謂瘻管刀及瘻管前刀ヲ用ヰタレ氏今ハ全長ヲ瘻管セラレシリ又直腸ノ損傷ヲ避ケンカ爲ゴトナレバトナレバ者ヲ用ヒシハ是亦散テ必要ニアラス此他痔瘻ノ手術ニ括約筋法及電氣燒灼法ヲ用ヒ法有レ氏單ニ刀ヲ以テ切開スレバ優レシカス結紮法ハ絹絲若クハ腸線ヲ瘻管内ニ送り其兩端ヲ肛門ニ於テ結紮スルノ法ニシテ結紮線ノ弛緩スルニ從ヒ之ヲ緊約シ全長ヲ軟部ヲ切斷スルニシテモナリ但シ電氣燒灼器若クハ烙白金ハ痔核ヲ兼テ止血法トシテ用スルニ最良ナリトス

結核性痔瘻ニ在テハ切開後嚴重ニ銳匙ヲ以テ患部ヲ搔爬シ、燒灼シ或ハ全ク之ヲ切除スルヲ良トス

痔瘻手術ノ後ニ毎常嚴密ニ止血法ヲ施サシムル可カラス是レ上文述ベタルカ如ク術後直腸内ニ著シキ出血ヲ来スルアルモ患者危篤ナル貧血症状ヲ呈スルニ至ラザレバ之ヲ知ラズシテ看過スルコトアリ

△後療法ハ甚ク簡單ナリ即チ術後ハ飲食ヲ節セテ阿片ヲ與ヘテ一時便通ヲ止ルカ或ハ之ヲ與ハス時、浣腸ヲ施シ軟便ヲ利セシムルヲ良トス而テ肉芽ノ發生ヲ促サセガ為ニ創面ハ可及的早ク硝酸銀桿ヲ以テ腐蝕ス可シ

第八 痔疾

定義

痔疾ハ肛門及直腸下部ニ分佈スル靜脈一部ノ靜脈瘤性擴張ノ謂ニシテ諸種ノ疾患ニ因リ以上ノ靜脈及其回流領域内ニ於ケル鬱血ニ由テ發スルモノナリ

症候

△原 初期ニ於テハ直腸内ニ膨滿ニ嚴重ノ灼熱、瘙癢或ハ疼痛ノ感覺アレバ便通後ハ是等ノ症状大ニ緩解スルヲ覺エ其他亦症ノ主徴ヲバ時ニ發作シ出血所謂痔出血トス是概シテ積努張セル直腸靜脈ノ破裂ニ因ルモノニシテ間ニ著シキ出血ヲ来スルアレバ出血後ハ患者反テ爽快ヲ感スルヲ常トス然レバ出血屢次ナルキハ遂ニ高度ハ

貧血ヲ来スモナリ而テ疾患益々増進スルハ肝
門ノ内部或ハ外部若クハ内部兩部ニ靜脈痛
性ノ結節ヲ生ス所謂痔核是ナリ其發生ノ
部位ニ從ヒ更ニ之ヲ内痔核及外痔核ノ二
種ニ區別ス

○**内痔核** 常ニ只粘膜ノミヲ以テ被レ肝門
以ニ隱伏シ或ハ肝門ノ間ニ嵌入シ或ハ肝門外
ニ脱出スルヲアリ而テ脱出セル粘膜ハ始ハ滑澤
ナレ後漸ク粗糙ト為リ或ハ葡萄状ヲ呈シ
之ニ觸ルニ柔軟ナルアリ或ハ稍々硬固ナルアリ
○**外痔核** 一部ハ皮膚一部ハ粘膜ヲ以テ被レ、
半ハ肝門外ニ在ルヲ以テ常ニ摩擦及諸般ノ

刺激ヲ蒙リ為ニ炎症ヲ起シ或ハ裂創ノ如キ
小潰瘍ヲ生スルヲ多ク或ハ又疼痛ヲ起シ甚
キハ歩行ヲ妨グルニ至ルヲアリ殊ニ外痔核ノ嵌
頓セルモノアツテハ劇痛ヲ發シ若シ早ク之ヲ除カ
ザレバ結節遂ニ壞疽ニ陥リテ脱落シ又之ガ
為時々腐敗性炎症ヲ起シ致命セシムルノ患キ
ニアラス 此他痔疾ニ屢々直腸加答兒、痔瘻
肛門裂創等ヲ兼ヌルモノミテ又脱肛ヲ起サシ
ムルノ實カラス

△**療法** ハ先ツ其主因ヲ除クヲ以テ首トス 既ニ其
原因ヲ除クノヲ得ハ假令ヒ大ナル痔核トイヘモ自
ラ消散ス可シ吾人ガ婦人ノ分娩後ニ屢々之ヲ目

撃スルカ如キ其通例ナリトス又殊ニ注意ス可キハ
大便ノ通利ナリ常ニ秘結スル者ニ在テハ浣腸ヲ
施スヲ良トス屢下劑ヲ投スルハ策ノ悞ルモノニア
ラス反テ腸ヲ刺戟シテ痔疾ノ原因トナルヲア
リ其他屢々温浴ヲ取ラシムルハ良效ヲ奏スル者
ニシテ殊ニ外痔核ニ在テハ冷水浣洗法ヲ行ヒ局
所ヲ清潔ニスルヲ肝要トス既ニ炎症ヲ発シタルモ
ハ一般ノ治法ニ從ヒ處置シ嵌頓ヲ起セルモノハ指
頭ニ油ヲ塗リ整復ス可シ整復困難ナルハ麻
酔ヲ施シ時宜ニ由リ括約筋ヲ弛ラ皮下ニ伸展シ
テ整復スヲ謀ル可シ之ニ由テ徃々痔疾ノ苦痛
又チ除却スルニ由ラシムルアリ又既ニ壞疽ニ陷

レル者ハ燒灼器ヲ用テ之ヲ燒断シ嚴密ナル制
腐綿帶ヲ施ス可シ然レモ是等ノ諸法ハ畢竟
只一時症候的ノ療法ニ過キ甚ラ以テ全ク之ヲ
根治セシムルニ他ノ法術ニ頼ラザル可カズ其法次
ノ如シ

根治療法

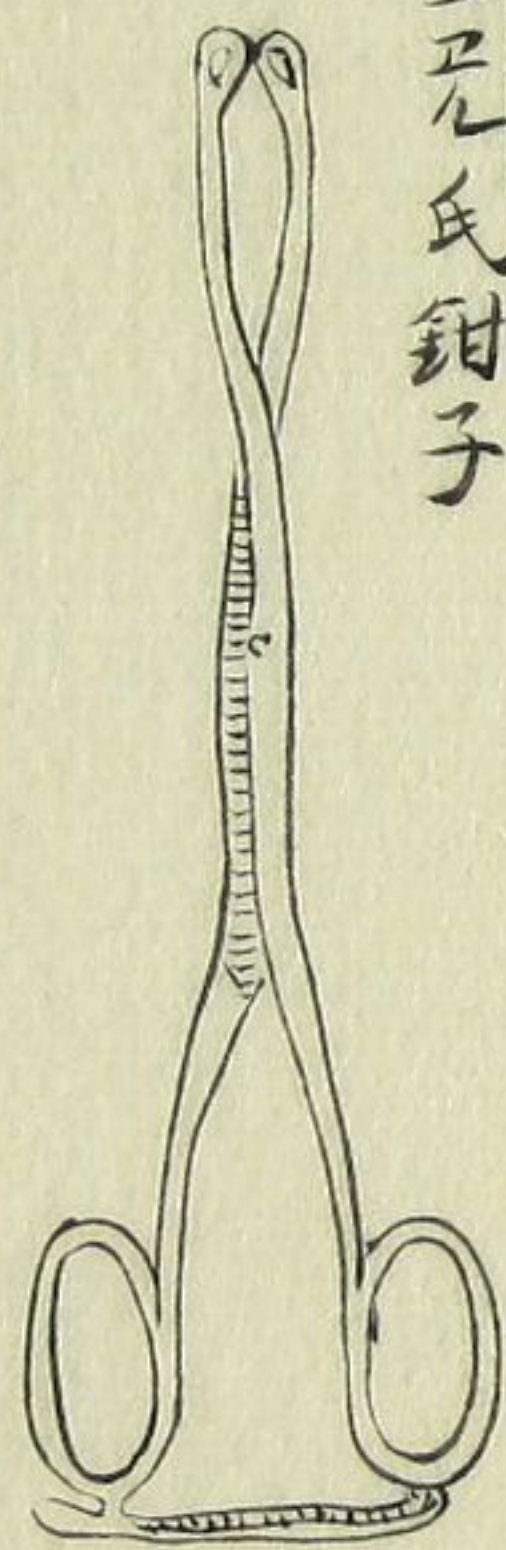
一濃厚石炭酸注入法 輕症ノ痔核ニ行フ
所ニシテ殊ニ米匠ノ多ク稱用スル所ナリ其法痔
核ノ大サニ應ジテ石炭酸ヲ注射シ(等分或ハ二
乃至三倍ノモノ)ニ三滴ヨリ五、六滴ヲ。フアラワツ
氏注射器ヲ用テ核内ニ注入スルニアリ此際多
クハ疼痛ヲ起サレルヲ以テ通常麻醉ヲ要セザ
レバ鎮痛性坐藥或ハアカイ注射ハ稱用ス

可シ此法ハ屢ニ一回ニシテ奏效ヲ得ルコトアリ且時
宜ニ由リニ乃至三週日ハ後更ニ注ハラシメ施サレ
ル可カラサルコトアリ術後ハ主ニ流動性食餌
ヲ取ラシメ時ニ浣腸スルヲ良クテ而テ此法ハ通常
就禱ヲ要セザレバ罕ニハ二三日間安臥ヲ要スル
コトアリ

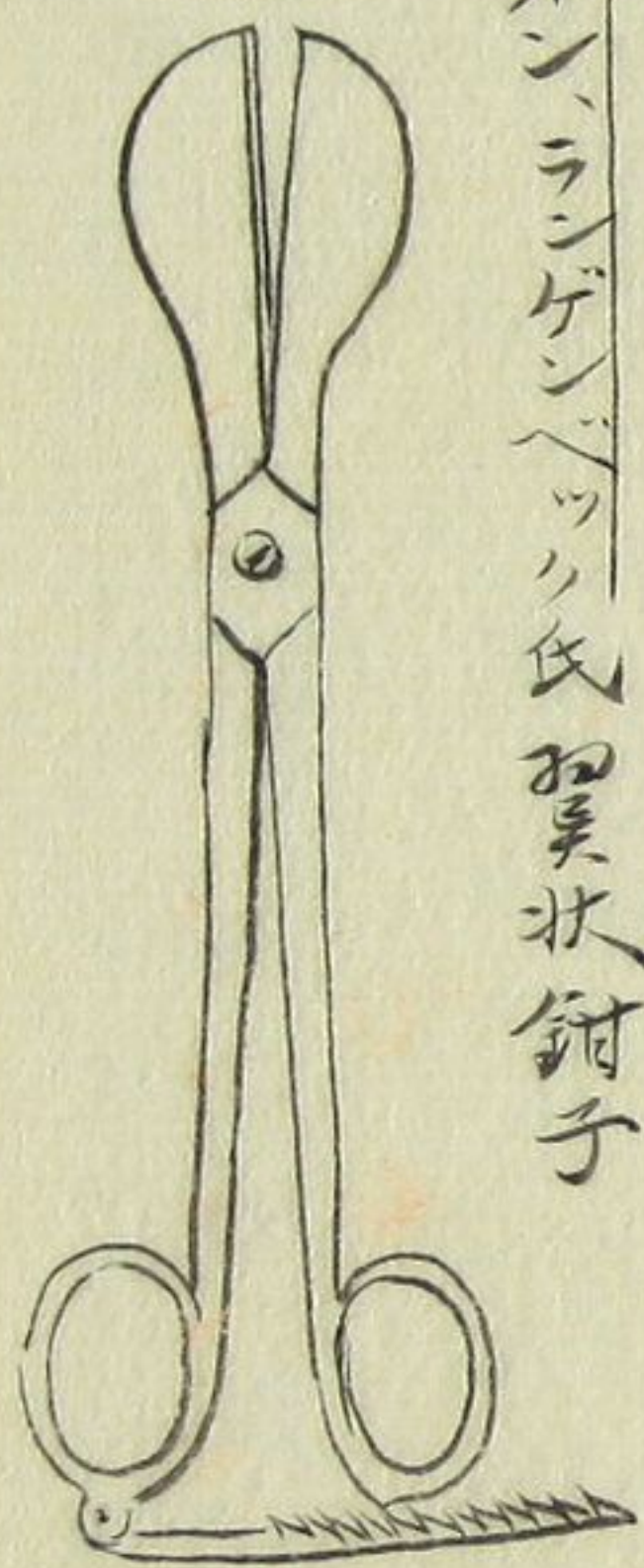
(二) 燒滅法 通常是モ多ク行ハル所ノ法
ニシテ烙白金ヲ以テ燒灼スルヲ簡便トス其法
先ツ手術前日ニ下劑ヲ與ヘテ十分ニ腸管ヲ疏
通シ手術前更ニ肛門内ヲ洗滌シタル後各
カナル麻酔ヲ施シ(内痔核ニ在テハ麻酔後
括約筋ヲ伸展シテシモン氏腔鏡ヲ送入シ

ハルニ至ルヲ要スルコトアリ) 適當ノ鉗子例之ニ
リユエル氏痔核鉗子ヲ取リ結節ヲ撮リ次
テフカシラシメシモン氏翼狀鉗子ヲ以テ結
節ノ起根部ヲ緊撮シタル後濕性綿紗ニテ

リユエル氏鉗子



フオン、ランゲンベック氏翼狀鉗子



結節ノ周囲
ヲ蔽ヒ以テ
他部ノ火
傷ヲ豫防
シ斯クテ烙
白金ヲ取リ
翼狀鉗子
上ノ結節ヲ

燒灼シテ炭化スルニ至ラズ但シ燒灼ハ際熾熱
ヲ以テス可カラズ否ラサレハ術後后出血ヲ来スノ
虞アリ上文屢述ベクカ如ク直腸内ニ於ケ
ル后出血ハ甚シク危険ナルヲ以テ常ニ最ニ注意
セサル可カラズ(九尾山氏ハ此後山血ヲ防カシカ為
燒灼前豫メ腸線或ハ絹絲ヲ以テ結節ノ基
根部ヲ結締セリ燒断後稍々大ナル血管ヨリ
出血スル片ハ別ニ之ヲ結紮セサル可カラズ)

○後療法

トシテ專ラ流動性食餌ヲ與ヘ、
阿片ヲ投シラ便通ヲ止メ疼痛ハ氷罨法
ヲ施シ或ハモルヒネノ皮下注射ヲ行フ斯クテ術
後五六日ヲ経ハハ薄荷子油或ハ浣腸ニ由テ

通利ヲ得セシム可シ

茲ニ注意ス可キハ痔核ヲ燒断スルニ際シテハ十分
肛門部ノ皮膚及粘膜ヲ保存セサル可カラザレバ
是ナリ否ラサレハ後癥痕ニ由テ肛門狭窄ヲ来
スノ惧アリ

(三) 切除法ハ鉗子ヲ用サテ痔核ヲ撮ミ牽リ剪
刀ニテ之ヲ切除シ止血ノ後創縁ヲ縫合スルノ
法ニシテ往時ハ此法ニ由リ創口ノ膿潰ヲ来シ
或ハ栓塞性靜脈炎ヲ起シ膿毒ニ陥ルヲ
恐レタリト雖創瘡法ヲ嚴密ニスルキハ此ノ如
キ危険ヲ招来スルヲ無キモノトス

(四) 結紮法ハ絹絲或ハ護謨絲ヲ以テ結

縛スルノ法ニテ現今殆ト之ヲ用ズルヲ無シ

肛門及直腸癌腫

癌腫ハ肛門或直腸内ニ於テ鏡ク限局セル結節
ヲ形成スルヲアリ或ハ稍ハ蔓延性ノ乳嘴状癌
殖物ト為リ或ハ輪状ニ發生スルモノニテ殊ニ直
腸癌ニ在テ早ク硬固ノ浸潤ヲ觸ルヲ特異ト
シ次テ直ニ分解シテ潰瘍ト為リ其底面及辺
縁ニ硬結ヲ呈ス蓋直腸癌ハ多クハ腺癌即
チ円柱細胞癌ニ屬スルモノニテ始メ腺管ノ異
殖ニ由テ腺腫ヲ發生シ次テ上皮性細胞ノ遠型
的暴殖ニ因リ癌腫ト為ルモノナリ之ニ次クモノハ
硬性癌及殊ニ膠樣癌ニシテ後者ハ間ニ廣
大ニ灰白膠樣ノ暴殖物ヲ形成スルヲアリ肛

門粘膜ニモ亦円柱細胞癌ヲ生ズルコト多クシテ
肛門外皮ニ多クハ扁平上皮癌ヲ發ス

直腸癌腫ハ速ニ直腸狭窄ヲ來スモノニシテ
窄漸次増進スルニ其上部ニ大便滯積ス
ルヲ以テ直腸擴張セラルル而テ癌腫性浸潤
益ニ増進スルニ隣接器官ト癌著シ遂ニ破
潰シテ膀胱、攝護腺、膣子宮等ニ穿孔ヲ來
シ又腹膜内ニ穿孔スルコトアリ 继發性癌結節ハ
殊ニ薦骨窩部、淋巴腺ニ來リ又門脈血行ニ
由リ肝臟ニ來ルモノナリ

△症候 直腸癌ノ症状中最顯著ナルモノヲ
便通障碍ト為ス是レ腫瘍ノ為直腸狭窄

交ニ下痢上便秘

榮養不良
血液膿ノ排泄
惡臭便
衰弱、惡液
大便失禁

大便蓄積スルヲ以テ為ニ加テ見テ起シ交ニ下痢
ト便秘ヲ來スコトアリ又狭窄上部ノ直腸粘
膜瓣狀ヲ為シ互ニ閉合スルニ至ルコト大便秘
ヲ妨クルコトアリ而テ癌腫性浸潤益ニ増進スルニ
益ニ便通ヲ妨ケ患者亦十分食餌ヲ取ル
能ハサルヲ以テ漸ク榮養不良ヲ來シ次テ其浸
潤崩潰スルニ至リ排泄物中ニ血液及膿ヲ混シ
且腫瘍ノ顔敗物ヲ混シテ甚キ惡臭ヲ放ケ
患者益衰弱シテ惡液質ニ陥ル而テ疼痛ハ之ヲ
訴フルモノ有レシ又始メヨリ之ヲ訴ヘサルモノアリ又
肛門上際ニ癌腫ヲ發シタルモノニ在テハ早ク大便ハ失

禁ヲ奉スモトス

診断 直腸内ニ指ヲ送入シテ触診スルキハ殆ト之ヲ確診シ得可シ即チ指頭ニ或ハ柔軟ナル或ハ硬固ナル結節状ノ腫瘤ヲ觸レ或ハ蔓延性菌状ノ異殖物ヲ觸レ或ハ底面及邊緣ノ硬ク浸潤セル潰瘍ヲ觸レ可シ但シ炎症性潰瘍ハ往々微毒性潰瘍ト誤診セ易キヲ以テ疑似決シ難キハ其一片ヲ取り顕微鏡的検査ヲ施シ又試ニ驅蠶療法ヲ行フ可シ此他類症鑑別上注意ス可キモノハ直腸ノ炎症硬結直腸周囲炎痔核直腸茸腫等ナレモ患者ノ年齢既往及現時ノ症状ヲ審シ且精密ノ觸診ヲ施スル之ヲ誤診スルコト無シ

豫後 他部ノ癌腫ニ均シク不良ナリ手術ヲ施サバルキハ通常一乃至二年内ニ死セシメ早ク腫瘍ヲ摘出スルキハ永久的治療ヲ得ルコト少カラズ之ヲ統計ニ徵スルニ摘出後再發セモ約六〇%ニシテ多クハ一年以内ニ在リトス

療法 前及的早ク腫瘍ヲ摘出スルニ在リ即チ直腸ノ切除術及摘出術ヲ行フ是ナリ蓋シテ時ハ直腸内ニ指ヲ送入シテ癌腫ノ上方ニ指先ヲ達シ得ルモノニ限り手術ヲ行フヲ常規トセリト雖較近ニ至リ致多ノ改良ヲ經テ大ニ手術ノ領域ヲ擴張セリ即チ直腸上部ノ癌腫ニ在テモ膈骨ヲ切除スルキハ手術面ニ達スルノ最容易ナルト又可及的創

口ノ縫合ヲ減少シ創内ニヨドフォルム綿紗ヲ栓塞
シテ創液ノ排泄ヲ便ニシタル等ハ其改良ノ主眼ニ
テテヤ痛腫ノ上方ニ向テ蔓延シタル度ハ以テ手術
ノ適否ヲ判定スルノ標準ト為サズ手術ノ適否ハ
寧ろ腫瘍ト其周囲組織ト癒着ノ有無ニ由リ
之ヲ決定スルニ至レリ故ニ麻醉ヲ施シ直腸内ヲ検
査スルニ癌腫高部ニ位シテ既ニ固ク其周囲ト癒
著シ移動セザルモノハ固ヨリ手術ヲ施スニ適セザル
ヲ以テ直腸ノ狭窄高度ナルキハ時宜ニ由リ結腸
瘻ヲ造リテ大便ノ排泄ヲ謀ル可シ是レ之ニ由テ
大ニ患者ノ苦痛ヲ除キ得可ケバナリ

第七章

歇爾尼亞

第一

名義、解剖、原因

名義 ハルミアトハ腹壁自然ノ孔隙或ハ異常
即チ病理的孔隙ヲ經テ腹内臓器腹腔ヨリ脱墜
シ其全部或ハ一部腹膜ヲ以テ被覆セズモノヲ
謂フ是レ即チ脱出ト異ナル所ニシテ所謂脱出ニ
在テハ内臓器ハ異常ノ孔隙ヨリ脱墜スルモ皮
膚或ハ腹膜ヲ以テ被覆セズ一ニ無ク直ニ外氣
中ニ裸出ス例之ハ腹壁切創ニ由リ腸管ノ一部
其創口ヨリ脱出スルガ如キ是ナリ抑モ下ニ有
テ語ハ元々希臘語ニシテ枝或ハ木癩癩ノ義ナ
リ独逸語ニテハ貌留便ト云フ蓋シ破裂ノ義

ニシテ古人ハ腹膜ノ破裂ニ由テ本症ヲ来スモノナラント
想像シタルニ因ル。然レモ一ニあるハ假令外傷ニ
統テ発スル一アモ腹膜ノ破裂ニ因ルモノニアラス。腹
膜ノ一部腹腔外ニ壁出セルカ或ハ始ヨリ其一部
腹腔外ニ脱シテ囊状ヲ為シ其内ニ内臓器ノ
脱墜ニモナリ而テ一ニあるニ外表即チ外皮ハ
下ニ現出スルモノアリ或ハ腹腔内ニ留止スルモノアリ
前者ヲ外へるニあるト稱ス例之ハ臍へるニある
鼠蹊へるニあるニある等ノ如シ後者ヲ内へる
ト稱ス例之ハ腹膜内へるニある、腹膜右へるニある
横隔膜へるニある等ノ如シ但シトキニ章ニ説ク所ノモノハ所
ニ就テハ別ニ
之ヲ述ベ可シ

歇爾尼亞ヲ構成スル解剖的部々

シ區別シ

テ尤ノ數種ト為ス

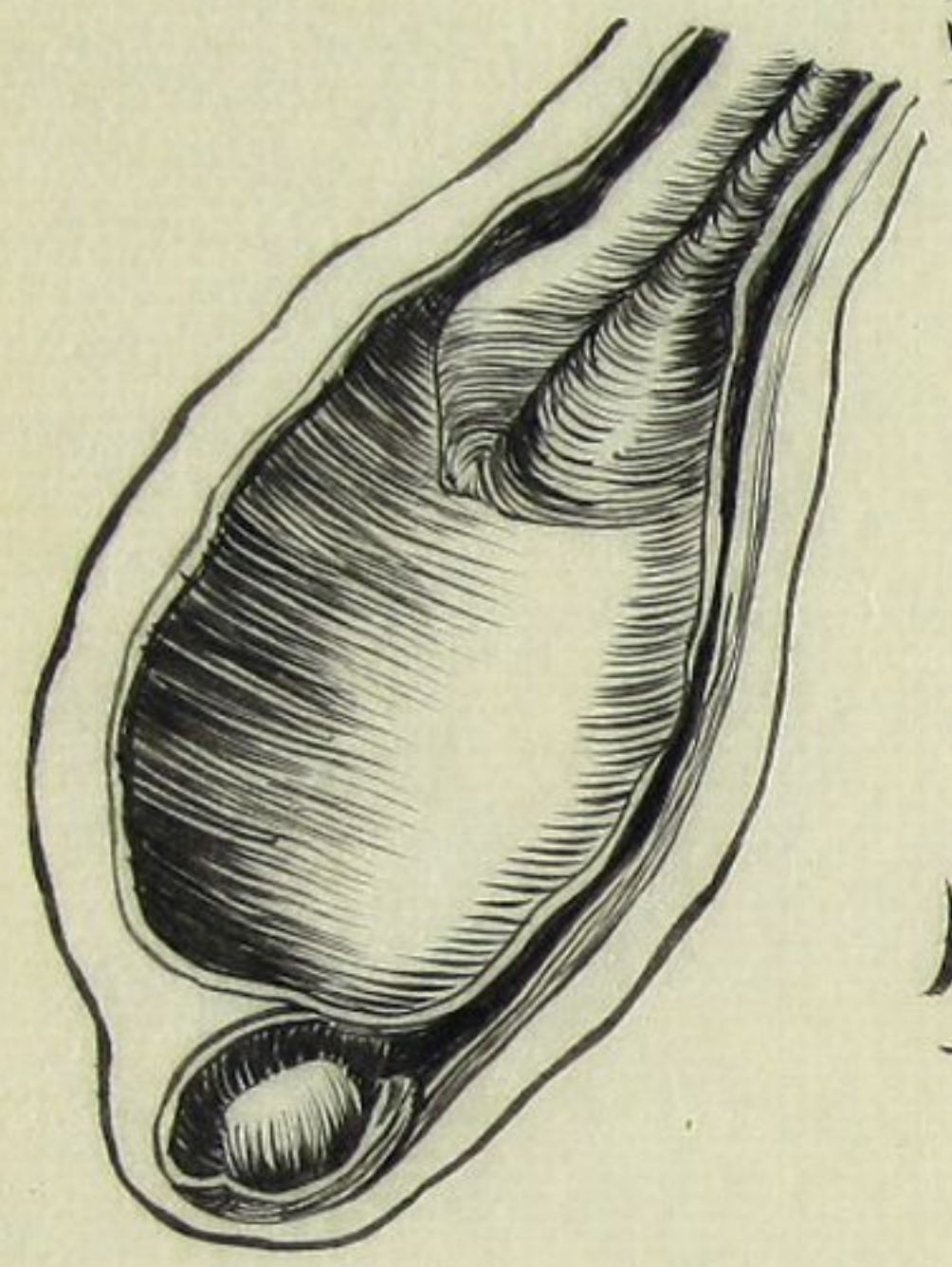
一歇爾尼亞門

脱墜スル門口、裂隙等ノ謂ニシテ其所在ノ部位ニ
由リへるニあるニ各種ノ名稱ヲ下ス 例之ハ鼠蹊
管ヨリ脱墜スルモノヲ鼠蹊へるニあるト稱ス
股ヨリスルモノヲ股へるニあるト稱スルガ如シ

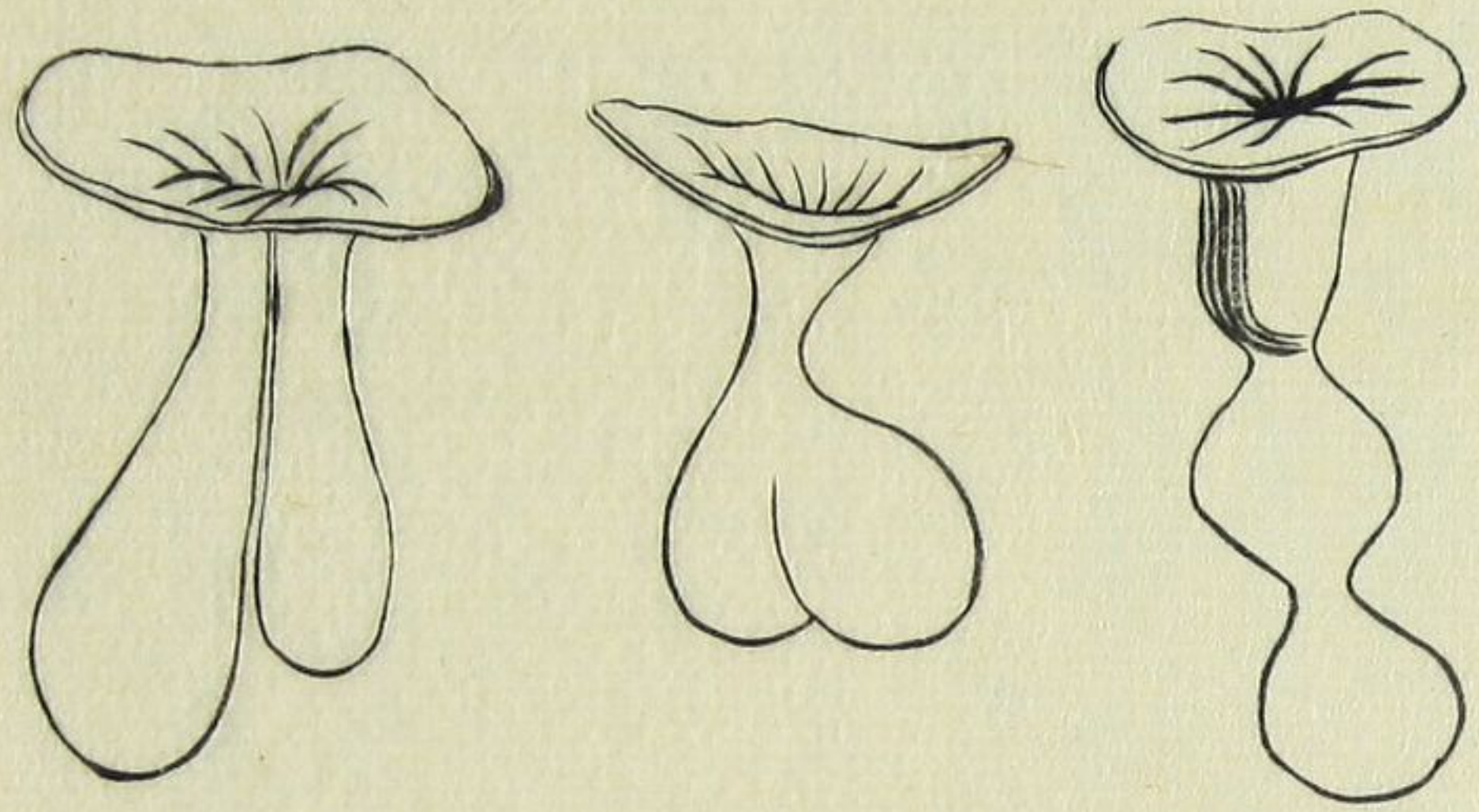
二歇爾尼亞囊

トハ内臓器ノ腹腔ヨリ
脱墜スルニ當リ之カヲ
ニ逼迫壁出セラレ囊
状ヲ為ス所ノ腹膜ノ

歇爾尼亞囊ノ頸
基底及脚部ヲ示ス



種々ノ歌浦尼亞囊



具アリ(所謂珠數狀歌浦尼亞囊)又時トシテハ
 一個ノ歌浦尼亞ニシテ數多ノ囊ヲ有スルモノアリ殊
 ニ先天性鼠蹊歌浦尼亞
 ニ於テハ一囊ノ側方ニ於
 テテニノ囊ヲ具スル
 アリ所謂複歌浦尼
 亞囊是ナリ(上圖)而
 テ本症ニ於テハ一囊
 頭全ク閉鎖シテ囊内
 ニ流動液瀦溜シ恰モ
 陰囊水腫ノ状ヲ為シ
 以テ陰囊水腫ニハるニ

一部ニシテ之ヲ左ノ三部ニ區別ス即チ頭部、基底
 部及軀部是ナリ(前圖ノ如シ)
 へるにあ囊頭ノ上部ニ位シへるにあ川中ニ在テ
 囊中居モ細シ囊ト腹腔ト交通スル所ナリ而テ
 其形狀へるにあ門ノ形狀ニ從フモノニシテ輪狀ノモ
 ノ管狀ノモノ、廣濶ノモノ、狭小ノモノ等種々アリ
 へるにあ囊ノ内面ハ他ノ腹膜ノ如ク滑澤ニシテ滋
 潤スルモ囊壁ハ刺戟ヲ著ク肥厚スルコトアリ或ハ
 大丸へるにあニ在テハ囊壁甚菲薄ト為ルコトアリ
 而テへるにあ囊ノ形狀ハ其部ノ解剖的性状ニ
 由リ甚異ナルモノニシテ或ハ壘子狀ナルアリ或ハ梨
 子狀ナルアリ或ハ円塊狀ナルアリ或ハ絞約部ヲ

ニテ殊ニ左側へるにあに来り此他盲腸及
様突起モ間下腹ノ右側へるにあ中來りア
レ左側ニ於テ之ヲ牽引ス小腸ト共ニスニアラサ
ハ決ラ来り一無ニ罕ニ膀胱子宮卵巢
遊走腎等へるにあ囊中ニ脱墜ニ且屢之ト
癒着ナルヲアリ又洞大孔門ヲ具フル巨大ノ
るにあニ在テハ腸管ノ大部胃脾臟肝
臟等囊内ニ入リテ倒ニバ大ニ臍へるにあ
或ハ腹へるにあニ於ケルガ如シ

へるにあ囊中ニ又多少液射シハ畜スルモノニ
シテ小ナルモノニ在テハ從テ其量甚ダ少ク只僅ニ其
内面ヲ滋潤スルニ足キザレバ大ナルモノニ至テハ稍
多量ノ液射ラ有ルヲアリ又へるにあ囊中空
虚ニシテ内臓器ヲ容ルルモノアリ是レ殊ニへるにあ
あの内ノ癒着ニ申リ閉鎖セルモノニ睹ル所ニテ此ノ
如キモノニ在テハ恰モ囊腫ノ如ク漿液ヲ充テテ多
シ所謂虚性へるにあ囊是ナリ

病的状態例之ニハへるにあノ嵌頓セルモノニ在テハ
靜脈瘀血ノ為へるにあ囊中ニ多量ノ漿液
ヲ滯溜ス所謂へるにあ本是ナリ此他へるにあ
囊中ニ血液膿腸ノ内容ヲ容ルテアレバ
是等ハ共ニ皆病的ニ屬ス

原因 へるにあ發生ノ原因ニ就テハ種々ノ
理由アリ是レ之ヲ素因及誘因ノニ種々ニ

一區別ニテ論ズルヲ可トス

へるに有發生ノ素因ニ由ニ種様アリ即チ一ハ腹壁ニ具スルモノニテ一ハ内臓器ニ具スルモノ是ナリ

腹壁ニ具スル素因中ニ屬スルモノ胎兒否

娠ノ時期ニタリ既ニ閉鎖スルキ腹壁ノ孔隙尚全ク閉鎖セザルモノナリ是ハ腹壁局所

ノ先天性發育障礙ニ基クモノニテ例之ハ氣管管或ハ膈輪閉鎖スル之ヨリ腹壁ノ腔

出シ漸ク腸管ハ腔腔ヲ成スガハシ或ハ又腹壁ノ孔隙一クニ閉鎖スルモ其閉鎖定全ク

ラズルニ或ハ後固ニ由リ一ニハ有ラズルアリ例之ハ屢々次ノ妊娠腹水等ニ於ケンガ如

又腹壁腹膜ノ漿液膜下蜂窩織内ニ發生スル脂肪腫所謂腹膜前脂肪腫ハ一ニ

ニハ有發生ノ就言フ及ガク一ニカカス是此腫瘍ハ腹壁ヲ患狀ニ外方ニ向テ牽

引シ以テ一ニハ有囊ヲ形成スルアリバナリ腹壁一定部ノ解剖的状況ニ由リ一ニハ

ノ發生ニ由リ大ノ關係ヲ有ス例之ハ腹壁ノ抵抗カ減少、外傷又ハ手術(開腹術)

後ニ於ケル瘻管形或ハ如キ是ナリ他腹壁ノ外傷腹膜或ハ膈膜ノ破裂ニ由リ

腹内臓器平ニ垂位ニシテ一ニハ有發生

壁腹膜ハ解剖的毒因リ具フニ部位ニ
於テ蓋ニ压迫セシ腹膜ノ突生部ヲ作り
以テ内臓器ハ淋沁其中ニ駆メセラルニ
ル又時トシテ内臓器ハ或偶然ノ原因
ニ由リ俄然既ニ存在スルニ至ル
中ニニルリアリ (以上新纂外科各論所載)
一ルニアノ突起ニ就テ古來種々ノ學說アリ
ト雖要スルニ其說ノ所ノ基因ハ腹内臓器
弱甚ク腹内ノ為ニ強逼セラレ腹壁中抗抵
微弱ノ部ニ向テ逸出スルニトテ理ニ帰セザレ
カス

一ルニア患者ノ多少ニ就テハニルゲンハ言ハリ健康

人世人乃至世人ニ一人ナリト又ウエルルハ四十人
乃至六十人中ニ一人ヲ見ルト本邦ニ於テハ未ダ
此比例ヲ得ニシモ千ニ唯徴兵適齡者ニ
於テハ統計アルニ即チ陸軍省醫務局
年報ニ據ルハ明治二十年ヨリ廿二年ニ至ル三
ケ年間ノ平均全國換丁百四十四人中一人ノ
一ルニア患者ヲ出スル率十ト為レリ

第二 一ルニア證候ノ通論

一ルニアノ証候ハ其発シテ所ノ部位ト其種類
ト大小トニ從テ各々差異アリト雖モ要スルニ先
ヅクヲ可叙的一ルニアト不叙的一ルニアトニ分ツ
テ述レシ便ナリトス

腫瘤

ハニテ門觸知

鼓音
職業障礙
消化不良
便秘忘痛

(甲) 可動的ヘルニア 特ニ停止、歩行咳嗽
等ハ時ニ當リ其部ニ一定ノ腫瘍状ヲ呈ス
ルモ平臥スレハ容易ニ腹内ニ還納シテ其形
ヲ失フモノナリ 此時指頭ヲ以テ其部ヲ摸索
スルニ腹内ニ腫ル等ヲツテ特ニ
ニ門ヲ觸知シ得テ尚ホ之ニ指頭ヲ壓
進スレハ腹内ニ入ルヲ感ズ 又其逼出シ、時
ニ於テ腸内ニカハ概シテ網膜トシテモ
柔軟ナルヲ常ニ加之腸内ニカハ打診音
ハ鼓音ナルヲ多シ 其他職業障礙消化
不良、便秘、疝痛等、證候ヲ来スモノト
ス殊ニヘルニア帯ヲ施サズルモノニアラズ 往ニ箱
頭ニテ還納スルヲ局部終ニ壞疽ニ陥リ腸ハ穿
孔ヲ来シ汎發的腹膜炎ヲ發スルノ危険アリトス
又以上述ニ所如キヘルニアノ箱頭ニシテモニアラズ
シテ外傷等ノ為ニ炎症ヲ發スルヲアリ然ルキハ
ヘルニア囊ノ肥厚又ハ囊ト内容物ト癒着或ハ
内容物相互ノ癒着等ヲ来シ間ニ不納的ヘルニア
ト為ルヲナキニアラズ

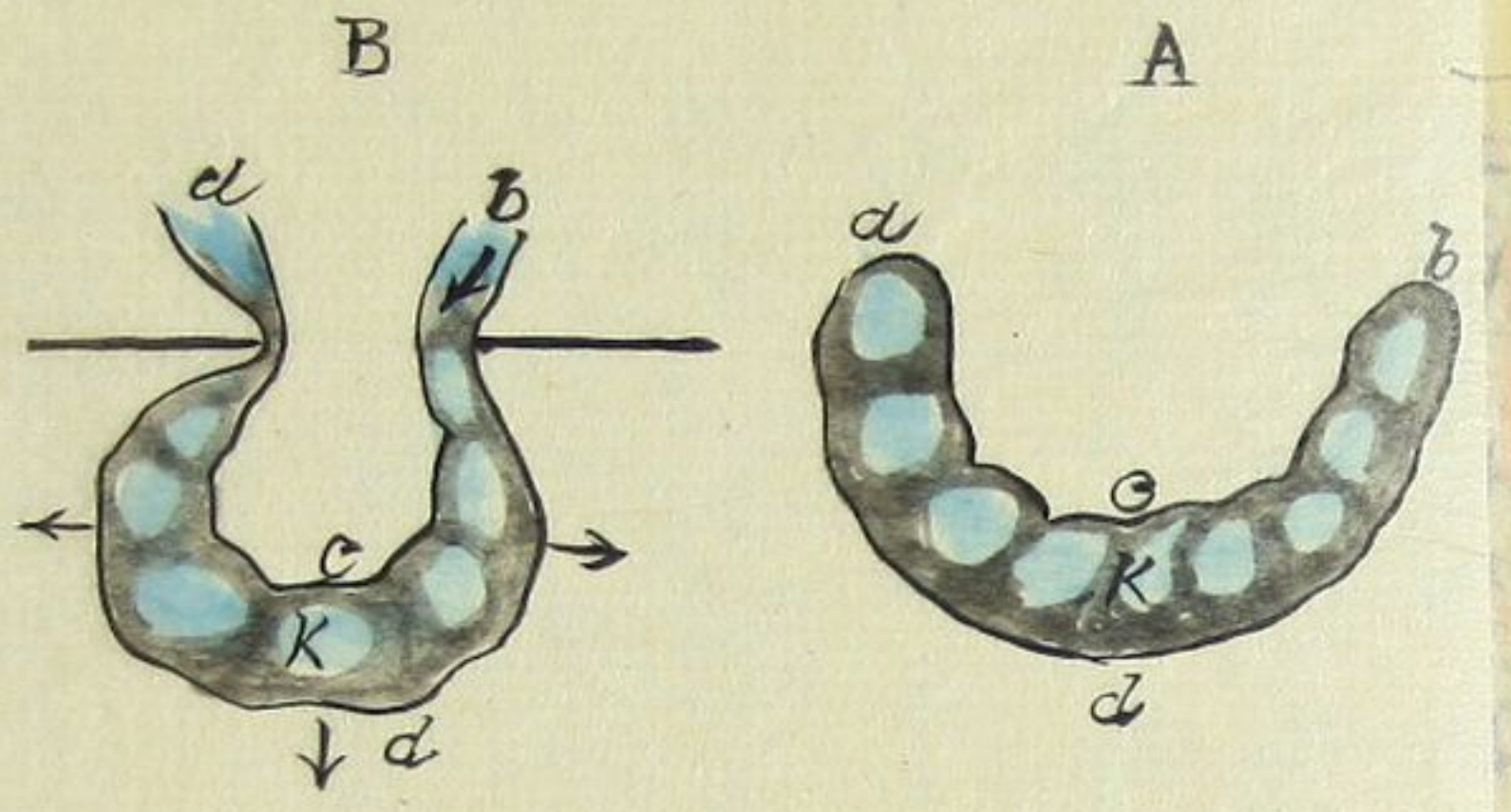
(乙) 不納的ヘルニア 其発起スニキ理由ハ概シテ
次ノ如シ

- (一) ヘルニア囊ト其内容物ノ癒着
- (二) ヘルニア囊内ニ在ル網膜ノ結節状肥厚
- (三) 盲腸部或ハS状部、其附属腸間膜

ト共ニルニア囊内ニ陥入シ移動容易ナラザルヤ
 (四) ヘルニア門及其頸共ニ過大ニシテヘルニア帯
 ラ施スモ尚ホ脱出ラ免レザルヤ
 (五) ヘルニアノ箱頭ホ之ナリ 以上ノ諸原因中箱
 頭症ハ甚ク危険ニシテ最モ主要ナルモノナルヲ以
 テ特ニ一節ヲ設ケテ次ニ述ントス

第三 箱頭ヘルニア

其発起ニ就テハ種々ノ學說アリ尤ノ如シ
 (一) スカルパ及シヤセナリ氏ノ屈折說 トヘルニア
 囊内ニ在ル所ノ腸管殊ニ其退出脚ヘルニア門
 ニ於テ屈折スルトスアリ 近時ブツニ氏ハ此說
 ヲ醫學上即チ動水學上ノ關係ヨリ證明セリ



即チ上圖(A)ノa bノ屈折管ハ
 ルニア)囊内ノ腸管ニ誤ルルニ
 一定度ノ力量Kヲ以テ水或ハ
 空氣ヲ充填スレハ一定度ノ力
 量K c及K dハ屈折管ノ凹
 側壁及凸側壁ニ向ツテ働
 クニシ蓋シ斯ル屈折管ニ及ス所
 ノ壓力ノ負重ハ凹側壁c
 ニ於テヨリモ凸側壁dニ向ツ
 テ強大ナルモノトス然ルキハ其屈折管ハ將ニ直伸セント
 スルノ傾ヲ来スヤ必セリ故ニ今ヘルニア囊内ニ在
 ル所ノ腸管ニ於テモ亦其内容物ノ増加スル力為ニ

要スル此三説ハ共ニ腸管ノ脱々部其内容
為ニ充實緊満セラルル場合ニ於テノ理解
スルニト虽凡脱々部率リニ空虚ナル場合ニ
於テモ亦能ク箱頭スルニアリ是依然腹圧ノ劇
進スル勢ニ乘ジ腸ノ一皮極メ細キヘルニア門
外ニ滑利迫脱シ腹圧ハ次テ减退スルモ脱
出部ハ細キヘルニア門ニ後搾セシ再ニ帰納
スル能ハスシテ茲ニ箱頭ニニアリ又已ニ前ニ
述ベシカ如ク捻換箱頭ハ素ヨリヘルニアニモ米
ルニキモノトス

證候

從來可叙的ニラナリ之所ノモノ
頭カニ不納的ニルニナリ未ルハ箱頭ヘルニア

ニ於ル初兆ニテ抵抗及ビ痛感ノ増進加之二
重テ来ルヲ居多ナリ是レ箱頭セシ一腸管
ノ充實緊満ニト急性炎ノ發起スルト尚ホ之
ニ箱頭ニ、腸壁ニ靜脈的鬱血ヲ来シ為ニ
ヘルニア水ノ滲漏ヲ兼スルニ由ルモノナリ而テ此ヘル
ニアノ炎症増進ニ在テ皮膚ニ終ニ蜂窩織
炎状ノ引赤腫脹ヲ呈スルニ至ル之ニ次テ頭發
シ来ル所ノ證候ハ便秘嘔吐吐糞及ヒ虚
脱等總テ腹内腸管壅塞症ニ於ルト一般
ナリ此時ニ當リ若シ箱頭ニ腸管ノ疏解ス
ル無クシニ其部終ニ壞疽ニ陥リ腸ハ穿孔
シ汎膿腐敗性腹膜炎ヲ發シテ斃ルニ至

此ル幸と死ラ免カレ、モ、ニアラテモ糞瘻(假
肛門)ヲ胎スラ常トス蓋シ斯ク箱頭シ、所
ノ腸管ノ始終ヲ見ルニ初メ先血シテ赤色ト
為リ次テ暗赤色、赤褐赤、暗青色等漸次
ニ変色シ進ニ終ニ壞疽ニ陥クシ片ニ既
ニ黒色ト為リ了ルモノナリ

其他熱発ノ証候アリ此弛張ニ敢テ箱頭
ヘルニアニ於ル危険ノ度ヲ判知ス能ハスト是レ
脈性ニ至テハ極メテ特異ナモノアリ即チ其
搏動無常甚クシク頻數ニシテ脈波
頗ル低シ是レ腸ノ知覺神經過度刺
衝ヲ蒙ルルカ為ニ筋力及射的麻痺有リ

ルモノナリ彼ノ稀ニ心臓麻痺ノ為ニ頓ニ死亡ス者

ノ如キハ其原因蓋シテ存セズバアラス

網膜ノ箱頭ニ於テモ疼痛、糞尿停滞、
嘔吐等ノ諸症ヲ呈スルモ腸管ノ箱頭症ニ比ス
ルニ輕度ナルヲ常トス

預後 箱頭腸ヘルニアニシテ速ニ疏解スルヲ

トサレハ心臓麻痺ノ為ニ斃ル、カ若クハ局部壞
疽ニ陥リ腐敗性腹膜炎ノ為ニ死セラルニ至ルニ
ニ幸ニ機ニ投シテ手術ヲ行ハバ九死ヲ一生ニ
故フコトヲ曰フ

又箱頭網膜ヘルニアニシテ**預後**概シテ吉ナ
ルヲ常トス

第四 箱頭ヘルニアノ治法

箱頭ヘルニアノ治法ニ血的ト觀血的ノ二法アリ
但シ血的ノ手術ヲ行ハばハキモハ箱頭ニハ
腸管ノホダ太キ營養障礙ヲ蒙ラザラ確認
セシ時ノミニアリ

○(甲)血的還納法 ヘルニアノ種類ニ從テ多

少ノ差異アリト雖モ左ノ方法ハ之ガ通則ナリ即
チ患者ヲ仰臥セシメ骨盤部ヲ擡起シ膈膝
兩溪節ヲ屈曲シテ(只坐骨ヘルニアニ下肢ヲ展伸
シ卵内孔ヘルニアニ下肢ヲ屈曲シ且ツ之ヲ外送ス
ルヲ利アリト)腹壁ヲ減ジ而テ特ニ大ナルヘルニア
ニ於テ先ヅヘルニア門際ニカサハカ腸管ノ還納

ヲ圖ルニ即ケヘルニアノ根蒂ヲ撮リ少シク之ヲ
牽引摺動シテヘルニア門トノ疏解ヲ試ミ次テ
両手ノ指頭ヲ以テヘルニアノ根蒂ヲ均等ニ押
壓シテ箱頭ニ腸管ノ内容物ヲヘルニア門ニ
(腹内)ニ壓送スニ此時ニ當テヘルニア内ニ於ル
腸瓦斯ノ陰々声ヲ放ツテ腸内ニ滯流シヘルニア
為ニ稍ニ縮小スラ見バ手術ノ成就ハハキ兆ト
知ルニ

以上ノ方法ヲ補助スルガ為ニ種々ノ前備法ヲ施
行スルコトアリ孰中麻醉法ノ還納ニ難キハ於
テ之ヲ施スラ常トス是レハ血的還納法ノ
既ニ效ナキヲ見ルニ於テハ直チニ觀血的ノ手術ニ

移りしるノ便アリナリ又全身濕浴、依的見入
局所麻酔等ヲ實用スルモナリ其他ノ補助法
ハ及テ害アルモ益見ナリトシ彼ノ氷罨法ヲ施ス
ガ如キハルニア門際ニ莫見比涅ノ注入ヲ行フガ
如キ刺戟洗腸ヲ施スガ如キ套管針ヲ以テ箱
頭ニ腸管ヲ穿刺シ其内容物ノ吸出ヲ圖
ガ如キホ、畜ニ徒勞ニ屬スルノミナラズ時間ヲ多
費スルヲ以テ彼ノ觀血的手術ヲ行フノ時機ヲ
失セシムルモノナリ

乙 觀血の還納法 (ハルヲ切開術)

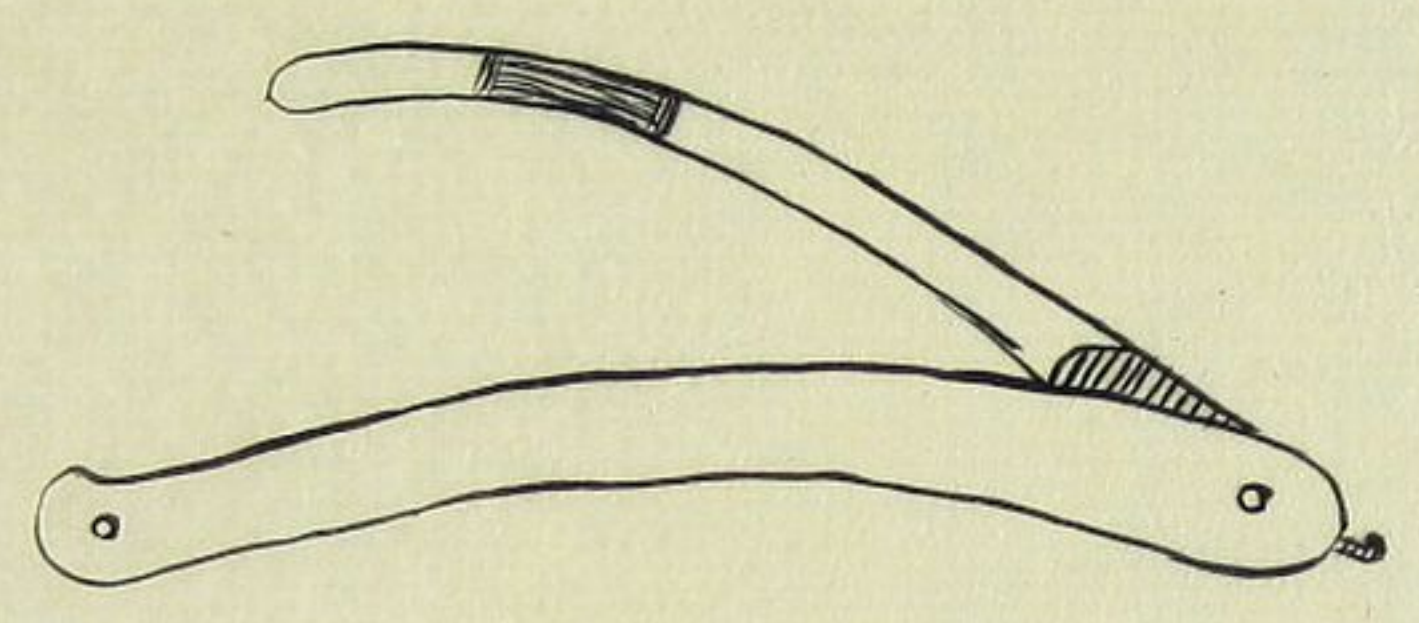
既ニ無血の還納法ノ目的ヲ達スルノ能ハシ場
合着クハ箱頭後ノ時且水キカ為其部管

管大ニ障礙セシム到底還納スルカラス時ニ於テ
之ヲ行フモノナリ夫レハルヲ切開術ハ恰モ腹壁切
開術ヲ行フト一般嚴密ナル防腐法ヲ以テ着
手セザルベカラス其手術順序ハハルヲ囊ヲ
被覆スル組織ノ切開(一)ハルヲ囊ノ切開(二)
ハルヲ切開(三)還納之ナリ
(一)皮膚ノ切開ハハルヲ腫痛ノ長大徑ニ沿テ行
ヒ謹慎ニシテ組織ヲ層々ニ切り進ミハルヲ囊
ノ外面ニ達スルニ然レバ性々ハルヲ囊ヲ各見容
易ナラザルヲ之アリ然ルカ示指頭ヲ挿入シテ後
推シテ所ノ輪環ニ達スルヲ以テハ既ニ該囊ヲ
切開セシ確證ナリト知ルベシ

(二) ヘルニア嚢ヲ切開スルハ既ニ露呈シテ所ノ嚢壁ヲ銀子ヲ撮起シ一皺襞ヲ作り其皺襞ノ根部ニ刀尖ヲ加ヘ一孔ヲ穿ツニ然ルハ勿クハヘルニア水ノ迸出スルヲ見ルニ茲ニ於テ球頭嚢又カク其小孔ヲ送り嚢ヲ廣ク切開シ尚ホ示指ヲ道子トシテ嚢壁ヲヘルニア門際ニ至ルニ鉄剪スベシ次テ

(三) ヘルニア門ノ切擴ニ移ル此ニクル氏式ヘルニア刀(次ノ圖)ヲ以テ行フラ山當ナリトス然レモ球頭嚢又カクニ絆創膏ヲ纏絡シテ之ニ類似シテ製シテ代用スル者アリ其法ヘルニア刀ノ刃部ヲ左示指ノ指腹ニ平カニ抵テ此示指ヲ道子トシテ刀ト共ニヘルニア

門ニ送り既ニ恰好ノ部ニ達スレバ茲ニ刀柄ヲ廻轉



シテ刀ノ刃ヲ門縁ニ向シテ之ヲ切擴スルニアリ既ニ切擴シテハ腸ノ絞搾モ緩解スルヲ以テ之ヲ引き出し精シク其營養障礙ノ度ヲ検査スベシ凡テ箱頓シテ所ノ腸管ハ其壁、暗赤色ナルヲ常トス其黒色或ハ黒青色トナルハ既ニ壞疽

ニ陥リシ所ノ確徵ナリトス若シ疑似決シ難キハイトナゲル氏ノ法ニ從ヒ絞搾部以上ノ処ニ食塩末少許ヲ撒布シ試ムヘシ之ニ由テ發起スル蠕動機

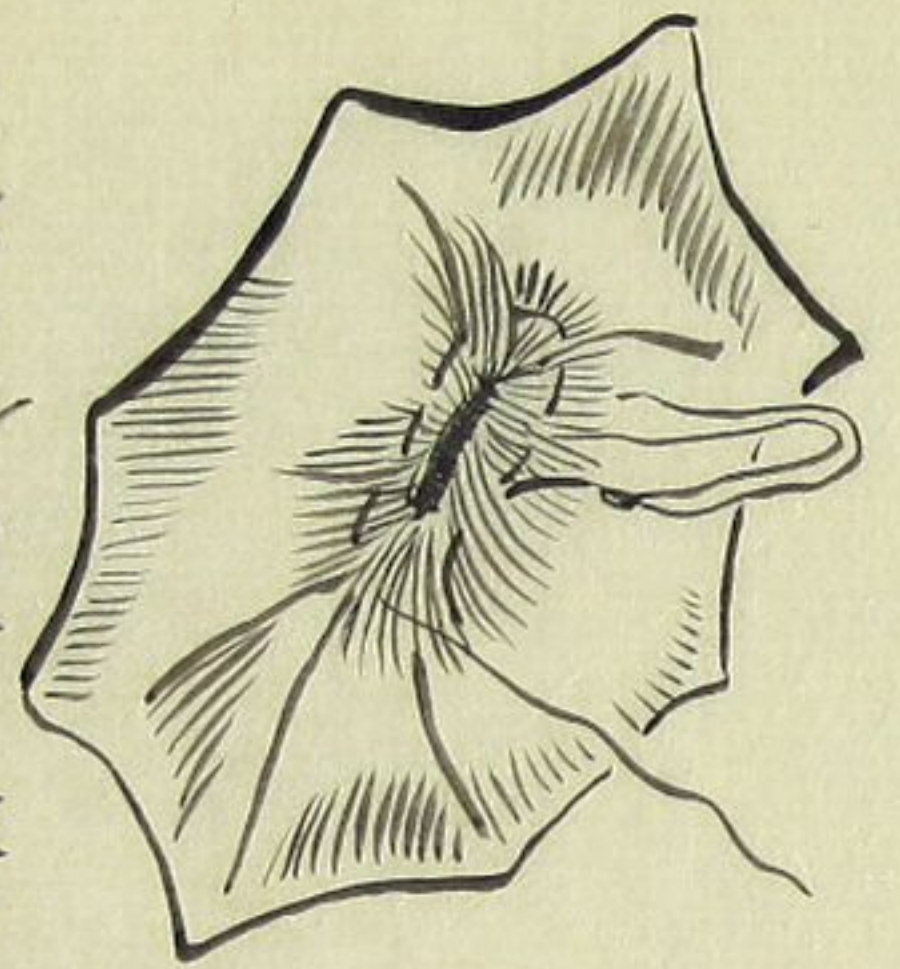
ノ尚ホ後控部以下ニモ及ブキ未ダ壞疽ニ陥ラ
 ザルヲ證タリ
 四) 還納法ヲ施ス未タ壞疽ノ微ナキモノ限ルヘシ
 即チ更ニ精密ノ消毒ヲ行ヒ直ニ復納シ進テ
 其根治手術ヲ行フヘシ(其法次節ニ詳カナリ)
 若シ茲ニ壞疽ノ疑アルハ宜ク假ニ其腸管ヲ
 ヘルニア門ニ縫結シ置キ以テ其活機ノ如何ヲ
 試ムヘシ若シ壞疽ノ微候確然タルハ決シテ還
 納スヘカラス速ニ假肛門切造術ニ移ルヘシ

第五

ヘルニアノ根治法

前節既ニ記載シテ所ヘルニア切開術ヲ行ヒ殊ニ
 其腸ヲ還納シテ尚ホ之ニ根治法ヲ追加ス

ルナリ然レバヘルニア嚢ヲ其周囲組織ヨリ剝
 離シ嚢頭ニ於テ進行的纏絡縫合ヲ為シ
 縫糸ヲ一周シテ之ヲ後括ル一恰モ巾着ノ口
 ヲ後ルカ如ク結ビ(圖ノ如シ)而テ嚢ノ殘部ヲ



別除シ排漏管ヲ装置シ密
 封乾燥綿帶ヲ施スヘシ

又ヘルニアノ箱頭ニニアラサルモ其若
 大ナルカ為或ハ嚢壁下内容物ト癒
 着セルカ為或ハヘルニア帶ヲ以テ圧住

シ能ハザル者亦ニ於テ根治法ヲ行フナリ其順序ハ前記箱
 頭ヘルニアニ於ケルガ如ク皮肉ヲ切開シヘルニア嚢ヲ開キ其
 内容ヲ是レニ嚢頭ヲ結締スルナリ

第六 臍ヘルニア

臍ヘルニアハ内臓ハ臍輪ヨリ逼ルモノヲ云
フ而テ先天的臍ヘルニアハ胎帯ヘルニアニシテ
其脱出シテ所ノ内臓ハ腹膜ヲ蒙ル下ナク臍
帯内ニ在リ但シ其内内容物ハ多ク腸管ナルヲ
常トス

小児ニ於ケル臍ヘルニアハ出生後初メ六ヶ月ニ
多シトス此症ノ発起スルヤ分娩時ニ近キニ
從ヒ其増大速カナルモ分娩後日ヲ經ルニ從
ヒ其増大甚カクモトス蓋シ其原因ハ腹壁ノ強
勢例今ハ叫泣咳嗽等ニアリテ多クハ射管虛
弱ノ小児ニ在ル其形状ハ球状若クハ円錐形ナ

リ而テ其遷行ハ容易ナリトス

壯者ニ在ル所ノ臍ヘルニアハ幼時ヨリ発起シタルモ
少ク多シトス然レモ婦人ニ在テハ妊娠ノ時ニ於テ初
メテ之ヲ生スルコトアリ其大サハ種々シク大ナルモノ
ニ至テハ稀ニ大人頭大ニ達スルモノナキニアリ又ハ
ルニア門ノ瘻竅モ一定ス時ニテ拳ヲ通スベ
キ大サニ及ブモノアリ

臍ヘルニアノ内内容物中最モ多キハ網膜ト小腸
ニシテ横行結腸之ニ至リ而テ此ヘルニアヲ包裹
スル所ノモノ皮肉皮下結組織、固有筋膜
及ヒ腹膜ナリトス其厚薄ハ人ニ由テ差異アリ
素ヨリナリ此症時トシテ囊壁ト腸管ト相癒

着シテ不納的ヘルニアト為リ箱頭スルナキニアラ
ズ然レモ小児ニアツテハ斯ル變化ハ殆ド之ナキ
モノトス

治法 膈帯ヘルニアニアツテハ其内容物ヲ腹内
ニ還納シテ結締スルナリ小児ノ膈ヘルニアニアツ
テハ左手指ヲ以テ之ヲ還納シ上ニ綿球壓
子ヲ貼シ絆創膏ヲ固定スルニ又壯者ニアツ
テハ腹帯ノ裏面ニ離子ヲ装置着シ以テ膈部
ヲ壓住セバ頗ル簡便ナリ膈ヘルニアノ箱頭シ、モノニア
ツテハ時期早ケハ無血的還納法ヲ試ムトモモ
之ニ依テ還納能ハサカ或ハ還納スルカサカモ
於テヘルニア切開術ヲ行フニ其法ハ皮膚ニ縱

切ヲ加ヘ次テヘルニア囊ヲ切開シ箱頭シ、腸管ヲ精
査スルノ前節箱頭ヘルニアニ於ルガ如クスニ但シ
此症ニヘルニア門ノ切擴ハ行フニ及バサルヲ常トス
是レ膈ヘルニアノ箱頭ハ其原因多クハ門口ノ狭小
ニテラズシテ囊内ニ於ル腸管ノ捻換又ハ曲折ニアル
ヲ以テナリ然レモ其原因若シ門口ノ狭小ニアルキ
ハ之ヲ切擴スベキト素ヨリナリ然ルキハ下方或ハ左
上方ニ切開スルヲ可トス

若シ夫レ箱頭シ、腸管、既ニ壞疽ニ陥レル者ノ
如キハ假肛門ヲ造設スベキノ要アリ

第七 腹壁ヘルニア

ヘルニアハ腹壁ノ各処ニ突起シトモモノナレモ就

中其最も多ク見ル所ノモノ白線ニ於テモ之
 ナリ而テ此種ヘルニアノ發生スルキ原因ヲ約言スレ
 バ腹壁ノ抗抵力ヲ減殺スルキ所ノ疾病及ニ外
 傷ナリト云フ事也。五十四歳ノ婦人ニ卵巢



囊腫根治手術ヲ行ヒタル後二年目ニ白線ニ
 發起セシ腹壁ヘルニアナリ

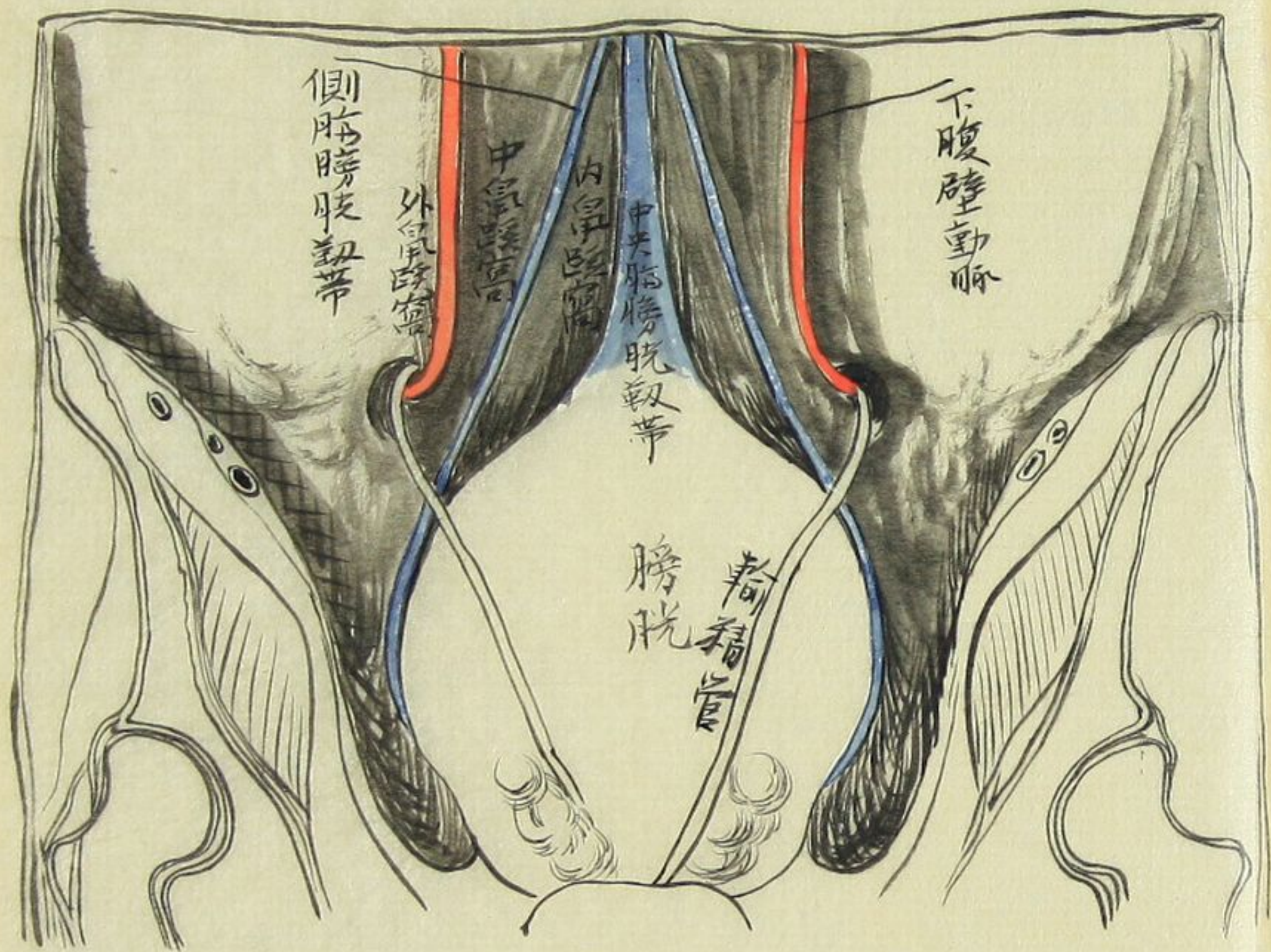
△治法 圧子ヲ装着セル釋力性腹帯ヲ用ユルキハ
 膈ヘルニアニ於ケルガ如シ然レモ既ニ箱頓症ヲ来シ
 モノニツテ箱頓ヘルニア治法ノ通則ニ依テ處置
 スベシ

鼠蹊部ノ解剖

第八 鼠蹊ヘルニア

本症ヲ論セントスルニ豫メ先ヅ鼠蹊部ノ解剖的
 關係ヲ説クノ要アリ次面ノ圖ハ下腹前壁ノ内
 面ヲ示スモノニシテ抑ニ腹膜ノ外板ニ五條ノ隆線
 ヲ顯スモノナリ即チ中央ニ在ル所ノ隆線ハ中平
 膈膀胱靱帯ニシテ其左右兩側ニ在ル所ノ
 隆線ハ側膈膀胱靱帯ナリ而テ尚ホ此隆線
 ノ外側ニ於テ左右ニ現ハル所ノ隆線ハ下腹壁
 動脈ノ部位ナリト云フ故ニ此隆線相互ノ間ト其外

不全外鼠蹊
へルニア
腹膜前鼠蹊
へルニア



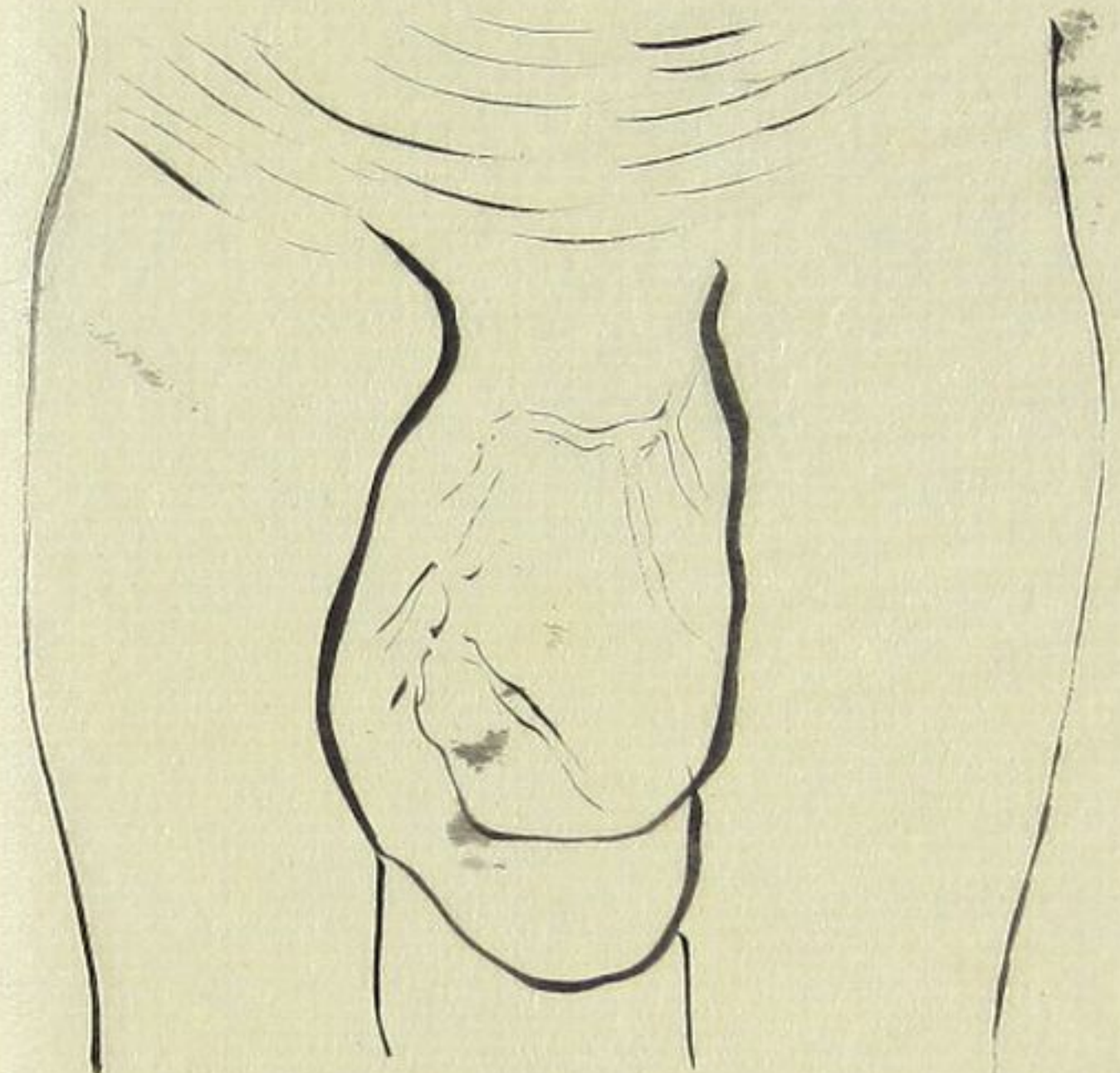
へルニアナリトス又ハ
全外鼠蹊へルニア
及ヒ腹膜前鼠蹊
へルニア及腹膜前
ナモナリ共ニ外鼠
蹊へルニアノ一種ニシ
テ甲ハ鼠蹊管外
ニ停留スルモノハ
乙鼠蹊管ヨリ腹壁
外ニ脱々シテ腹
膜ト横筋膜トノ
間ニ夾入シ腹膜前

側トニ於テハ左右各三箇ノ凹窩ヲ成セリ其中中央
膈膀胱靱帯ト側膈膀胱靱帯ト間ニ在ルモ
ヲ鼠蹊窩高トシ側膈膀胱靱帯ト下腹壁動脈
トノ間ニ在ルモノヲ中鼠蹊窩トシ下腹壁動脈ハ
外側ニ在ルモノヲ外鼠蹊窩トス然リ而テ外
鼠蹊窩高ヨリ起ル所ノルニアラ外鼠蹊窩
ノ事ト稱シ内中ノ西鼠蹊窩ヨリ起ル所ノ
モノヲ内鼠蹊窩ト稱ス

○甲) 外鼠蹊へルニア ハ鼠蹊管ハ口ヨリ其管内
入り而テ其外口ヨリ出テ男子ニテハ陰嚢女子
ニテハ大陰唇ニテ達スルナルモノト故ニ陰嚢トシ
テ陰嚢へルニアト稱スルモノ乃チ外鼠蹊嚢トシ

ニ占位スルモノ之ナリ

外鼠蹊ヘルニア
及内鼠蹊ヘルニア



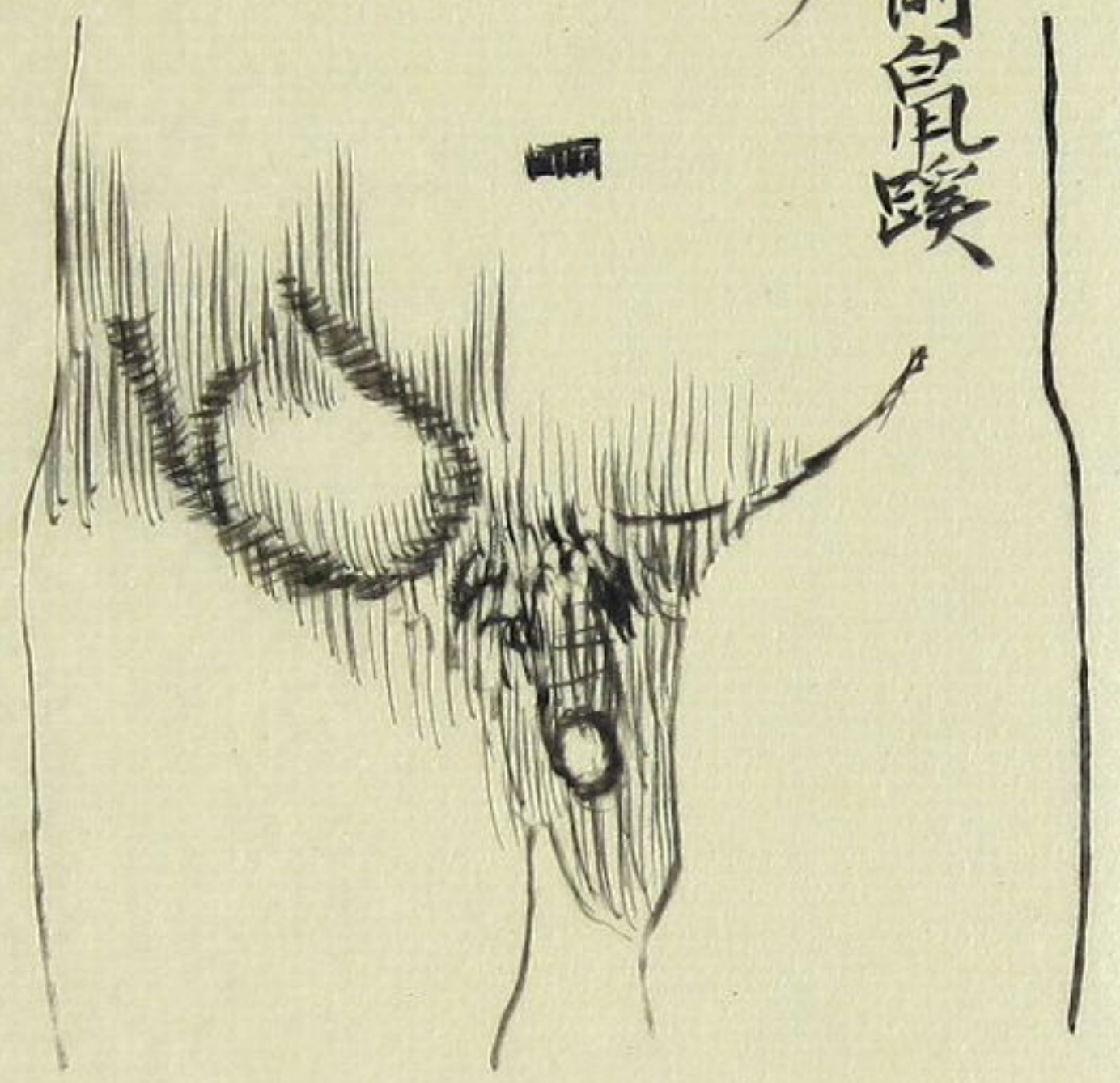
二十九歳ノ婦人ニ
発起セシ巨大ノ
陰唇ヘルニア



外鼠蹊ヘルニア

陰囊ヘルニア
外鼠蹊ヘルニア

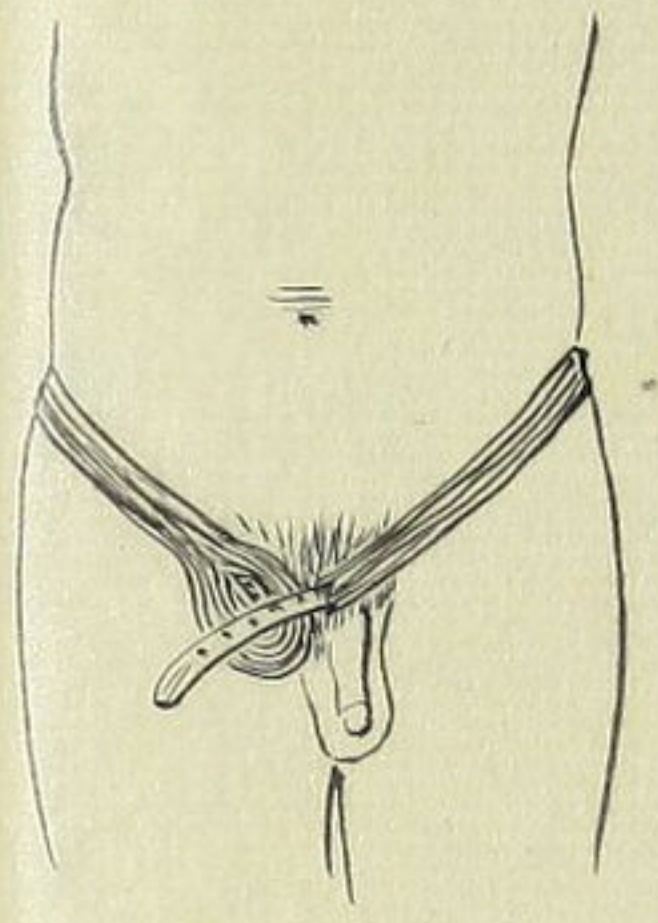
腹前鼠蹊
ニシテ



(乙) 内鼠蹊ヘルニア ハ下腹壁動脈ノ内側ヨリ
直ニ鼠蹊管ノ外口ヲ通過シテ外方ニ顕ルル
所ノモノナリ故ニ直達鼠蹊ヘルニアノ名アリ而テ此
ヘルニアハ内鼠蹊窩ヨリ發セシ所ノモノナリ

腫ニ於テモ亦同シ、又精氣靜脈腫トハ誤診ノ
 虞ナリ、**女**診識別ニ難カク、其他癰炎セル鼠蹊
 下事ト**模**、**疔**トラ鑑別スルノ要アリ、然レモ前者ニ
 比テ、毎ニ腹脹矣、微ト特ニ箱頭ヘル事、微
 アルヲ常トス

治法 可納的ト事ニツテハ臥位ニ於テ全ク之
 ヲ還紙セシメ、然ル后、固ノ如クヘルヲ帶ヲ施シ、再
 脱ヲ防禦スベシ、(夜間ハ之ヲ取り除キ施サレルヲ
 可也)之ニ依テヘルヲ門ノ瘡



着ヲ束シ、殊ニ小兒及ヒ年
 少者ニツテハ治癒スルハ速ニ
 シ、然レモ中年ノモノニアツテハ其

希望ヲ達スルニ蓋シ稀ナリ

鼠蹊ヘル事ノ箱頭シ、モノニアツテハ第四節ニ依
 テ處置ス、モトナリ、只此腫ノ治法ニ特異ナル所
 ハ、ルヲ門切擴ハ方法ハ、ミナリトス、即チ外鼠蹊
 下事ニハ其内側ニテ下腹壁動脈ヲ避シカ、為ニ外
 方ニ向ツテ切り、内鼠蹊ヘル事ニハ此動脈其外側ニ
 アルカ、為ニ内方ニ向ツテ切擴スルニアリ、然レモ鼠蹊ハ
 小ムルニシテ箱頭スルモノ、殆ンド毎ニ外鼠蹊ヘル事
 ナルヲ以テ、其切擴線モ亦外方ニ置クヲ常トス、
 若シ夫レ其内外ノ決シ難キモノ、如キ、鉛直ニ上方
 ニ向ヒ切擴ス、シ決シテ下方ニ向ヒ切擴ス、カラス、然
 レモ若シ下腹壁動脈ヲ毀傷スルニ至レハ直チニ

結紮ヲ要スルヲ論フ候タス

第九 股ヘルニア

バルト氏靱帯ノ下部ニ於テ股輪ヲ通過シテ
外方ニ逸ルルヲ多ク、但シ其經過ハ股動靜
脈管ノ経路ニ沿フモノニテ就中股靜脈ハ
内方ニ在ルヲ多クト然レモ稀ニ股脈管ノ後方
或ハ其鞘内ヲ通過スルモアリ

證候 股ヘルニアハ婦人ニ來ル下最モ屢ニナルモノ

ニシテ其總數ノ七五%ハ婦人ニ屬セリ蓋シ婦人ハ
骨盤ノ闊大ナルガ為股管モ随テ廣ク且ツ數回
妊娠ヲ經シモノニツテハ其抵抗モ頗ル減弱スルヲ
以テナリ但シ小兒ハ股ヘルニアニ罹ルル甚ク稀ナルニ

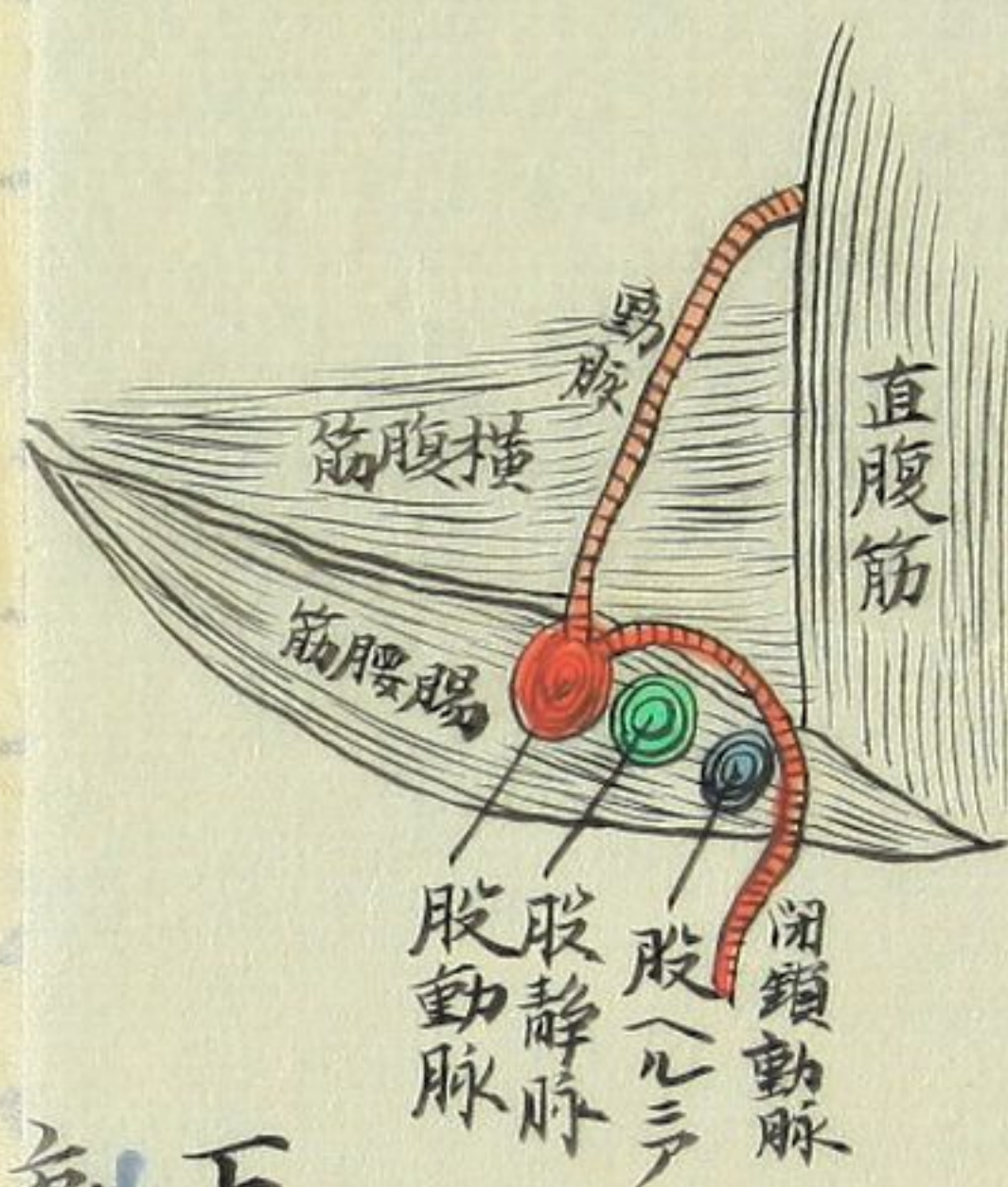
之ニ及ミテ小兒及ヒ凡テ男子ハ鼠蹊ヘルニアヲ發ス
ルノ最モ多シ元來股ヘルニアハ著大ノ度ニ達スルノ
稀ニシテ每ニ鳩卵大ヨリ鶏卵大ナルヲ多シトス

診断 股ヘルニアハバルト氏靱帯ノ下部ニ

在リ鼠蹊ヘルニアハ其上部ニアリ尚ホ上記ノ証候
ヲ参照スルハ鼠蹊ヘルニアト鑑別ハ難カズ又卵出
孔ヘルニアトノ鑑別ハ其條下ニ述フヘシ其他炎症セル
股ヘルニアト淋巴腺ノ腫脹及ヒ腸腰筋ノ流注的
膿腫トノ鑑別ハ精密ニ検査スルヘシ之ヲ別ツル難
事ニアズ只時トシテ蓄薇靜脈ノ靜脈擴張ト誤
診スルルナキヲ要ス然レモ此症ハ其下部ノ靜脈ヲ壓
迫スル腫瘍忽チ消失スルヲ以テ知ルヘシ

治法

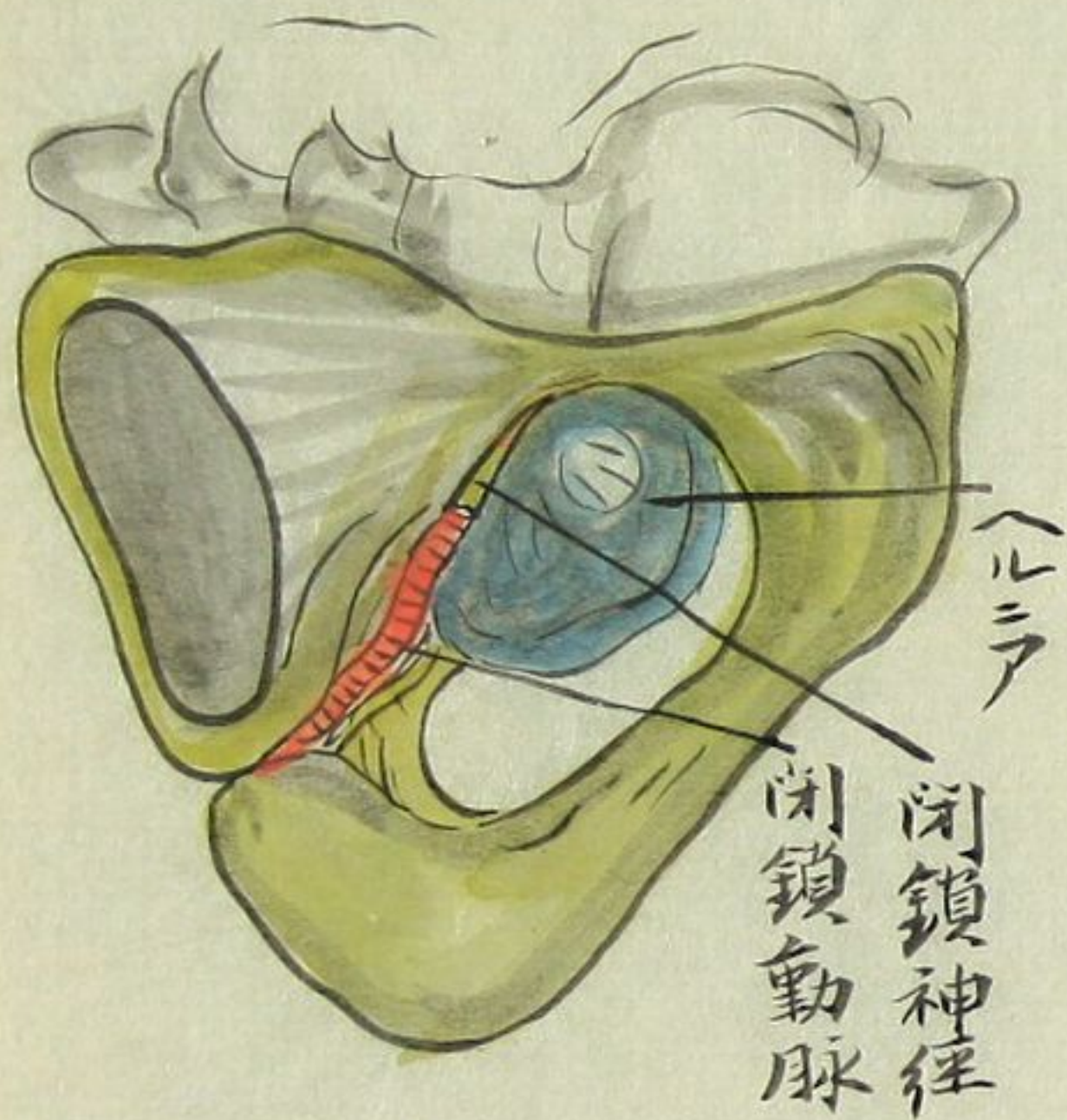
概シテ鼠蹊ヘルニアニ同シ唯異ナルノ点ハ
ルニア門ヲ切擴スルニ當リ毎ニ内方ニ向ヒギンヘルナト氏
韃帶ヲ切開スルハ蓋シ股ヘルニアニ於ケ
ル箱頸部ハ毎常股輪ニアルヲ以テナリ但シ閉鎖
動脈ノ下腹壁動脈ト共ニ股動脈ヨリ分岐スル
カ或ハ下腹壁動脈自家ヨリ分岐スルノ破格(上



四ハ腹腔内ヨリ見タル
所(内動)アリテヘルニア
頸ヲ弓状ニ起エギン
ヘルナト韃帶内面ニ沿テ
下行スルモノ如キニツテハ此
動脈ヲ毀傷スルヲ往キアリ

第十 卵圓孔ヘルニア

一名閉鎖孔ヘルニアハ卵圓孔(閉鎖孔)ノ外上
縁ニ於ル閉鎖動靜兩脈及ヒ閉鎖神経ノ通路
各孔ヨリ脱出スルモノナリ但シ閉鎖孔ハ上記ノ
孔ヨリ除ク他ハ總テ閉鎖膜ヲ以テ閉鎖セラル

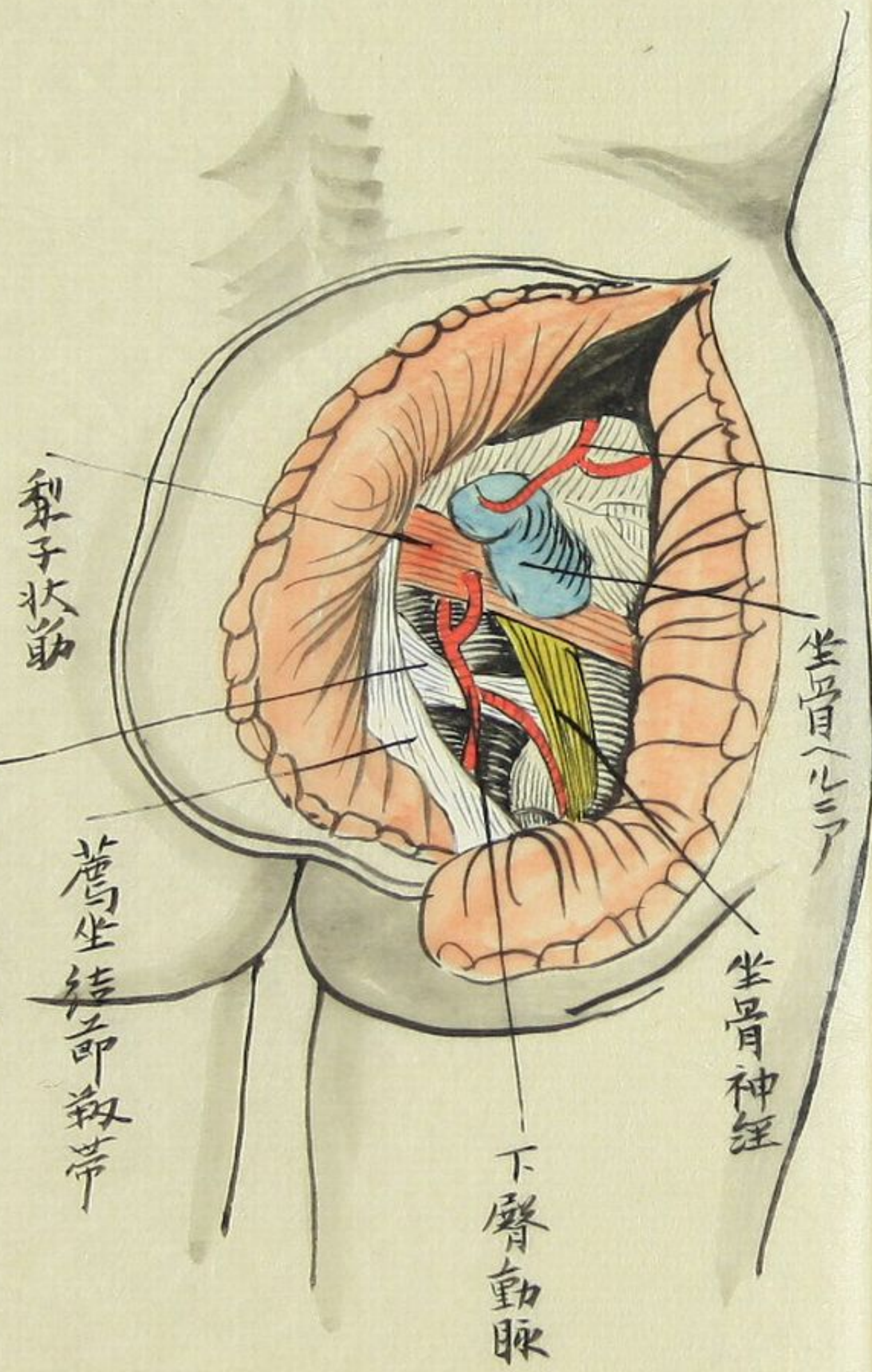


而テ此膜ノ内面ニハ
閉鎖筋アリ外面ニ
ハ外鎖筋アルヲ以
テ卵圓孔ヘルニアハ
閉鎖膜ト外鎖筋
トノ間ニ脱出シ奉リ
次テ恥骨筋及ヒ

諸肉送筋ニ覆ハレ直チニ皮下ニ頭ハレサルヲテ之ヲ
 直接ニ觸診スルヲ能ハス是レ診斷ニ難キ所以ナリ
 彼ノリンバルトガ生活體ニ此ヘルヲテ診定シモ
 ノ恐クハ之レ無ラントハ至言トスベシ

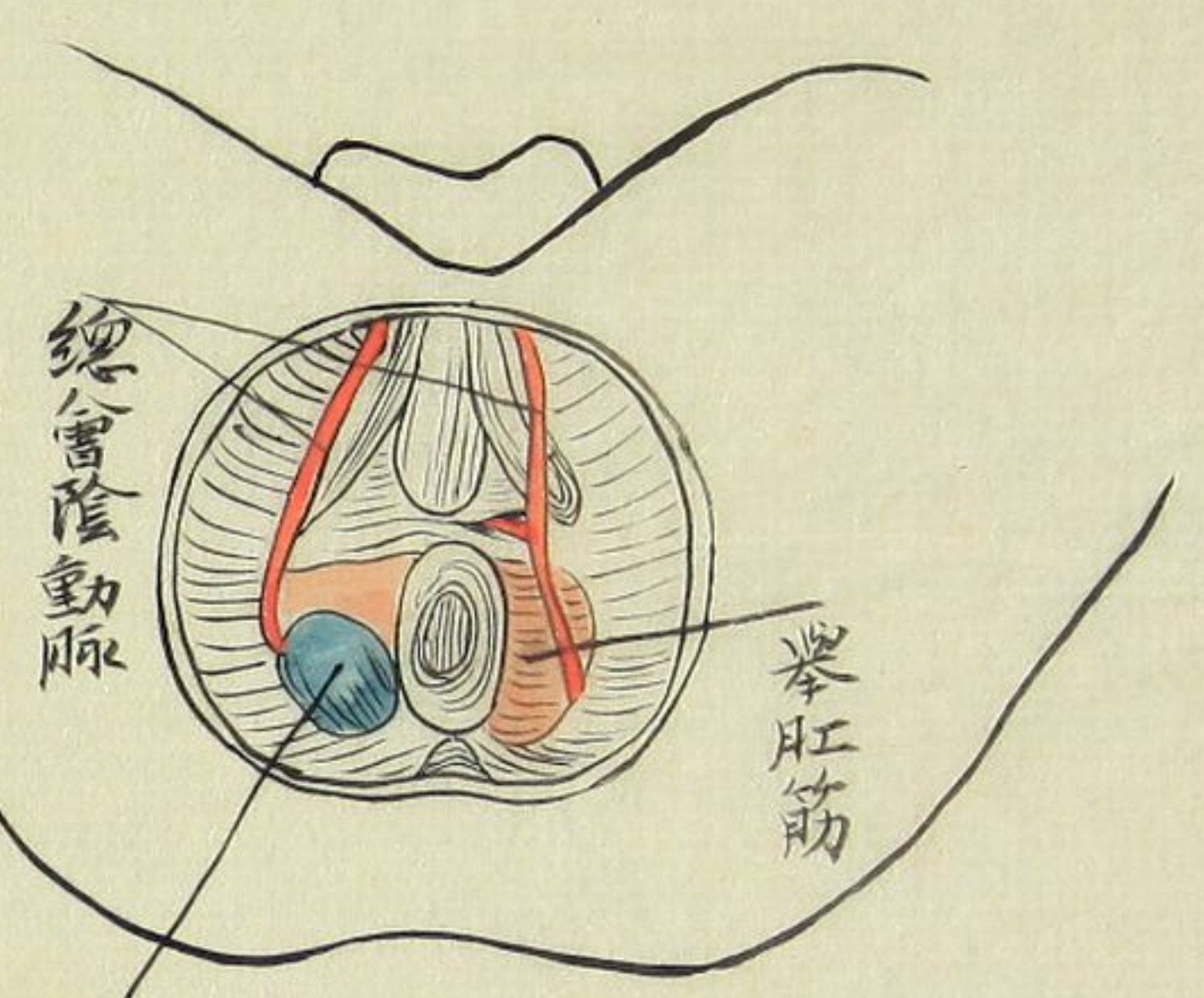
第十一 坐骨ヘルニア 筋

極テ稀有ノモノナリ其来ルヤ坐骨大截痕ヲ通
 過シ上臀動脈ト経路ヲ共ニ梨子状ノ上縁ニ沿テ
 頭心ニ上臀動脈ノ前方大臀筋下ニ在ルモノナリ其
 診斷上鑑別ノ要アルモノニ流注膿腫及ヒ上臀
 動脈ノ動脈瘤ナリトス而テ此ヘルニアノ箱頓ニ就
 テ未ダ報告シ、者アルヲ聞カス
 左図ヲ見ルニシ



第十二 會陰ヘルニア

坐骨直腸空隙ニ於テ舉肛筋ノ纖維間ニ頭心坐
 骨結節ノ肛門間ニ占位ス殊ニ婦人ニアリテハ尚ホ前



方ニ進ミ陰唇内ニ達スル
 アリ此ノトルキハ最モ稀
 有ナルモノニシテ之ニ箱頭
 症ヲ發スルヤ否ヤハ未ダ究
 メ難シ
 (以上実用外科各論ニヨル)

第 胆 胱 結 石

其初ノ腎盂ニ於テ結成シ次テ膀胱内ニ来テ増大スル
 モノアリ或ハ又膀胱内ニ於テ原發スルモノアリ而テ其原因
 ハ極メテ種々ナリト虽モ就中膀胱内ニ於ル異物ニ原
 因スル者最モ多シ即チ膀胱内ニ異物ノ来ルコトアレバ
 異物直チニ核ト為リ尿酸塩類ハ其周圍ニ沈着
 シ漸次増大シテ後ニ結石ヲ構成スルニ至ル然レバ此結
 石ハ原則同一成分ヨリ成ルモノニアラス故ニ其化学的
 成分ニ基キ區別スルハ概テ左ノ如シ

(一) 尿酸石 主成分ハ尿酸及ヒ其塩類ニシテ必
 ズ酸性反應ヲ有ス尿中ニ於テ形成シ膀胱結
 石中最多ノモノニシテ且ツ他種結石ト虽モ尿酸石ヲ
) 考光吉

(形用台石) 其核トナエモノ多シ通常其形ハ長円ニシテ四ノ方
至三〇。〇或ハ以上ノ重量ヲ有シ其表面ハ平滑ニ
シテ純尿酸石ハ其質甚ダ硬ク尿酸塩類ヨリ
成ルモノハ其硬度稍ニ弱シ其色ハ黄若クハ帯赤
ナリ又其截断面多ク平滑ニシテ渦紋状ノ層ヲ呈
又尿酸塩類中主トシテ結石ヲ形成スルモノハ尿酸那
篤留膜尿酸安母尼亞及ヒ尿酸麻屈涅矢亞ホ
ナリ殊ニ其表面ニ尿酸石灰及ヒ磷酸安母尼亞
麻屈涅矢亞等ノ沈着衣被スルナリ而テ此結石
モ其容積小ニシテ其形円キカ或ハ扁平ニシテ其表
面多ク顆粒状ヲ為セリ殊ニ尿酸石灰ノ衣被シ
モノニ於テ然リ又其他尿酸砂モ亦主トシテ尿酸

及ヒ尿酸塩類ヨリ成ル

(二) 磷酸塩石 尿ノ重加里性酸酵ヲ為スニ

際シ磷酸石灰及ヒ磷酸安母尼亞、麻屈涅矢亞
ヨリ成ル就中磷酸安母尼亞、麻屈涅矢亞ヨリ
成ル所ノモノハ灰白色ニシテ著大ノ大サニ達スル
ナアルモ其質ハ至テ脆弱ナリ

(三) 碳酸石灰石 稀有ニ屬ス其特異徴ハ白

墨様白色ナルナリ

(四) 尿酸石灰石 單ニ尿酸石灰ヨリ成レル

アリ或ハ多少尿酸塩若クハ磷酸塩ヲ混ズルナ
リ而テ其質極ニ硬ク褐色ニシテ其表面顆
粒状ヲ呈シ恰モ桑実ヲ見ルカ如シ故ニ桑実

桑實石

石ノ名アリ

(五) 子ス子石

卵圆形ニシテ其表面滑沢其色帯褐黄其質頗ル軟弱ニシテ蠟様ナリ而テ其破潰セルモノハ光沢不板状ハ大結晶纹理ヲ呈スルヲ以テ此結石ノ特徴ト為ス蓋シ稀有ニモ

(六) キサンチン石

是レ亦極メテ稀有ナリモノニシテ其色朱赤其表面平滑ナリ且ツ土様ノ破潰面ヲ呈ス

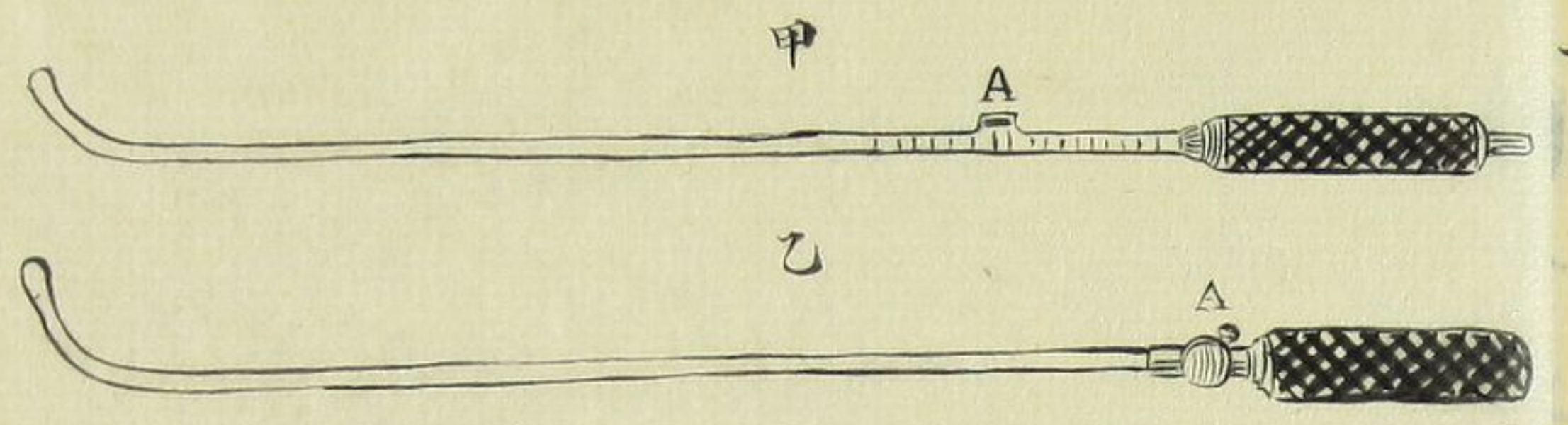
以上六種結石中最モ屢ニ見ル所ノモノハ尿酸石ニシテ磷酸石之レニ世ギ液尿酸石ハ又之ニ次グ而テ此種結石ハ單純ニ来リヨリモ二種或ハ二

種ヨリ混成スルモノシ多シトス

證候

結石ノ未ダ小ナル間ハ唯膀胱加香兒ノ症状ヲ呈スルノ他特異ノ徴ヲ顯スナシ次テ結石ノ漸ク増大スルニ從ヒ尿管ニ當リ疼痛及ビ苦惱ヲ覺エ若シ結石膀胱ノ尿道口ニアリハ排尿ノ困難ヲ来スモノナリ故ニ此際横臥スルカ若クハ上體ヲ前屈スルハ排尿ヲ容易ナラシム又排尿ノ困難持タスレバ膀胱壁ノ筋質肥大ヲ来ス殊ニ小兒等ニ於テハ努責ノ為ニ往々直腸脱ヲ继发スルナリ疼痛ハ膀胱ニ炎症無キモノニアラズハ缺如スルナリト雖モ又劇痛ヲ発スルナリ特ニ尿管後膀胱壁ノ結石ニ向

ツテ症候手状ニ收縮シ密着スルキニ於テ然リ
 上就中桑実石ヲ以テ最モ酷クシキモノトス而テ
 此疼痛ハ急ニ膀胱部ニ止マズ尿道及ビ龜
 頭ニ向ツテ放線状ニ傳播ス又尿ハ屢々血液
 或ハ粘液濃液等(膀胱慢性炎)ヲ混ズルヲ
 見ル又時トシテ結石ノ膀胱ノ擴張陷凹ニ
 潜在掩藏セルニナキニアラズ其小ナルモノニアツ
 テハ往々尿道内ニ来リ停止シ或ハ尿ニ伴フテ排
 出スルニアリ殊ニ婦人ニ於テ然リトス
診断 膀胱結石ヲ診定セント欲セバ所謂
 結石消息子ナルモノヲ要ス左圖ノ甲ハロムン氏式
 ニテ把柄近部ニ度目ヲ劃シテ可動標子Aヲ裝



置アリ之ニ由テ結石ノ大小ヲ測定シ得
 ルモノナリ其法ハ先ツ此消息子ヲ膀胱
 腔内ニ送り頭端ヲ結石ノ後ニ致シ柄
 部ニ於テハ彼ノ可動標子Aヲ尿道
 外口縁ニ密接セシメテ固定ス次テ消
 息子ノ頭端ヲ結石ニ接觸セシメツ
 ン前方ニ引キ来リ終ニ結石ニ觸ル
 ン感無キヲ度トシテ止ム茲ニ於テ彼
 ノ可動標子ノ尿道外口縁ヲ距ル
 幾干ナルヤ度目ニ依テ算一以テ結
 石ノ大小ヲ測定スニナリ然レモ結石
 ノ有無ヲ搜ルニ膀胱空虚ナルキハ

疼痛ヲ発スルヲ以テ豫メ先ツ之ニ液射ヲ以テ
 充盈セシムルヲ利アリト云其法乙箇ニ示ス所ノトム
 シ氏式カテーテルヲ膀胱内ニ送り之ニ依テ膀胱
 内ニ硼酸水(3%)ヲ注入シ次テ活檢△ノ前
 ゲ而テ其器ノ先端ヲ以テ探ルベシ若シ結石ニ触
 ルレバ一種ノ音ヲ放ツベシ但シ其音色ニ依リ
 結石ノ硬軟ヲモ判シ得シ此硬軟ヲ知ルハ之ヲ除
 去スルノ方法ヲ講スルニ大ナル關係ヲ有スルモノトス其
 他ノ検査法トシテハ膀胱鏡ヲ使用スルアリ
 △**治法** 碎石術ニ依ルカ或ハ膀胱截開術ヲ
 行フニアリ然レモ後者ノ確實ナルニ善カス彼ノ尿
 酸石ニ亞角加里劑ヲ内服セシメ磷酸塩石ニ酸

類ヲ注入スルガ如キ化學的療法ハ未ダ曾テ其目
 的ヲ達シ、トナシ (本章實用外科各論ヨリ)

軟性下疳

軟性下疳又軟潰瘍ハ不潔ノ交接ニ際シ特種ノ病毒即ケテエクレイ氏ノ連鎖状桿菌ノ傳染ニ因テ生ズル一種ノ局所潰瘍ニシテ隣接部ハ淋巴管及淋巴腺ノ炎症ヲ继发スルニ過キス決シテ徹毒ニ於ケル如キ全身傳染ヲ發セザルニ症ヲ謂フ。故ニ本症ハ男子ニ在テハ殊ニ包皮、繫帶、亀頭、尿道口ニ生ズルノ最多ク他部(例之ハ肛門、口唇、舌、指等)ニ發スルハ罕ナリトス

症候 本症ハ上記好発部ニ於ケル上皮ノ小創或ハ皸裂ニ病毒ノ感染スルニ因リ

軟性下疳
発スルモノニシテ通常ニ三日ノ潜伏期ヲ経テ
局部ニ多少円形ノ物質缺損ヲ生ジ底
面豚脂様ニシテ邊緣銳利且屢々縁下
侵蝕ヲ呈シ多量ノ膿ヲ分泌ス但シ時ト
シテ潰瘍ハ周圍ノ尋常皮膚面ヨリ隆
起スルナリ有リ(所謂隆起性軟性潰瘍)
又軟性潰瘍ハ多數發生スルヲ多シトス是ハ
ハ數多ク上皮小創ニ病毒ヲ感染スルニ因リ
一ハ其病毒頗ル感染力ニ富ムヲ以テ潰瘍
近部ニ自家傳染ヲ未スニ因ルナリ殊ニ常
ニ患部ヲ不潔ニシ且療法ヲ尋常ニセルモノ
ニ於テ然リトス又下疳毒若シ濾胞内ニ入ル

牛ハ中央ニ甚ダ深キ膿潰ヲ呈スル粉刺瘡ノ
小結節ヲ生スルナリ濾胞性下疳是ナリ
而テ軟性潰瘍ハ下文ニ記述ス可キ特種ノ疔
ヲ除ク外ハニ乃至三週日ヨリ數週日ヲ経
テ癩痕ヲ發生シ治癒スルモノニシテ其荒莽
期ハ通常四乃至五週間ヲ超スルナリ無シ
下疳ニ種壞疽性ヲ具スルモノアリ是即
チ壞疽性及侵蝕性下疳ト稱スルモノニ
シテ共ニ劇烈ノ炎症ヲ呈シ組織ヲ壞
疽ニ陥ラシム但シ壞疽性下疳ハ亦局所
的血管障礙ニ由テ発スルナリ其他最
初潰瘍ヲ生ジタル部ハ全治スルモ其

病接絶^テ隣接部ニ進行シ年ヲ過ス
 ルモ治セズ遂ニ陰部ヨリ陰阜・陰囊
 ノ皮膚ヲ侵シ加之大腿腹部會陰
 背部等ニ蔓延スルモノアリ之ヲ蛇行
 性下疳ト稱ス但シ最モ稀有ノ疔ニ屬ス
 軟性下疳ニ又屢々炎性包莖及軟頭包莖
 シ来スアリ其他疔疔最モ屢々見ル所ノ
 合併症ヲ淋尿管炎及鼠蹊淋尿管炎
 痔即チ横痃又便毒トス而テ此腺ノ侵サレ
 ヲ通常急性炎症狀ヲ呈シ初メハ只淺
 在ノ淋尿管ニ止マルモ後深部ノ腺ヲ侵シ多ク
 遂ニ化膿ニ陥ルモノニテ其自ラ吸收セザルハ
 モノハ罕ナリトス

療法

初期ニ在テ時宜ニヨリ潰瘍ヲ切除スルコ
 アリ但シ此法ヲ行ヒ難キヲ多クシトス或ハ電氣燒灼

硝酸銀ヲ用テ
 腐蝕スルハ良ナ
 ラス是レ及テ潰瘍
 が増大セシムルコト
 アレバ其表
 面ヲ含シテ妨ケ
 ルヲ以テ梅毒淋
 尿管ニハヨリ適
 症ヲ起シ易ク
 ナリ

器差リハ烙白金ヲ用カテ之ヲ燒灼スルモノナリ
 其他ノ治法トシテ最モ所要ナルハ屢々潰瘍ヲ洗滌シ
 シ後弱收斂性若クハ消毒性液（鉛水一%原
 酸水・醋酸・鞣酸等）ニ蘸シタル綿花ヲ以テ之ヲ
 被包シ常ニ清潔ニ保ツナリ。ナウセル氏ハ最モ
 一二回紙綿ノ石灰酸ヲ綿花ニ蘸シテ十分浸
 瘍ヲ腐蝕スル法ヲ推將ス。撒布劑トシテ最
 良ナルハヨリドホルムナリ其他用ホトシテハアイ
 ルヨードル・ホルマリン・イソヨール・アリスール等ナリ

壞疽性及侵蝕性之症ニ在テハ鏡起ヲ以テ潰瘍
面ヲ搔爬シ烙白金ヲ以テ燒灼スルカ或ハ強クハ
鉸水ヲ以テ腐蝕スルヲ良トス蛇行性下疳治法モ亦
此法ニヨリ可シ

損瘡ニ對シテハ先ツ身軀ヲ安靜ヲ令シ局部ニ水囊ヲ
貼シ或ハ灰自軟膏ノ塗擦ヲ試ム可シ之ニ由テ奏效無
ク已ニ化膿ニ陥ル者ハ切開シテ病竈ヲ搔爬シ目
ドッホル綿紗ヲ栓塞ス可シ又時宜ニ由リ淋巴腺ヲ
摘出スルニアリラシグ氏ハ已ニ軟化セル横瘡ヲ
僅ニ穿開シ排膿ノ後〇・五乃至一〇%硝酸銀水
ヲ注メスルノ法ヲ稱用セリ

三 慢性英膜炎(寧丸英膜炎)

又慢性陰囊水腫

本症ハ多クハ偏側ニ来リ兩側ニ来ルハ罕ニシテ
通常率ニ陰囊水腫ト稱スルモノ是ナリ。
吾人ノ日常最モ多ク覩ル所ノ症ニシテ間ニ其
先天性ニ屬スルモノモ尠シ小兒及二十歳乃至四十歳
ノ成人ニ来ルヲ多シトス而テ其發生ハ通常甚ク
緩慢ナルモ稀ニ稍ニ急性ナルニアリ
慢性陰囊水腫ニ見ル所ノ漿液ハ多クハ澄明ニシ
テ琥珀色ナルモ又稍ニ綠色ヲ帯ビ罕ニ血色ヲ
呈シ時トシテ又脱落セル外皮細胞及ろいニト
トスルニ由テ濁濁ナルニアリ而テ其量ハ甚ク

陰囊腫小形

差アリ多キ一乃云ニリトてニ違ニ間ホハ
すてありハニ富ムトアリ又副辜丸ニ迷走精
管先天性ニ固有英膜内ニ開口スルカ或ハ精液水
腫其内ニ破裂スルキハ液中ニ精絲ヲ見ルトアリ
(乳糜性陰囊水腫)此他慢性陰囊水腫ニ
在テハ英膜肥厚シ殊ニ經久ノ症ニ在テハ辜丸及
副辜丸ハ萎縮シ硬變ヲ呈スルコト多シ

△症候

慢性陰囊水腫ハ其發生多クハ甚ク後
慢ナルヲ以テ始メ患者著キ障碍ヲ訴フルト毎ニ
トモハ其内容漸ク増加スルキハ陰囊著シク腫脹
シテ兎頭大乃至其以上ニ達シ為ニ患者重垂感
ヲ覺エ且交接及排尿ヲ妨ケラレ或ハ時トシテ坐

臥歩行ノ困難ヲ來シ間ニ又勃起力十全ナキ或ハ
其壓迫ノ為精液ノ産出ヲ妨ケルトアリ又巨大ナル
陰囊水腫ニ屢ハシハ或ハ合併スルニ其先天
性ノ者ニ於テ然リトシテ其他衝突、打撲等ノ外傷
或ハ強努責ニ因リ英膜破裂シ其内容周囲ニ滲浸
スルトアリ然レモ其吸收後ニ復速ニ再發スルヲ常

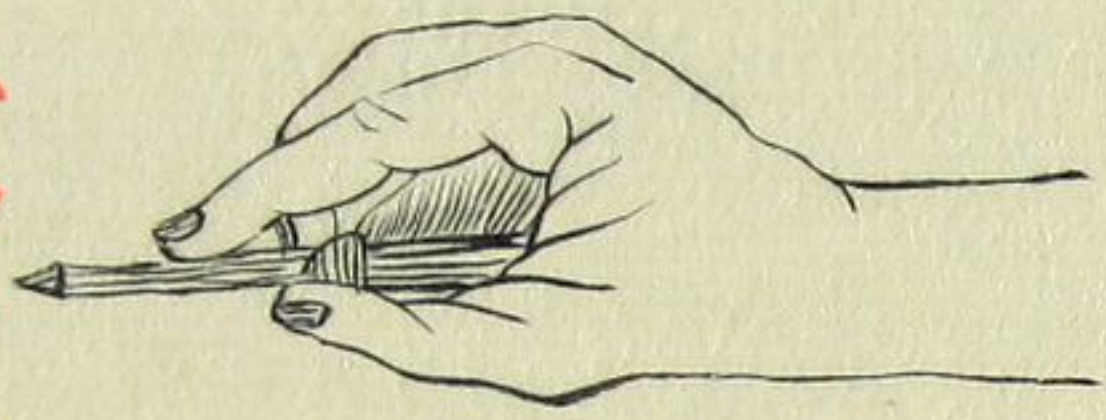
ト云

陰囊水腫ハ軟キ彈力性腫瘍ニテ通常梨子状
ヲ呈シ細端ハ上方ニ向ヒ其底ハ下方ニ向フヲ常トス
ルモ亦種々ノ形状ヲ呈スルモアリ又辜丸ハ通常
腫瘍ノ後側ニ在ルモ時トシテ上方或ハ下方ニ
位スルトアリ

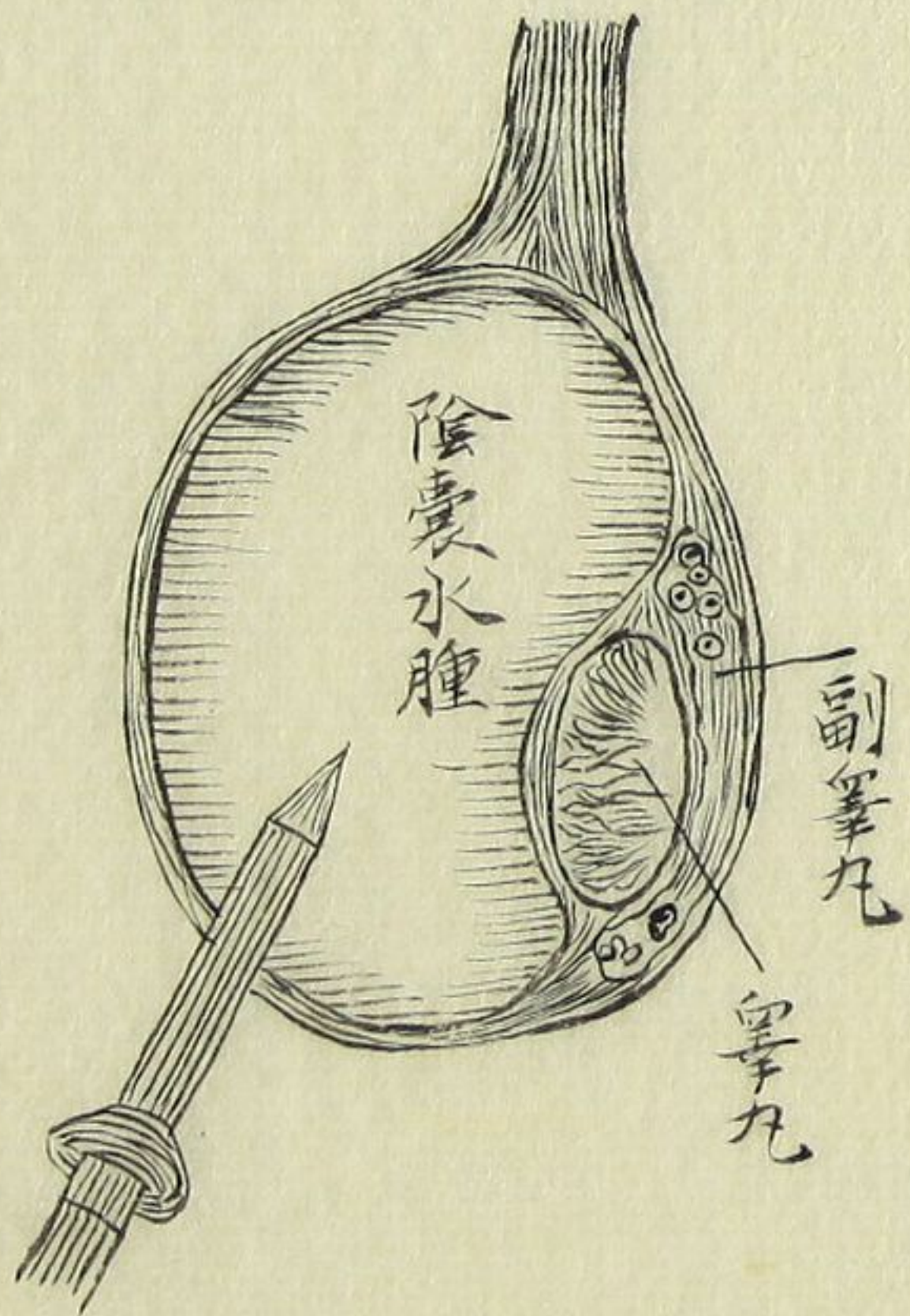
穿刺術

陰囊水腫、穿刺術の時
針管套、把持法

時、其皮、針ヲ緊張セシメ、右手ニ套管針ヲ執リ、針



陰囊水腫、穿刺術



療法 慢性陰囊水腫は自然に治癒スル極メテ
穿タルヲ以テ毎常手術ヲ要ス可キモノトシ、其最簡單
ナル「穿刺術」ヲ施シ、滲出物ヲ排泄スルニ在リ、穿刺
術ヲ行ハル術者、左手ヲ以テ陰囊ノ後面ヲ把持シ、同

診断 上記ノ諸症ニ由リ、多クハ容易ナリトモ、又
筆丸腫瘍及殊ニ鼠蹊ノ下ニあるト誤ルルモノキニ
アズ、然レモ陰囊水腫ハ觸診ニ表面滑澤ニ
シテ波動ヲ觸レ、打診スルニ濁音ヲ呈シ、按壓ニ由
テ縮小セス、又鼠蹊管トノ境界分明ニシテ日光
ニ對シ透見スルハ内容透明ナル等ニ由テ之ヲ
確診ス可シ、但シ内容著ク濁濁スルカ或ハ多量
ノ血液ヲ混スルカ(筆丸血腫)或ハ莖膜ノ肥厚ナ
甚シキモノ等ニ在テハ透明ヲ缺クアリ、又筆丸ノ
腫瘍變質軟化シ、或ハ同時ニ莖膜腔ニ液体
ヲ瀦溜スル如キモノニ在テハ鑑別困難ナラシメ、疑
ハシキハ試験的穿刺術ニ由リ之ヲ決ス可シ

ノニ前下方ヨリ上方ニ向テ刺入スルヲ最良トス之ニ由テ
筆丸ノ損傷ヲ避ケルコトヲ以テハナリ而テ穿刺セシ後
ハ左手ニ套管ヲ固持シ右手ニテ軸針ヲ拔去シ悉ク
内容ヲ漏泄セシメタル後更ニ套管ヲ拔去シ穿刺
口ニ絆創膏ヲ貼シ提筆帶ヲ施ス然レハ之ニ
由テ決シテ全治ヲ望ム可カラス早晚必ズ再発ヲ来
スモノナリ故ニ穿刺後莖膜腔内ニ刺戟性藥液
ヲ注入シ以テ兩莖膜面ノ癒着ヲ回ルノ法ヲ講ゼリ
(穿刺後藥液注入法)之ニ用ユル藥液ハヨロト丁
幾純アルコールレゴール氏溶液ヨロド一五ヨロトカ
リ三〇銹水三〇〇三乃五五%石炭酸水一〇
%ヨロル亜鉛水等ニテ注入後ハ疼痛性ノ急

性ナル症ヲ發スルモノ乃五ニ週日ヲ経ルハ漸次消
散ス然レハ其效驗ニ至ラズ確實ナラズ性亦再発
ヲ来スナリ

**陰囊水腫ニ於ケル確實ナル療法ハ所謂根治手
術ヲ行フニアリ之ニ法アリ陰囊水腫切開法及
莖膜剝除法是ナリ就中尤モ善良ナルハ可及的
固有莖膜ヲ切除スルニアリ**

陰囊水腫切開法(フオン・フォルクマン氏)ヲ行フニ
ハ穿刺術ニ於ケルカ如ク術者左手ヲ以テ陰囊ノ
後面ヲ把握シテ皮膚ヲ緊張セシテ右手ニ刀ヲ執リ
陰囊ノ縱軸ニ沿ヒ可及的十分ナル切開ヲ施シテ
莖膜腔ヲ開キ内容ヲ排泄セシメ次テ千倍昇

永水ヲ以テ洗滌シタル後、莖膜縁ト皮尹縁ト別ニ缝合シ、更ニ縫縁シタル創縁ヲ合シ、稍ニ遠隔ノ部ニ針ヲ通シテ缝合シ、創ノ下角ニ一小口ヲ残シ、コードヲアルム綿紗ヲ挿入シ、防腐綳帶ヲ施ス。創口ノ全ク治癒ニ至ルニハ、約三週日ヲ要ス可シ。上記ノ法ニ比シ、最モ確實ナル所謂**莖膜剝除法**ニシテ、フオン、ベルグマン氏ノ稱用スル所ナリ。其法上述ノ如ク、莖膜腔ヲ切開シタル後、精系及**總莖膜**ヨリ固有**莖膜**ヲ剝離シ、(此際精系血管及**輸精管**ヲ毀傷セサルニ注意ス可シ)只其**辜丸**近傍ニ於ケル一部ヲ殘シテ之ヲ摘出シ、外創ヲ缝合シ、防腐的提筆綳帶ヲ施スニ在リ。

時宜ニ由リ、又創内ニ排膿管ヲ挿入シ、或ハコードヲアルム綿紗ヲ栓塞スルコトアルモ、翌日直ニ之ヲ除去ス可シ。此法ヲ以テスルハ、創面ハ八乃至十二日間ニシテ、痂痕ヲ結ニテ治シ、且最モ確實ニ再発ヲ防クコトヲ可シ。

莖膜剝除法

博士佐多進ハ、陰囊水腫ノ根治手續トシテ、莖膜腔ヲ切開シ、莖膜面ニ數ク乱切ヲ行ヒ、嚴止血シタル後、全ク創縁ヲ缝合シ、良成績ヲ得タリト云フ。氏以爲ク、乱切ヲ施スルハ、莖膜ニ分布スル血管及淋巴管切断セシメ、切創ハ痂痕ニ由テ治スルヲ以テ、莖膜ノ分泌機能ヲ廢絶セシメ、且乱切ニ由リ起ル多少ノ炎症ハ

亦英膜ヲ互ニ癒着セシムルノ補助スルモノナラシ
ト而テ氏ハ此法ニ命スルニ英膜乱切法ナル名ヲ
以テセリ

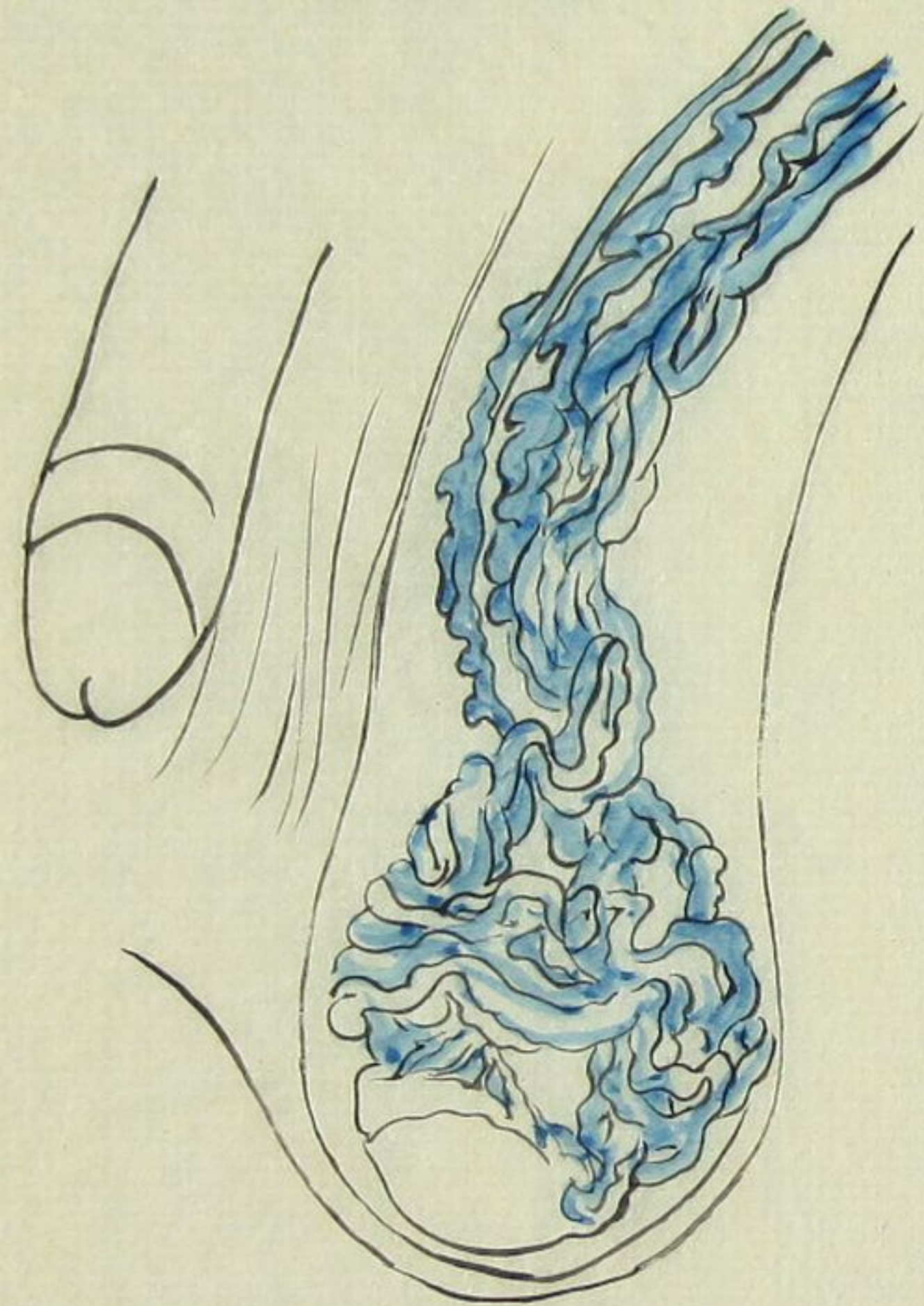
第五 精系静脈瘤

精系静脈瘤又静脈歇爾尾虫ハ精系
ノ蔓状静脈叢ニ於テ静脈瘤様ノ擴張
ニシテ年少者ニ屢ニ觀ル所ノ症ナリ之ニ歇爾
尾虫ト語ラ附シタルハ只其外形ノ鼠蹊歇爾
尾虫ニ類似スルヲ以テナリ

原因 精系静脈瘤ノ發生スルヤ爾他静

脈痛ニ等シク主トシテ精系静脈ノ血行障
碍ニ因ルモノナリ即チ常ニ起スニ又便秘等ニ
由リ之ニ鬱血ヲ生セシムルガ如キ其原因ト
為ル可シ殊ニ生来静脈管壁ノ抵抗力ニ
乏キモノハ之ニ罹リ易シ然レモ亦間ニ外傷
ノ精系静脈管

精系靜脈瘤



上部ニシテ始
ノハ只皮下
靜脈蛇
蟠屈シテ
丸ヨリ前
踵輪ニ連
ルヲ透見
ルニ過キ
ズ

疝候

靜脈怒張ノ最モ顯著ナルハ辜丸直

歳ノ間ニ最モ多シト雖二十歳以後ニ至テ始メテ發ス
ルモノ亦尠カラス但シ結婚後生殖作用ノ調節
ヲ失フニ至レバ分ラズスルシ多シトス

右

左側ニ於テハ血液ノ鬱滯ヲ来シ易ケレハナリ
其他左側ノ辜丸ハ右側ニ比スレハ較ニ低キモ亦之
ガ一原因タラズハ非ス而テ此症ハ十五歳乃至二十
歳ノ間ニ最モ多シト雖二十歳以後ニ至テ始メテ發ス
ルモノ亦尠カラス但シ結婚後生殖作用ノ調節
ヲ失フニ至レバ分ラズスルシ多シトス



腎靜脈
左精系靜脈
右精系靜脈
下大靜脈
連ナルヲ以テ
シテ多クハ左右
側ニ来ル是レ
左側ノ精系
靜脈ハ銳角
ヲ為シテ直ニ
下大靜脈ニ
連ナルヲ以テ

（精系靜脈）
ニ因リ急ニ發生スルアリ但シ本症ハ西側ニ

發スルヲ稀ニ

假令重症ノモノニ在ラモ敢テ著シキ障碍ヲ来ス
一血キ一アルヲ以テ患者之ヲ識ラスシテ經過シ
他病診査ノ際偶然発見セズ、一アリ然レモ
右之ニ及シテ患者腎丸内及精系ノ徑路
中ニ於テ緊満灼熱スルガ如キ不快ノ感ヲ訴
ハ或ハ陰囊内ニ真ニ疼痛ヲ覺エ殊ニ停立又
ハ勞働時ニ於テハ腰部及下腹内ニ疼痛
波及シ又時トシテハ精系及腎丸ニ劇痛ヲ
起シ遂ニ腎丸萎縮ノ為生殖機能ノ减退
ヲ来スカ如キ一アリ其他罕ニ血塞及靜脈
炎ヲ續發シ危險症ヲ發来スル一アリ

診断 一容易ナリ上記ノ諸症状ニ憑ルキハ

精系水腫 歇浦厄虫等ト鑑別スル一アリ可
シト雖其鶏卵大ニ擴張シ仰臥或ハ壓迫ニ
由テ縮小スルモノ亦時ニ鼠蹊へハあト護ル
一アリ 但シ精系靜脈痛ニ在テハ腫痛ヲ
還納シタル後前鼠蹊輪ヲ壓迫シ起立セシ
ムルニ再ヒ腫痛ヲ顯出スルモ歇浦厄虫ニ在
テハ之ヲ顯出スル一血キシ以テ之ヲ識別ス
可シ

療法 輕症ニ提辜帶ヲ施シ時々冷水灌
洗法ヲ命シ便秘スルモノハ下痢ヲ投シ交接ヲ
節減セシム等ヲ以テ是レリトスルモ重症ニシテ
苦惱ヲ訴フルモノハ手術的療法ヲ施サザル可

カラス就中最も適良ナルハ陰囊ヲ切除シ瘻
張克精系靜脈ヲ切除スニテリ(精系靜脈
一部切除法)此際ニ三ノ靜脈ハ必ず保存
シ又動脈ヲ損傷セザルニ注意ス可シ否ラサレハ
辜丸ノ壞疽ヲ速クノ危険アリ而テ皮創ハ
全ク縫合シ防腐縮帶ヲ施ス又治後ニハ
提辜帶ヲ用イシム可シ

チルマンス氏ハ精系靜脈痛ニ陰囊、皮ヲ切除シ
之ヲ縫合縮小セシメテ屢々良成績ヲ得リト云フ
彼ノリド氏ノ皮下結紮法ノ如キハ奏效確實
ナリ且危険ナルヲ以テ今ハ之ヲ施スル者少シ

第八 辜丸及副辜丸炎症諸病

本症ニ急性、慢性ノ二症アリ

一 急性辜丸炎及副辜丸炎

泌尿生殖器、炎症例之ハ淋疾、膀胱炎、攝護
腺炎等ノ輸精管ヲ經テ之ニ傳播スニ因テ發
スルヲ最多トス其他外傷後若クハ急性傳染病
例之ハ室扶斯、麻拉里曲、流行性耳下腺炎
等ノ經過中ニ本症ヲ發スルヲアリ就中最多
キハ急性副辜丸炎ニシテ多ク、唯之ニ繼發ス
ルニ過キス

症候 最も主要ナル徵候ハ増進性ノ腫脹及
劇痛ニシテ疼痛ハ殊ニ壓迫ニ由テ増劇ス而テ

〇 辜丸 辜丸 辜丸 辜丸
 辜丸 若クハ 副辜丸ノ 孰シガ 主トシテ 侵サレタルヤ
 ハ 第一 辜丸 十五回ニ 就テ 略ヲ 解スルヲ 可シ

辜丸本ニ於ケル腫脹ノ形状



副辜丸本ニ於ケル腫脹ノ形状



陰囊水腫ニ於ケル腫脹ノ形状



辜丸腫 若クハ 副辜丸 係 副辜丸 辜丸 於ニ 示ス

熱ハ 初日ニ 於テ 既ニ 四下度ニ 昇騰スルニ 少カラ
 然レドモ 多クハ 二乃至 四週日ニ シテ 但ニ 間ニ 亦
 化膿ニ 陥ルニ アリ 之ニ 早ク 切開ヲ 加ヘ サルキハ
 自ラ 外方ニ 破開シ 時トシテ 著キ 肉芽性 瘻
 孔ヲ 形成スルニ アリ 辜丸 良性 菌腫 是ナリ
 罕ニ 膿 電包 重衣セシ 其 周圍 著シク 肥
 厚スルニ アリ 然レドモ 重劇ノ 症ニ 在テハ 疔 疔 疔 疔
 腹膜ニ 波及シ 敗血症ニ 由リ 死ヲ 招クニ 無
 キニ 非ス

療法 初期ニ 高舉法、安静、氷嚢貼
 用等 專ラ 消込的 療法ヲ 施シ 且 下劑ヲ 投
 ズルヲ 肝要トス 疼痛劇甚ナルモノハ 〇ルヒ 示

ノ皮下注射、麻醉性坐薬、肛門内挿入ヲ
施シテ、症稍減退スルキハ、鉛醋水ノ湿布巻
法或ハ、灰白軟膏ノ塗擦ヲ施スル最良トス
又既ニ化膿ノ兆有ルモノハ、速ニ切開ヲ行フ
可シ、而テ急性ヲ去ルノ後ハ、常ニ護謨製
提、辜帯ヲ帯用セシムル可トス

急性辜丸炎及副辜丸ニ亦同時ニ精系
及輸精管ノ急性炎症(急性精系炎)及急
性輸精管炎ヲ来スヲアリ、但シ、梅毒ニ此
炎症ヲ起スハ稀ナリ、此際若シ、両側ノ輸精
管侵サレ、為ニ其閉塞ヲ来スハ、生殖作用
ヲ妨害ス、療法ニ、一般ノ法ニ則テ、可シ

二 慢性辜丸炎及副辜丸炎

或ハ急性炎症ヨリ、轉ジ、来リ、或ハ、器血ヨリ、慢性ニ
發スルモノニシテ、之ニ、二症ヲ區別ス、即チ、ハ、辜丸
ノ結締織増殖肥大ニ、漸次硬変スルニ、從ヒ、辜
丸腺質ノ萎縮ヲ来スモノニシテ、ハ、慢性膿潰症
ニ、陥リ、或ハ、包裏セラレ、或ハ、外方ニ、破潰シテ、所謂
辜丸、良性菌腫ヲ、形成スルモノ、是ナリ、而シテ、
辜丸、及、副辜丸、ハ、此、兩病、様ノ、為ニ、益々、消滅
セラレ、遂ニ、結締織、様、若クハ、膿潰セル、硬キ、結
節ニ、變スルニ、至ル

療法

限局性硬結ニ、灰白軟膏ノ塗擦ヲ
試シ、瘻孔ヲ存スルキハ、切開、搔爬シ、膿潰甚シ

キ者ニ寧丸摘出術ヲ行フ等ニ過キス
上記慢性症ノ他茲ニ最モ重要ナルモノヲ**結核**
性**及**徵毒性ヲ云フナリトス

三 **副寧丸及寧丸結核症**

茲ニ屢々見ル所ノ症ニシテ始メ先ツ**副寧**
丸ヲ侵スル常トシ寧丸ニ始メハ稀ナリ而シテ其
多數ハ他ノ泌尿生殖器(膀胱腎臟)担護
腺精囊及呼吸器**結核症**ニ續発スト
虽々寧丸及副寧丸ニ原發スル毎キ非ス
並ニ尚注意ス可キハ寧丸結核症ハ屢々大月推
ノ**結核症**ト合併スル者ニシテ寧丸及副寧丸
ハ外傷及老症モ亦之ガ誘因トナルナリ

△**症候及經過**

副寧丸及寧丸ニ**結核症**
ヲ發生スルマ多クハ徐々ニシテ始メハ粟粒大ノ
小結節ヲ形成スルモ漸次融合シテ大結節ト為
ル殊ニ寧丸ニ原發スルモノハ大ナル乾酪性結節
ヲ形成スルヲ**泌尿器**ヨリ傳播ミラルモノニ在テハ
輸精管肥厚シテ**鉛筆大**或ハ**指大**ノ索状
ト為リ且處々ニ**結節**ヲ觸知スルヲ多シ但シ多
クハ偏側ニ來リ他側ノ侵サレハ遲ニトス然レ
モ其**經過**ハ各症甚異ナリ即チ或ハ慢性ニ
シテ年餘ニ亙ル者アリ(殊ニ原發性ノ者ニ
於テ然リ)或ハ速ニ破潰シテ瘻孔ヲ作ルモノ
アリ(結核性寧丸菌腫)後者ハ殊ニ多ク

見ル所ニシテ此ノ如キ症ニ在テハ他側ノ寧丸モ
亦早ク侵サルノ常トス

診断

シ確定スルハ結核桿菌ヲ証明ス
ルニ在リトモ他臟器ニ於ケル結核症ハ有ル
ヲ強知スルハ殊ニ緊要ナリトス但シ本症ハ其發
生徐々ナルト疼痛著シカラサルト由リ時ニ寧
丸徵毒ト誤診セラルル事非ス又痲痺性
副寧丸其後遺ル硬結ハ結核症ニ酷似
スル一有レ凡既往ノ病歴ニ徴シテ之ヲ鑑識
スル一難カラス

療法

ハ多クハ對症の療法ヲ施スニ過キス
殊ニ其他臟器ノ結核症ニ继发セルモノニ於
テ然リトス然レモ輸精管ノ尚深ク侵サレ
モ之ニ在テハ摘出術ヲ行フ可シ殊ニ寧丸ノ原
發性結核症ハ之ニ由テ全治ヲ得ル一アリ又
對症ノ療法トシテ患部ニ殺菌セル一。%日
トドフオルムケリセリシヲ注入スル一アリ殊ニ兩
側ノ侵サレタルモノニ在テハ手術ニ代ヘ之ヲ行
フヲ良トス

四 寧丸及副寧丸徵毒

徵毒ハ結核症ニ反シテ副寧丸ニ原發スルハ
稀ニシテ通常寧丸ニ始マルヲ多クシトス
症候及經過 寧丸徵毒ハ徵毒後期ノ
症ニ屬シ亦稀有ノモノニ非ス而ラ之ニ二症有リ

即チ一ハ腺間結節部締結ノ硬變ヲ起シ漸次
腺質ヲ萎縮シ起スモノニシテハ限局性護謨
腫ヲ形成スルモノナリ然レモ此兩病様ハ多クハ
相合シテ遂ニ辜丸實質ヲ崩壞セシム而テ
護謨腫ハ通常膀胱様組織中ニ在ルモ其
軟化スルヤ亦外方ニ破潰シ以テ徵毒性辜
丸菌腫ヲ形成スルト其カラス蓋シ辜丸徵
毒ハ通常無痛ナルモ亦疼痛ヲ発スルモノ無
キニ非ズ之ニ觸ルニ硬ク其表面或ハ平滑滑
澤ナルアリ或ハ突起不平ナルアリ而テ其經過
ハ甚ク緩慢ニシテ兩側辜丸共ニ侵サレシ多
シトス

診断

辜丸梅毒ハ性々其結核症ト誤ス

ラレ、一ニ無キニアラス但シ結核症ハ多クハ副辜
丸ヲ侵スモ梅毒ハ主トシテ辜丸ヲ侵シ又前者
ニ在テ通常他臟器ハ結核症ヲ合併ス其他
患者既往ノ未歴射質及駆梅毒療法效驗
者無キ由リ之ヲ鑑別スルト難カス

療法

一固ヨリ驅梅毒療法(水銀劑ノ注射
又ハ塗擦法ヨリトカリ等)ヲ施スニ在リ其他
局所ニ對症療法ヲ行フニ過キス

瘰癧病

モハ間々辜丸及副辜丸ニ結節狀
ノ炎症竈ヲ生シ為ニ辜丸萎縮ヲ来ス
アリ

第四 攝護腺肥大

或ハ攝護腺ノ全ノ部ニ滲ルモノアリ或ハ只其一
部ニ局スルモノアリ殊ニ前者ハ高モ多ク見ル所
ニシテ之ニ又其人々部ニ平等ニ肥大スルモノトニ
三ノ部ハ他部ニ比シテ殊ニ突隆スルモノトノ
別アリ其質モ亦硬キモノアリ軟キモノアリ而
テ其肥大ハ多クハ纖維筋様ノ腺間組織ノ
増殖ニ基クモノニシテ腺管ハ變化セザル下アリ
或ハ萎縮スル下アリ或ハ又囊腫状ニ變性ス
ル下アリ然レバ爾時ニ其増殖スルヲ見ル下無
キニ非ズ(腫腺)蓋シ斯ノ如ク攝護腺ノ肥
大スルヤ其變性ト球塊状トラ向ハス

攝護腺ノ肥

推移セシ或ハ又球塊状、腫瘍、膀胱頭
ヲ擁シ且尿道内口ノ前部ニ位セラ多
排尿管ヲ妨ケテアリ

此他攝護腺肥大ニ於テ膀胱括約筋
ハ或ハ強ク伸張セシ或ハ新生セル結締織
ノ為ニ鬆排セシ、シテ十分其括約作用ヲ
當テ不能ク為ニ尿失禁ヲ来スアリ

攝護腺肥大ノ為膀胱、膀胱頭及尿道攝
護腺部ニ上述ノ如キ變化ヲ来スハ排尿管
障碍セシ、シテ漸ク膀胱ハ肥大及擴張
所謂遠心性肥大ヲ来シ此擴張ハ継テ
輸尿管及腎盂ニ及ビ遠ニ至腎臓水腫

ヲ發スルニ至ケルアリ

原因 攝護腺肥大ニ於ケル直接ノ原因ハ尚
不明ニ屬ス蓋亦症ハ真正ノ炎症ニアトモ、

膀胱及尿道ノ炎症其他骨盤器ノ鬱血ハ
其發生ヲ促スモノ、如シ而テ此症ハ通常老人
ニ来ルモノニシテトムフツシ及ヂワレル氏ニ依レハ
老人百人中之ニ一ニ罹ルモノハ實ニ十六人乃至廿人
ノ多キニ居ルト云フ

症候及經過 本病ノ症状ニ輕重種々アリ輕
症ニ在テハ大ニ其症候ヲ缺クシ或ハ僅微ニシテ

剖檢ニ由テ始メテ之ヲ發見スルノ數カ多ク然レハ
稍重症ノモノニ至レハ排尿管障碍ヲ以テ最モ主要

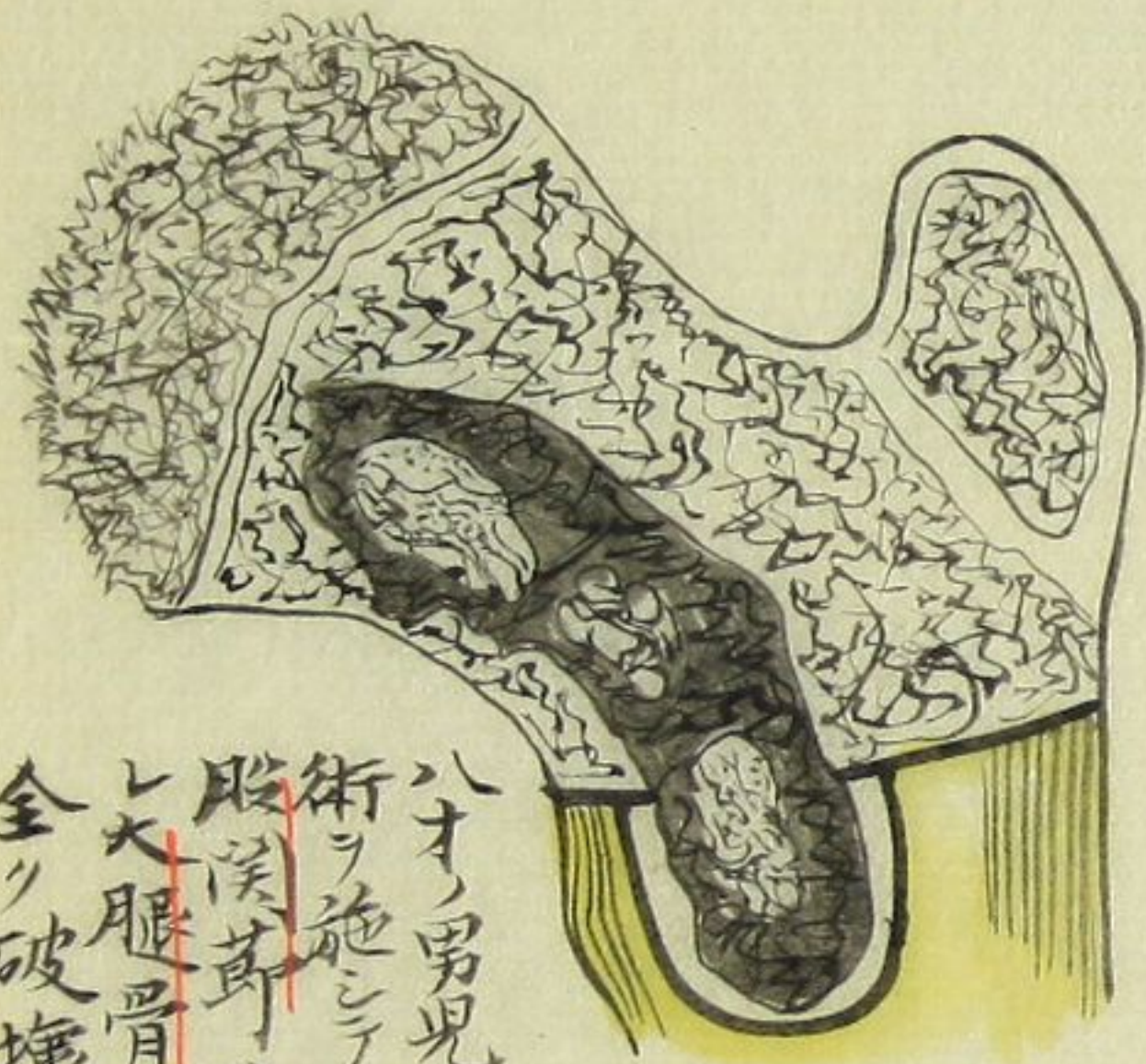
徵候トス是レ上文既ニ述ベクカ如何膀胱、
膀胱頸及尿道提護腺部ノ高變ニ由リ
或ハ膀胱括約筋ノ閉鎖不全ノ為ニ来ルモ
ニテ始メ或ハ排尿困難ヲ来シ或ハ尿失禁ヲ
来スモ高度ノ症ニ至レハ「排尿著シク障碍セシ
患者強ク努責シテ僅ニ尿ヲ滴漉スルヲアリ
又提護腺肥大ノ為ニ排尿障碍ヲ有スルモノニ
於テ一朝膀胱頸部ニ障碍加リ炎症ヲ起
スガ如キヲアルモ俄然尿閉ヲ来ス下アリ斯ノ
如ク提護腺肥大ニ在テハ宛モ尿道狭窄ニ於
ケルカ如何膀胱内ニ常ニ尿ヲ鬱滞ヲ来スヲ
以テ膀胱輪尿管及腎盂ノ擴張ヲ来シ又
かてーて送入ノ為尿管分解ヲ起シ膀胱
加塞見ラ来スシタトス其他かてーて送
入ノ過失ニ由リ提護腺ニ穿孔ヲ来シ假尿
道ヲ造ルキ之ニ相當敗壞ニ在ラザレバ
不良ノ轉帰ヲ有ス下アリ但シ高度ノ
症ニ於テ死セラ来スハ多クハ増進性衰弱
膀胱炎、腎臓炎等之ガ原因ナリ
診断 上記ノ症状ト患者ノ高變ナルト本
病特有ノ徵候ト然レモ提護腺肥大ニ由
テ生ズル症候ハ亦他ノ尿管疾患ニ於テ
見ルルナリ以テ之ニ由テ直ニ之ヲ確診スル
ト決メス必スヤ直腸及尿管ニヨリ提護腺

内かてしして又なる一能ハ其片ハ或ハ
軀骨上膊腕掌刺術ヲ施スルカ或ハ或ハ
切術術ヲ行フカ或ハ又外取道切術
術ヲ施ラ振取ラ行ラサレリカ
然レ以上述ベタル法ハ固ヨリ姑息
ノ救済法トシテ之ヲ用スル者其甚害
ヲ除カスル根治的救済ヲ企テザレリカ
サレ未ダ確實ノ良法ヲ施スルモノ也
之ハイネ氏ハ撰護腺肥大ヲ縮小セシメ
カ為一乃至二回毎ニ其實験中ニヨロド落
液(ヨロド)或三〇、〇ヨロドカリニ〇、〇湯水
六〇、〇ハ良法ヲ施シ良成績ヲ得リ

ト是後復後往ニ膿瘍ヲ生スル者ハ以テ要
全ノ法トシテ可カス又太キカテシテ尿管
道内ニ送入シテ撰護腺部及尿管内口
ヲ暴露力ニ擴張セシメ一時ノ效アリ
中々その他手続的療法トシテ撰護腺切
術或ハ撰護腺切除術ヲ施スルモノアリ
氏未ダ確實ノ效ヲ收メタムモノ無シ然レ
而シテ寧九摘出術ハ屢ニ良效ヲ奏シ
先トアリ是レ撰護腺ノ發育ハ寧九ノ發
育ト親密ノ關係ヲ有スルモノニテ寧九
ヲ摘出スルキハ遂ニ撰護腺ノ萎縮ヲ來
スノ理ニ基ケンナリ

三個人骨有火大股骨結核症

吉天生皮目下三

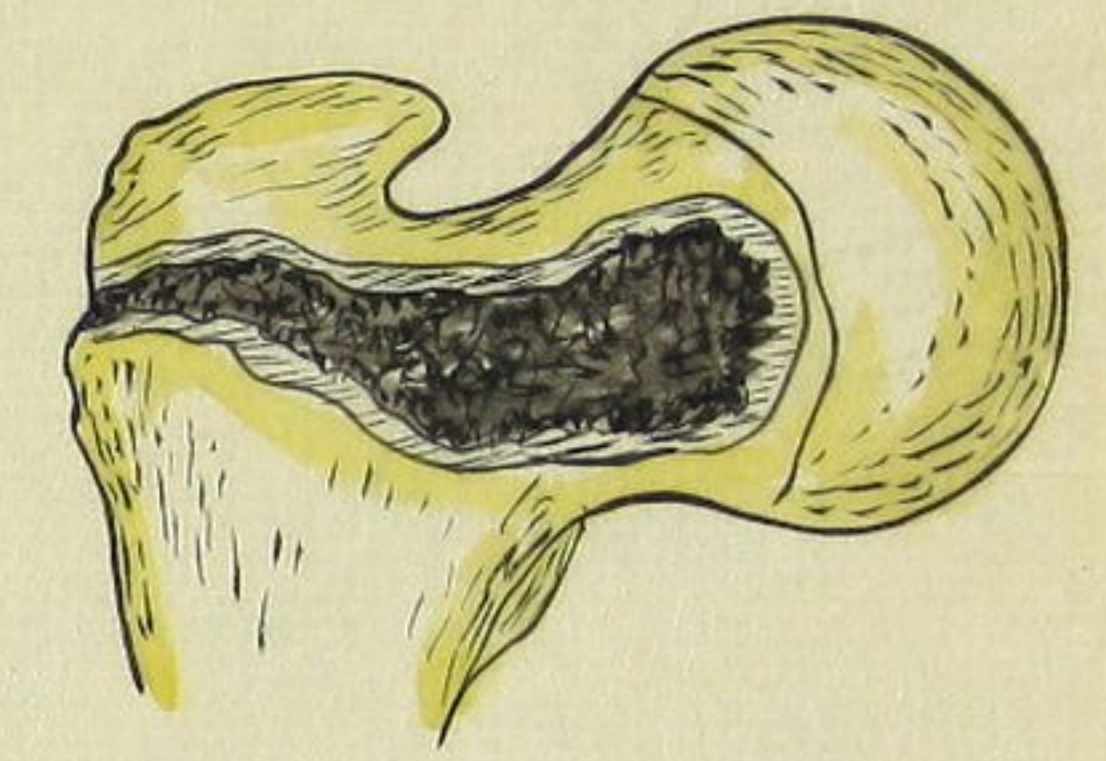


ハオノ男児ニ股関節切除
術ヲ施シテハ骨髄モニシテ
股関節ハ継發的ニ侵サ
レ大股骨頭ノ軟骨ハ
全ク破壊セシ

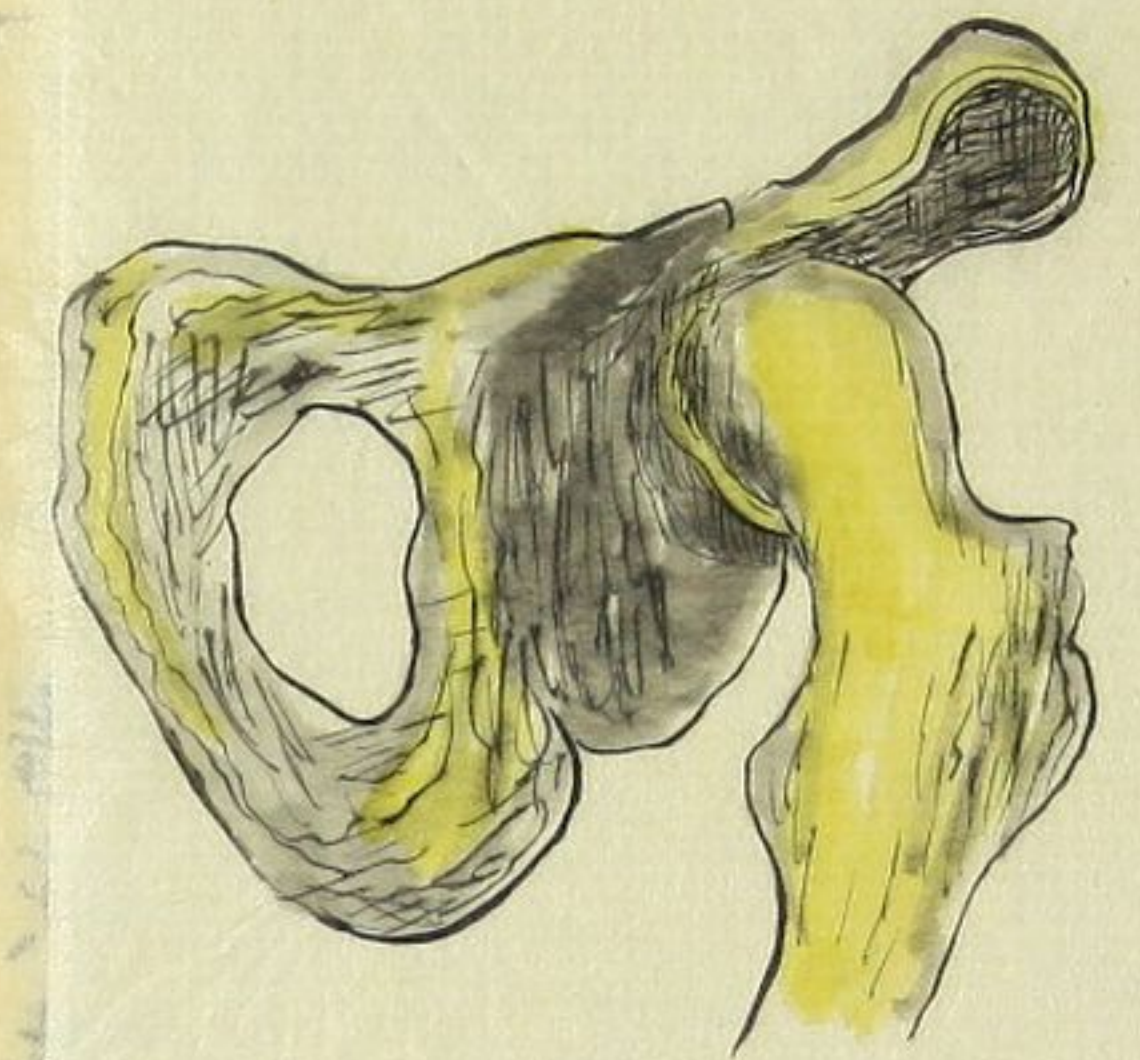
結核性股関節炎

他關節ノ結核症ニ於ルガ如ク骨質若クハ滑液
膜ニ原發スルモノモナレバ最モ多キハ骨質内即チ
骨頭、骨頸或ハ大轉子内ニ結核竈ヲ原發シ次
テ關節内ニ破開スルモノニシテ滑液膜ニ原發スルハ罕
ナリトス但シ骨頭或
ハ大轉子部ニ原發
セル結核竈ハ關節
内ニ破開セズ
テ外部ニ向
テ破開スル
往ニ之レ有り

大以ニ洞破ニ外節関
電病性核結ノ骨腿



走遊ノ白髒



而テ結核症ノ骨質ヨリ関
節ヲ侵スヤ始ノ屢ノ関節
ニ漿液性或ハ漿液纖維
素性ノ滲出物ヲ生ジ以テ
所謂結核性關節水腫
ヲ呈スレバ後ニ乾酪性膿
液ヲ生シ病勢漸ク進ムニ
從ニ軟骨及骨蓋ニ破壊
セシ骨頭及骨頸ハ遂ニ
全ク消耗セシ髒白モ亦
往々穿孔セシ又屢ニ壓
迫ノ為上方ニ擴大セシ骨

頭ハ之ニ從ヒ轉移スルコトアリ是レ所謂髒白ノ遊走
ニシテ骨頭ハ髒白ノ脱臼ヲ起ス者ナリ此他炎症
關節囊ヲ破リテ外方ニ破洞スルハ間々著シキ関
節周圍膿瘍ヲ形成シ其更ニ外表ニ破洞スルヤ
此所ニ往々長キ痿管ヲ生ズ但シ此關節周圍
膿瘍ハ關節囊ノ破洞ニ因テ淋巴行ニ介シテ結
核桿菌ノ茲ニ沈着スルニ因テ發シ直接ニ關節内
ニ連絡セサルコトナリ

症候及經過

股關節結核症ハ通常五
歳乃至十歳ノ兒童ニ觀ルコト最多ニシテ三歳未滿
ノ小兒並ニ大人及老人ニ見ルハ罕ナリ而テ其症候
ハ疾病經過ノ時期ニ從ヒ異ナル者ニシテ經過ハ多

ノ甚慢性ナリ故ニ今^左四期ニ分テ之ヲ論述
セントス

結核性股関節炎ノ初發期 ニ特有ノ症

候通常ニ有り即チ跛行ト股関節大股
全部及膝部ニ互ル疼痛 是より蓋シ本

症ニ罹レル兒童ハ始メ歩行スルニ当リ疲労スル
一速ニシテ潤歩スル一能ハ跛行スルヲ常トス

ルモ股関節ニ未タ炎症(性状ヲ察見スル一
能ハ是レ此際通常原發病竈ハ尚骨頭或

ハ骨頸内ニ潜伏シ未タ關節ヲ侵サレバナリ
然レ凡病核漸ク増進スルニ從ヒ方ニ一特徴タル

疼痛ヲ發現シ来ル即チ患者歩行ノ際股関節
ニ疼痛ヲ覺エ又大轉子上及股關節ノ前部

大腿ノ前面ニシテ所謂スカルハ氏三角部スカルハ氏三角部

部ハ上方ハ鼠蹊軟部ヲ基底トシテ外側維匣鼠蹊軟部ヲ基底トシテ外側維匣

筋ノ内側ハ長肉轉動ヨリ境セラレテ壓
迫スルニ疼痛ヲ訴(或ハ之ヲ特發ニ間ニ劇甚

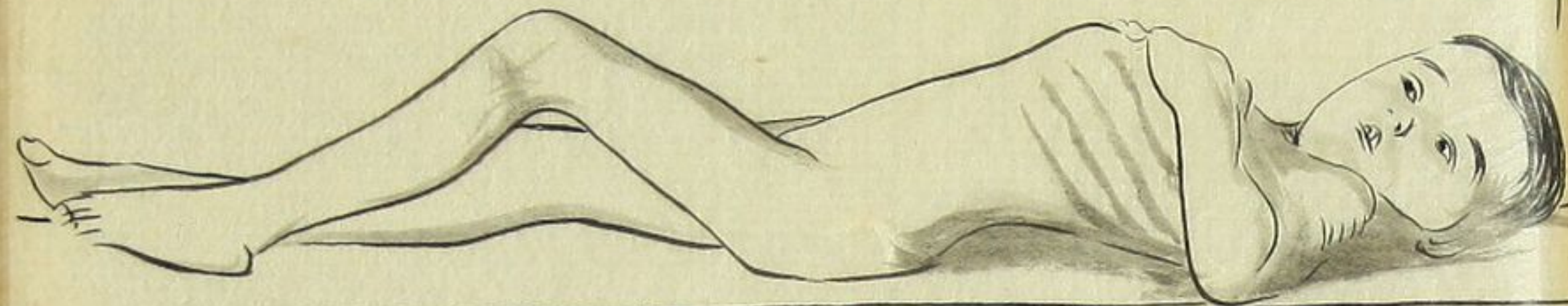
ナル一アリ殊ニ夜間ニ於テ然リトス又此疼痛ハ
往々膝關節ニ於テ甚シキ一アルヲ以テ俗人ヲ

シテ屢々患部ヲ誤認セシムル一アリ蓋シテ
遠心性膝痛ノ原因ニ就テハ諸説アリトモ

一説ニ據レハ恐ク大腿骨上端内ニ発シタル骨
髓炎ノ為下方ノ骨端線ニ至ルマテ全骨髓腔

ノ神経悉ク刺戟セラレ此神經刺戟ハ大腿骨
下端ニ於テ集積シ以テ此所ニ疼痛ヲ感ズルニ

股關節及腰及曲屈ノ前奮



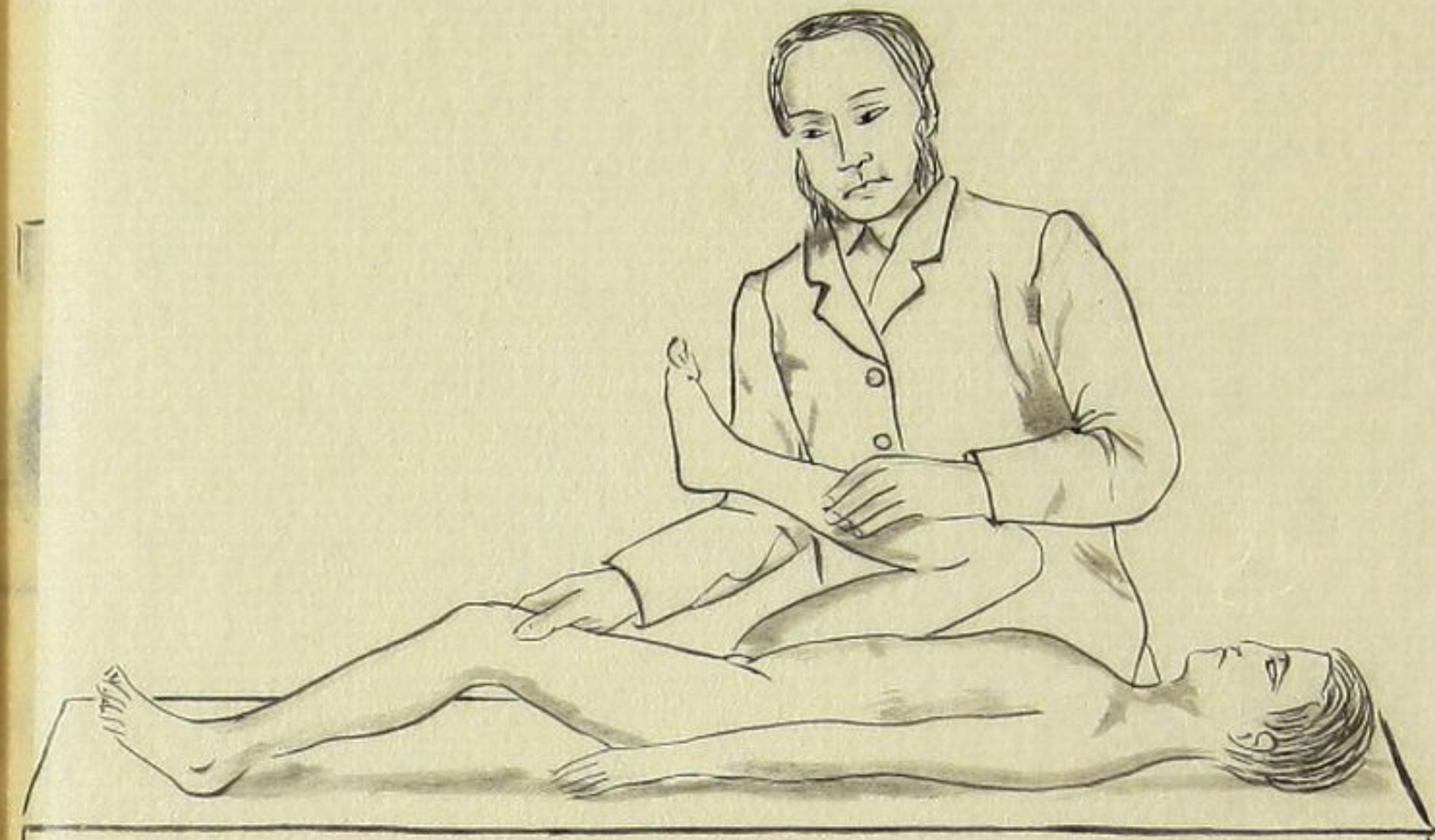
ハ特異ノ位置ヲ取ルニ由ル
結核性股關節炎第二期即第一
開花期、始メトシ即チ此期ニ至
 六脚ハ股關節ヲ於テ屈曲、外轉
 且外轉セラレ而テ患兒ハ斯如ク變
 位セテ脚ヲ以テ起立歩行ヲ止ルキ
 ハ骨盤ニ稍シ前方ニ傾斜シ且患
 側ニ向テ沈降セラレ以テ腰推ノ前
 彎胸推ハ側彎及脚ハ假性延
 長(炎性刺戟ノ為骨ノ發育増進
 セラレ間ニ脚ノ真性延長ヲ来ス)ト
 キニアラズ)ヲ来シ遂ニ關節ノ白

股關節ノ屈曲外轉
 及外轉期ノ示ス

(氏トフツホ)



至ルモノナラント然レモ他説ニ憑レハ此膝痛ハ至リテ閉
 鎖神經ノ刺戟ニ基因スルモノナリト云フ而テ此疼痛
 ノ増劇スルト共ニ股關節ノ運動益々制減セラレ
 殊ニ迴轉運動ハ最初ニ妨害モラレ次テ諸
 他ノ運動範圍減縮セラレ、モ其障礙ヤ始
 只假性ニシテ麻酔ヲ施スヤ、他働的運
 動ハ毫モ妨ゲラレ、一無クシテ有ルモ極ク僅
 微ナリ斯クテ此運動障礙ノ發生ニト共ニ患肢



働的及他働的運動之其ニ真ニ削減セラルニ由ル

今股關節炎患者ニ就テ脚若クハ骨盤ノ固定ヲ示説セント欲セバ上圖ニ示スガ如ク患者ヲ平臥セシメ股關節ニ於テ健脚ヲ極度ニ屈曲シ次テ屈曲セル患脚ノ伸長ヲ試ム可シ然ルキ骨盤ノ舉リ脊柱ハ其度ニ應ジテ前方ニ向テ彎曲スルヲ觀ル可シ此ノ如キ股關節ノ運動制限ハ閉花期ニ於テハ麻酔中ニ亦觀ル所ナリ而テ此異常ノ位置ヲ来ス原因ニ就キホント

氏ハ説テ曰ク股關節ハ此位置ニ於テ最大ノ容積ヲ得ルヲ以テ其中ニ滲出物及肉芽組織ヲ充スモ最モ能ク其腫ニ堪ヘテ疼痛ヲ軽減スルヲ可ト然レドケレモ此氏ノ説ニ應ビ是レ患者起立歩行ノ際關節ノ疼痛ヲ軽減セントスル自然ノ結果ニ由ル者ナリト即チ患者ト歩行セントスルキハ患脚ノ疼痛ヲ軽減セシメ為テ健脚ハ内轉シ以テ自己ノ身軀ヲ支持シ為ニ健脚ハ内轉ノ位置ヲ取ルヲ以テ患脚ハ自ラ外轉セシメ又此位置ニ於テ歩行ヲ容易ナラシムルカ為ニ股關節ヲ僅ニ屈曲シ且全肢ヲ外轉スルヲ最モ便トス故ニ此異常位置ハ不隨意的ナリ

股關節ノ常態ノ内曲
 及内轉ノ期ノ示ス
 (右ノ本)



ノ位置亦一変ス即チ療法當リ得サルハ通
 常股關節ノ内曲更ニ其度ヲ増シ量表ニ
 外轉及外轉セル脚ハ漸次内轉及内轉セラ
 ル(左圖)是レ患兒ハ褥中ニ在テ疼痛ヲ避ケ
 ンガ為常ニ健側ニ臥シ其患脚ヲ健脚ニ由テ支持
 スレハナリ又股關節ノ韋氏箱ハ筋及廣筋膜ノ

結核性股關節炎ノ第三期即チ第三
 開花期ニ進ミタルモノニシテ此期ニ至ル患肢

斯クシラ尚時日ヲ經過スルニ諸症増進シ
 股關節部ハ益ニ腫脹シ患肢ハ筋ノ疼
 用萎縮ノ為ニ瘦削シ疼痛モ亦増劇シ
 シ以テ患者起立歩行スルニ能ハズ遂ニ就褥
 スルニ至ル是レ即チ

ナリト

ト莫實ハ患者ノ随意ニ取リタルヨリ起ル者ナリ
 ト又チルマンズ氏ハ以為リ是レ主トシテ股關節
 ノ炎性刺戟ニ因ル反射的牽縮ニ因ルモノ
 ニシテ諸他症タル關節牽縮ニ於ケル上向一理

萎縮ノ為益ニ固之セラル其他此期ニ於テハ短縮
長セル脚ハ益ニ短縮ス此短縮ハ最初ハ骨盤傾斜
ニ因ル假性ノ者ナレ後ニ真性ト為ル是レ大腿
骨頭若クハ骨頭ノ崩壞骨端線ノ結核性
変性ニ因ル骨ノ發育障礙又ハ解白崩壞
セラレテ上後方ニ擴大スル(所謂解白ノ遊走)
等ニ由來スルモノナリ漸ク如クニシテ病機漸
ク進行スルキハ遂ニ關節周圍膿瘍下垂膿
瘍等ヲ生シ其破壞スルニ至リ關節周圍ニ長キ
痿管ヲ形成シ腸骨粘液囊亦侵サレ又時
トシテハ骨盤骨瘍ノ為骨盤臟器殊ニ膀胱
膀胱侵シ尿管痿ヲ形成スルアリ此他膿瘍

ハ屢ニ鼠蹊軟帶上ニ蔓延シ間々直腸迄部
ニ出現ス次テ通常年餘ヲ経テ來ル所ノ期即チ
結核性股關節炎第四期即チ終末期
ニシテ患者ニ或ハ自然ニ或ハ手術ニ由テ治癒ヲ得
或ハ増進性衰弱若クハ内臓殊ニ肺臟ノ結核性
症又ハ全身粟粒結核症等ノ為ニ斃ル但シ此
終末期ニ達スルニ患者ノ體格治療ノ方法等
ニ由リ各症頗ル其經過ノ長短ヲ異ニタルモノニシテ亦
必シモ皆上述ノ如キ定型的經過ヲ取ルモノニシテ之
間ニ頗ル急劇ニシテ早ク關節ノ化膿ヲ來シ全
身粟粒結核症或ハ結核性腦膜炎ノ為ニ死亡
スルモノアリ蓋シ斯ノ如ク關節ノ化膿ヲ來ス

早キハ滑液膜ニ結核症ヲ原發スルカ或ハ骨表
層内ニ病竈ヲ發生スルニ因ルモノナラン

診断

股関節結核症上記ノ諸症及經過

ニ由リ之ヲ診定スルノ敢テ難カズト虽其初
期ニ於テハ往々診断ノ困難ナルアリ蓋シ患
者ノ近來跛行ヲ始メト訴フルモノミテ精密ノ
検査ニ由リ其原因股關節ニ在ルモノハ大ニ本症
ノ疑ハ懷カシムルモノナリ故ニ此場合ニ於テハ宜シク
先ツ股痛ノ有無又其特發性ナリヤ或ハ压迫
ニ由ラ発スルヤヲ檢知スルニ圧痛ヲ檢スルハカ
ル。ハ氏三角部ヨリシテ深部ニ向テ压迫スルカ
或ハ大轉子ト上ニ压迫ヲ加フルヲ良トスルモ亦大

腿ヲ解白ニ向テ压迫シ或ハ直腸内ヨリ解白部
ヲ压迫スルモノナリ但シ時トシテハ患者專ラ膝痛
ヲ訴ヘ股關節ニハ外觀上疼痛ヲ缺クナリ然
ルキハ患者ヲ仰臥セシメ脚ヲ取り注意シテ外輪
運動ヲ試ム可シ之ニ由テ内轉筋忽チ反射的
ニ緊張シ骨盤ヲ固定スルヲ見ルキハ股關節
炎ノ診断既ニ確實ナリ矣此他本症患者ハ步行
セシムルニ患則シ足蹠全面或ハ只趾面ノミヲ以テ
注意シテ地上ヲ踏ミ又之ニ直ニ命スルニ可及
的健脚ヲ以テ身軀ヲ支ヘ少シク患脚ヲ履
スルヲ見ル可シ然リ而テ病機既ニ稍ニ増進セ
ルモノニ在テハ其特異ノ徵候ニ由リテ之ヲ診断ス

ル一難カズト虽亦之ト鑑別ヲ要ス可キ疾患
少カズ今左ニ只其主要ナルモノヲ略述セントス

類症鑑別

上肢関節炎ト最ニ誤診シ易キ

モノ結核性脊椎椎々ニ因ル腸腰筋膿瘍ト

大臀筋腱ト大轉子トノ間ニ位スル大粘り液
囊即チ臀筋大轉子間粘り液囊ノ炎症アリト
ス即チ前者ニ在テハ該筋ノ緊張及疼痛ヲ減
ゼンカ為脚ハ屈位ヲ取り又小轉子ニ附着スル腱ヲ
弛緩セシメシガ為稍ニ外轉スルヲ以テ股関節炎ノ
初期ト誤リ易ク又鼠蹊韌帶下ニ膿瘍ヲ生ス
ルキハ歩行ヲ妨グ且股関節部ニ腫脹ヲ来スハ
之ニ類似ノ症状ヲ呈スレモ腸腰筋膿瘍ニ在テハ

股関節ニ疼痛ヲ認メス麻醉ヲ施スニ其運動
障礙若クハ寧縮ハ該關節自己ニ存セサルヲ
以テ之ヲ鑑別ス可シ此他鑑別上尚肝要ナルハ
脊柱ヲ精査シテ其彎屈及疼痛ノ有無ヲ檢
シ又腸骨窩ヲ触診シテ波動ノ有無ヲ察知
スルニ在リ

臀筋大轉子間粘り液囊ノ化膿ハ大臀筋張股
鞘筋及四頭股筋ニ向テ蔓延シ大臀筋下ニ膿
ヲ来シ該筋ヲ緊張セシムルキハ脚ヲ外轉且外
轉セシメ又多ク其運動ヲ妨クルヲ以テ股関節
炎ト誤診シ易シト虽本症ニ在テモ關節部ヲ按
壓スルニ亦疼痛ヲ起サレルヲ以テ股関節炎上區別

シ得可シ然レモ若シ疑似決シ難キキ存在セル瘻
管ヲ切割シ指頭ヲ以テ能ク探検ス可シ是レ殊
ニ股関節切除術ヲ施セントスルニ當リ緊要
ナル診法ナリトス

此他股関節結核症ハ大人小兒ヲ問フ時ニ髌
的里性(神經性)股関節炎ト誤診セラルルニ由
キニ非ザレモ後者ニ在テ數年ヲ経ルモ炎症腫
脹関節ノ破壊等ノ諸症ヲ致クヲ以テ之ヲ知ル
可^レ也甚稀ニ股関節周圍又ハ大腿骨頸部
ノ新生物ト誤ルニ由リ

豫後 一汎ニ良ナラズト云之ヲ初期ニ診断シ
始メヨリ適當ノ治療ヲ施スハ尚治療ヲ期

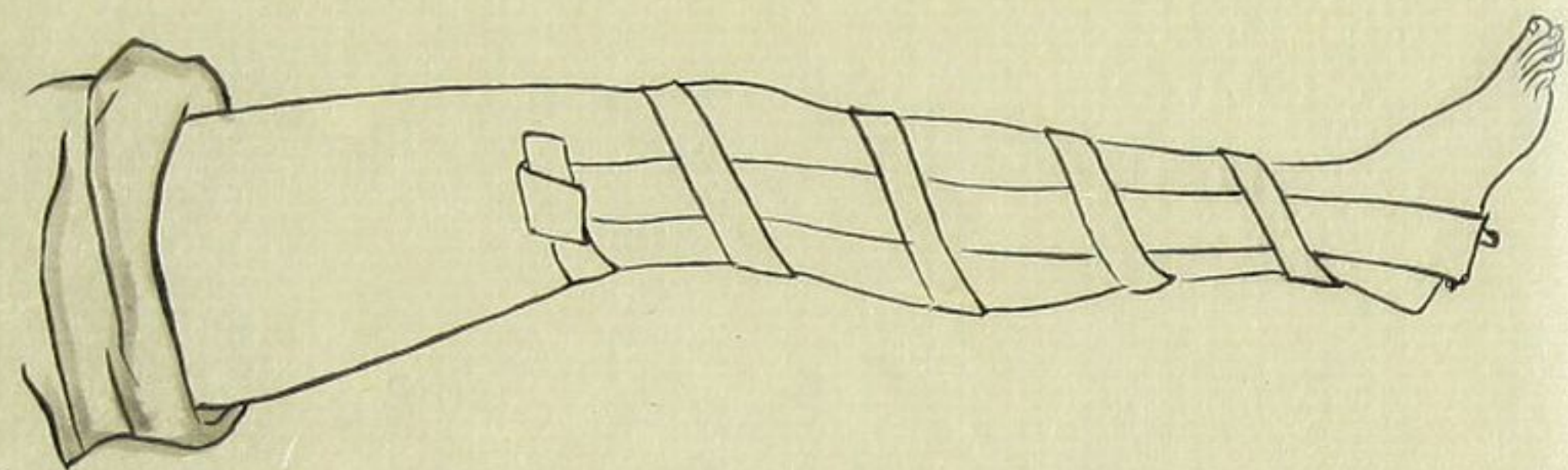
ス可キトアリ然レモ其既ニ第二開花期ニ進行セル
モノニ在テ豫後通常不良ニシテ患者ハ肺結核症
結核性腦膜炎其他急性化膿等ノ為ニ斃ル、
ヲ多シトスブルンス及ワグネル氏ニ憑ルニ本症ノ死
亡數ハ約四〇%ニシテ其死ニ至ル時期ハ三年ヲ起
スト強ニ患者ノ年長ナルニ從ヒ豫後不良ト為
ル又強ニ全然治癒シタルモノ如キモ十數年ノ
後自然ニ或ハ偶ニ外傷ノ為ニ再発シ比較的早
ク他臟器ノ結核症ニ因テ斃ル、トアリ又幸ニ
全治ヲ得タルモノニ在テモ再發期ニ於テ痊愈
シタルモノ外ハ常に患肢ノ短縮及クハ少ノ痺
動障礙等ヲ免レサレザルモノトス

療法

結核性股関節炎ニ先ツ保守的療法ヲ施ス可シ即チ初發期ニ於テハ可及的關節ヲ固定シ歩行停止ヲ嚴禁シ床上ニ安臥セシメ

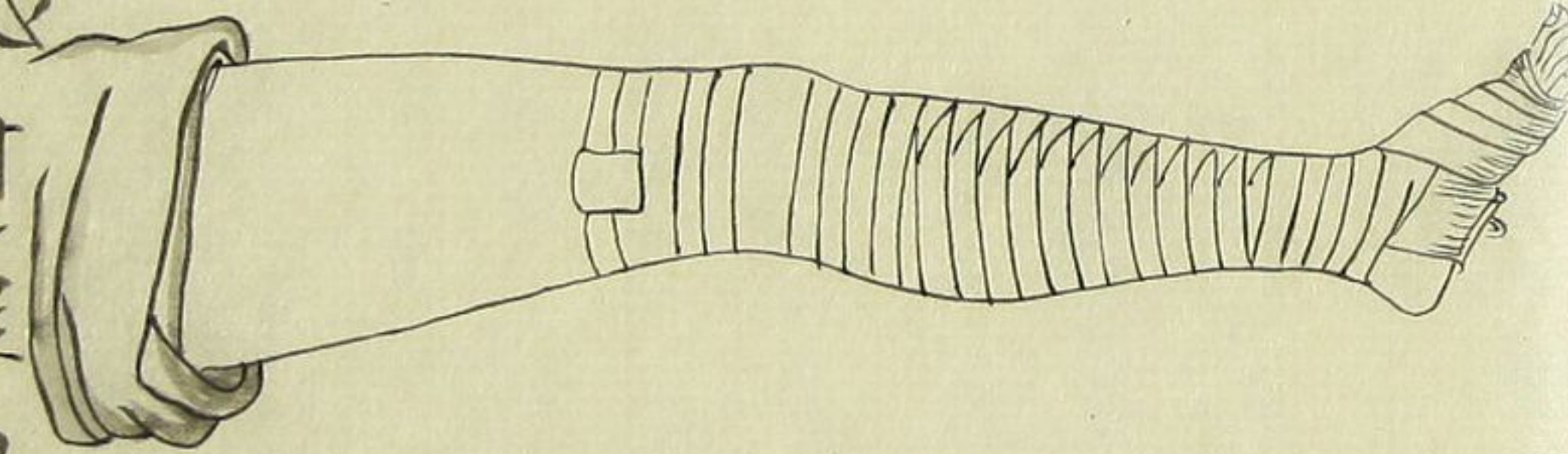
重錘展伸縮帶(左圖甲乙丙)ヲ施ス可シ并創膏展伸縮帶ヲ施スハ大人ニ在テハ大約三指横徑乃至一掌横徑ノ絆創膏線條ヲ作り其中央部ヲ蹄原状ニ足蹠下ニ當テ兩端ハ足蹠上部ヨリ下腿ノ兩側ニ沿テ上行セシメ大腿ノ中央部ニ至リ尚第二ノ絆創膏ヲ蛇行状ニ纏絡シテ之ヲ固定シ(甲圖)最後ニ通常ノ卷軸帶ヲ以テ患肢ノ末端ヨリ絆創膏帶貼附ノ末端部ニテ固ク纏絡シ尚

法是固(帶膏創絆)用=法伸展錘重



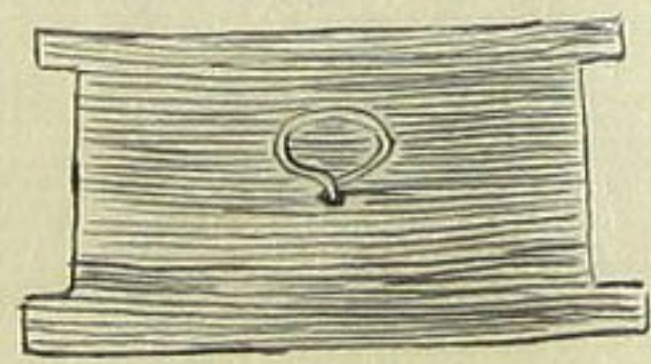
甲

法是固(帶膏創絆)用=法伸展錘重



乙

杖巨

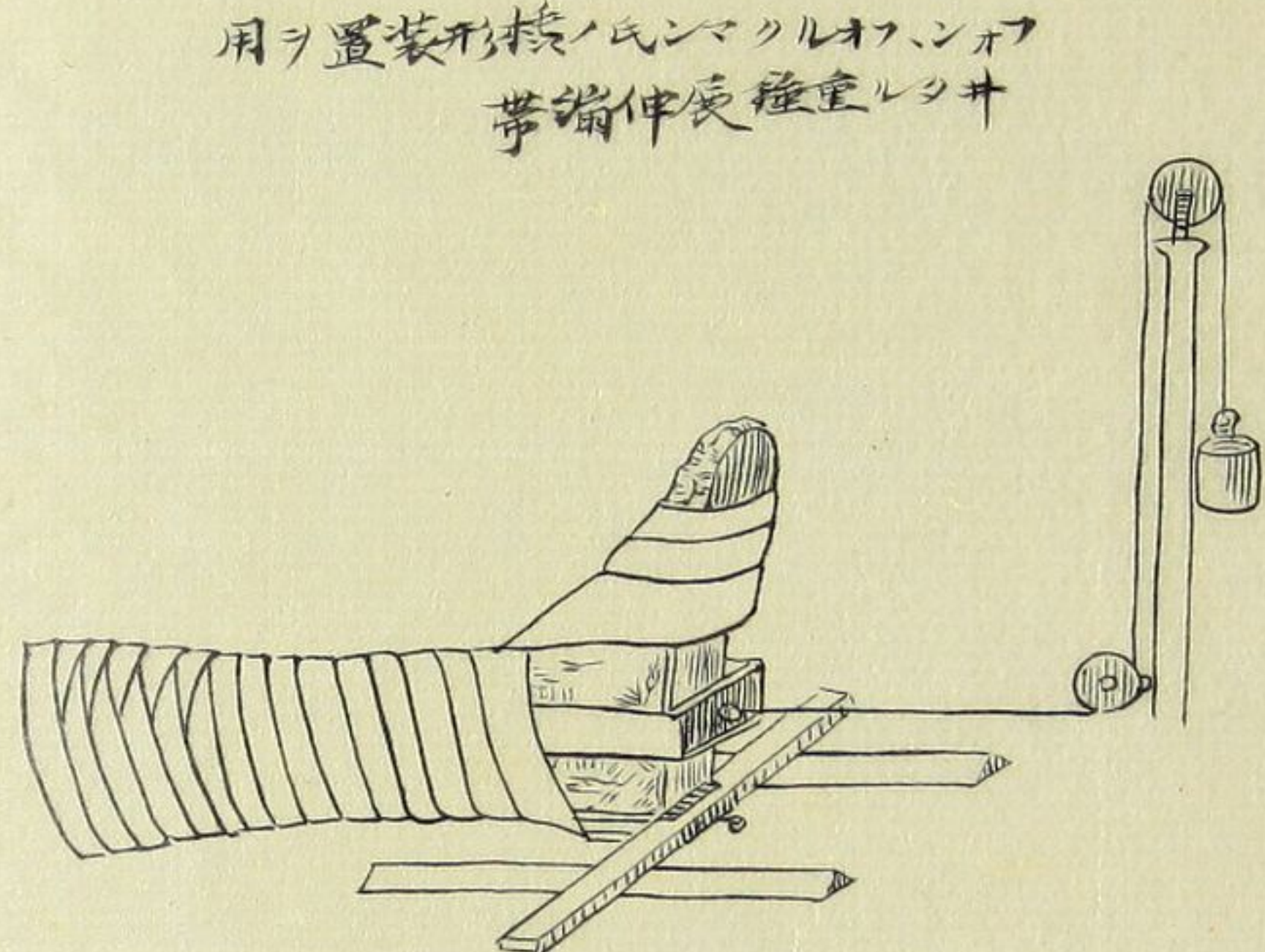


丙

部ニ小環ヲ有スル小杖即チ杖ヲ附シ環ニ紐條ヲ繫キ之ヲ

餘ニ絆創膏端外方ニ折轉セシメ卷軸帶ヲ以テ之ヲ固定ス(乙圖)而テ足蹠ノ蹄原

滑車ニ懸ケ其末端ニ重錘ヲ附シテ牽引ス然レモ



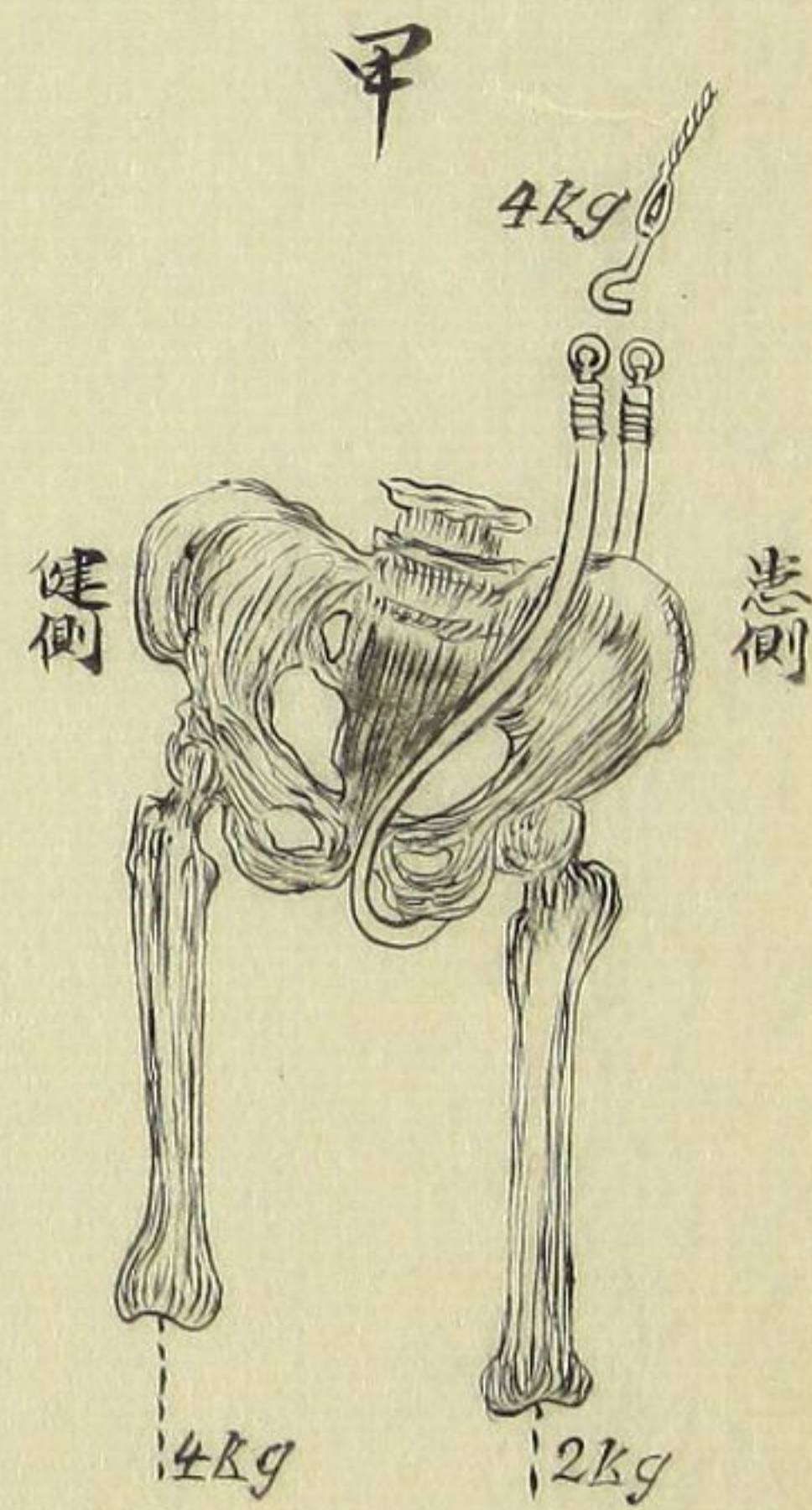
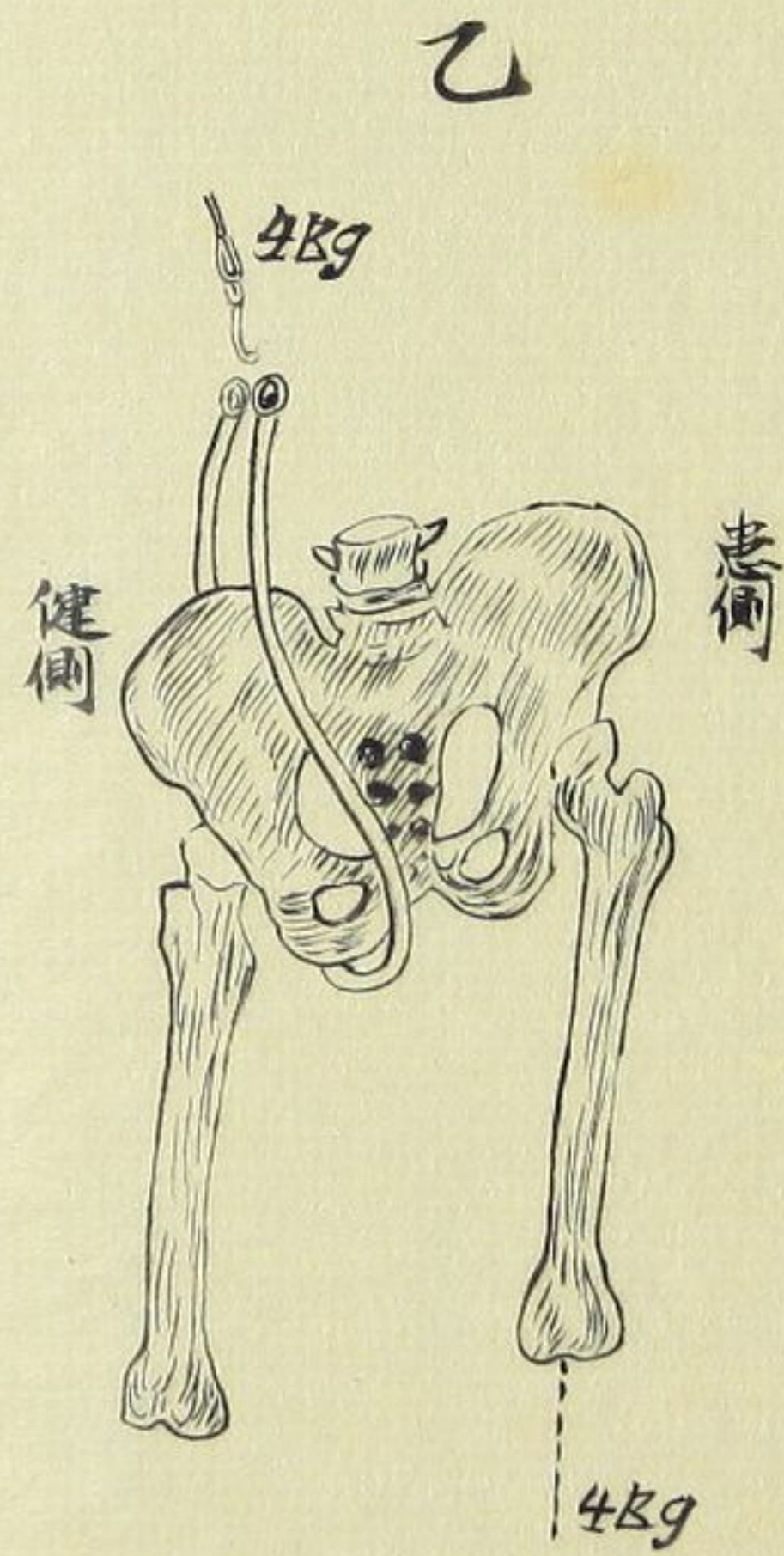
其餘下肢ヲ支持スルノ無
クニ下肢ハ直ニ臥褥中ニ
沈ミ摩擦ニ由ラ多ク少
牽引ヲ妨クルノミナズ患
肢側方ニ移轉スルニ慮アリ
通常之ヲ防グニフオン
フォルクマン氏ノ滑動足板
ヲ採用ス是レ踵部ニ截
痕ヲ作りし鉄葉製ノ
有溝副子ニ足板ヲ附
シ之ヲ二個、三稜形ノ長

桿上ニ載セ自在ニ滑動セシムル者ナリ
沈氏ノ機形装置(右圖)即チ是ナリ而テ斯ノ
如ク下肢ヲ牽引スルハ身體モ亦共ニ一方ニ牽引
セラルヲ以テ之ニ牽引反對ヲ施サレ可ク即
チ之ヲ施スル柔軟ニシテ内ク且大ニ紐帶又ハ
綿花ニテ包ミタル太キ護護管ヲ一方ノ股間ニ
繞ラシ之ニ細紐ヲ附シテ臥牀ノ頭端ニ導キ其
末端ニ重錘ヲ滑車ニ懸ケルカ或ハ甚單筒
状ハ臥牀ノ足端ヲ握擧グニテ患者ノ軀重シ
利用シテ反對牽引ニ代ヘ可シ而テ下脚ノ牽引
ニ用テ重錘ノ重量ハ兒童ニ在テハ半齡ニ
後ニ二乃至五量ノ用ヲ大人ニ在テハ五乃至六

基石或ハ其以上ヲ用ニ重錘牽引法ヲ施スルハ
 關節頭ヲ解白ヨリ遠サケ兩者ノ間ニ僅微ノ間
 隙ヲ生ス骨盤ノ傾斜及大腿ノ位置ヲ矯正シ若
 クハ之ヲ豫防センニ骨盤下ニ適當ノ枕子ヲ入レ之
 ヲ高舉ス可シ又第一開花期ニ於テ大腿着ク
 外輪セルモノニ在テ右回甲ニ示スカカク健脚ヲ
 モ亦強ク牽引シ患側ニ反對牽引ヲ施スル長ト
 ス若シ又第二開花期ニ於テ骨盤傾斜ノ為
 脚ニ假性短縮ヲ呈シ内輪ノ位置ヲ取ルルハ患
 肢ヲ牽引シ反對牽引ヲ健側ニ施スル右回乙
 ニ示スカカク此他ノ局所療法トシテ可及的
 早ク殺菌スル。% 沃度仿誤グリセリシ開

健側側骨盤下降因脚假
 性短縮性呈且外輪也
 重錘牽引法ニ施スルモ
 重錘牽引法ニ施スルモ

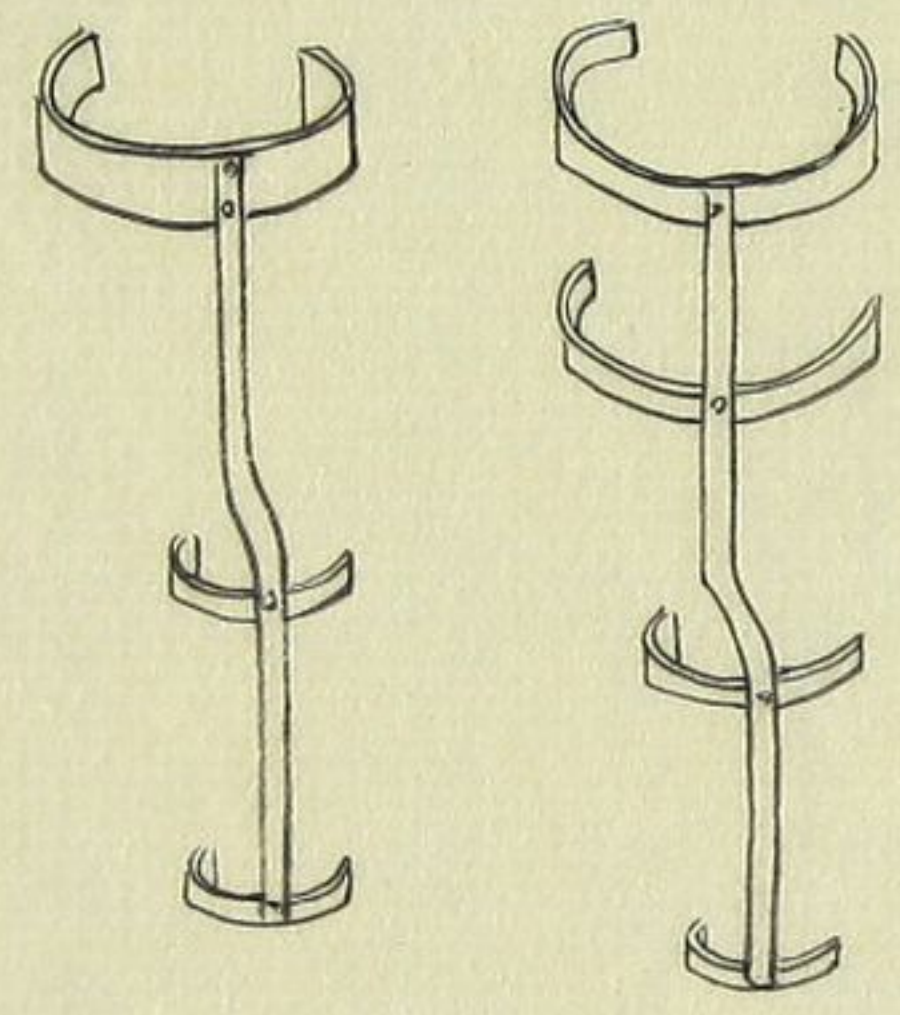
健側側骨盤下降因脚假
 性短縮性呈且外輪也
 重錘牽引法ニ施スルモ
 重錘牽引法ニ施スルモ



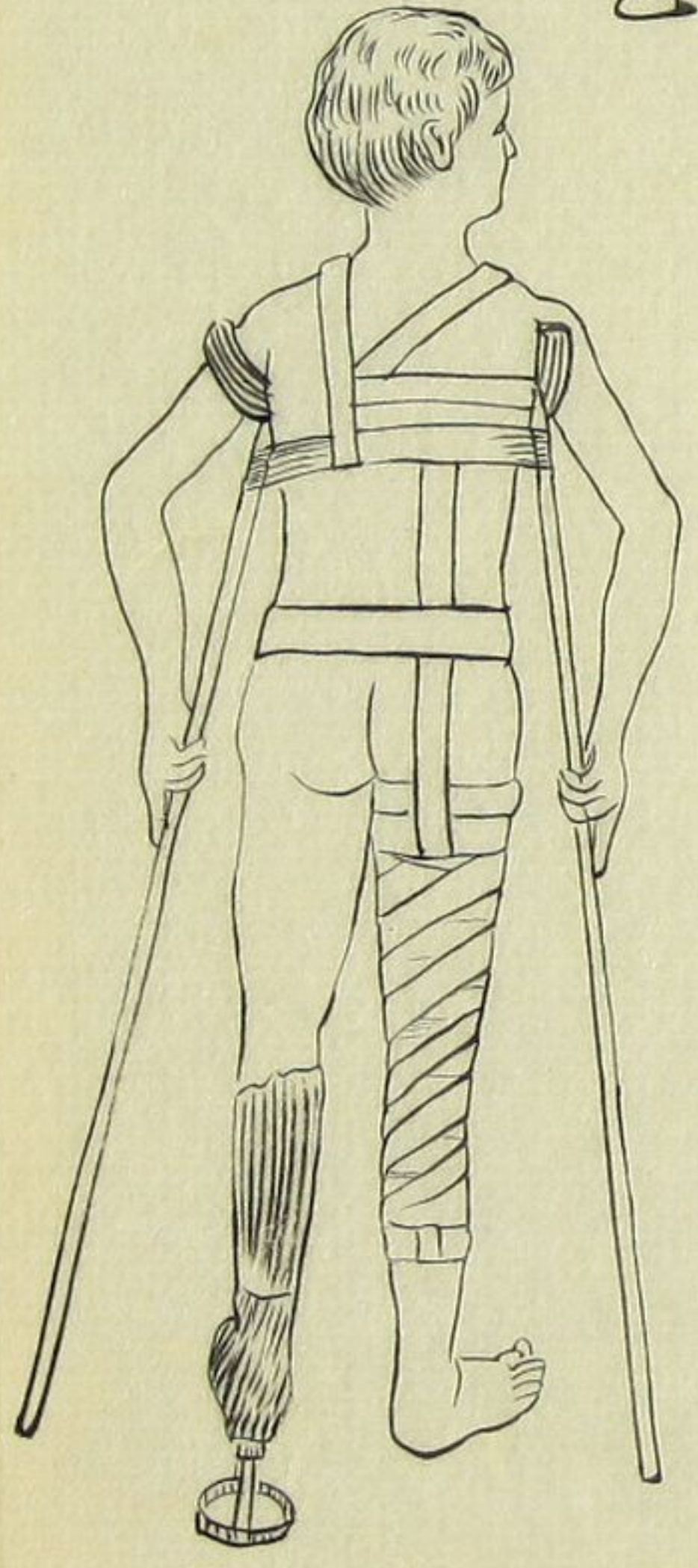
節ノ内外ニ注入スルヲ有效ナリトス此法ハ大凡ニ
 五至四週日毎ニ施スモ一週ノ用量ハ年終ニ
 從ヒ五乃至十乃至二十乃至五十(大人ニハ尚多量ヲ
 用スルアリ)注入ハ麻酔中ニ行ヒ大腿ヲ屈曲
 且外輪ニ大轉子ノ上部ニ穿刺スルヲ最良ト
 之是レ此部ニ於テ之レハ關節内ニ達スルヲ最
 モ確實トスルヲ注入後ハ輕ク關節ヲ動かシ注
 意シテ按摩シ以テ藥液ノ患部ニ分配スルヲ謀ル
 可シ然リ而テ是等ノ療法ヲ持續スル間ハ關節ハ
 安靜ヲ要スルヲ固ヨリ緊要トス又時ニ患部
 外ニ出シ新鮮ノ空氣中ニ運動セシムルヲ
 頗ル肝要ナリトス故ニ此目的ニ供セシ力為種

種々ノ關節固定法ヲ考ヘセリト云 就中ト
 氏ノ關節固定法(左圖甲乙)ノ如キ單簡
 ミテ便利ナリトス
 其法鏡厚性鉄
 或ハ白葉鉄ヲ以テ副
 子(甲圖)ヲ製シ之
 ヲ背部ヨリ臀部

甲 關節固定法
 氏ノ副子

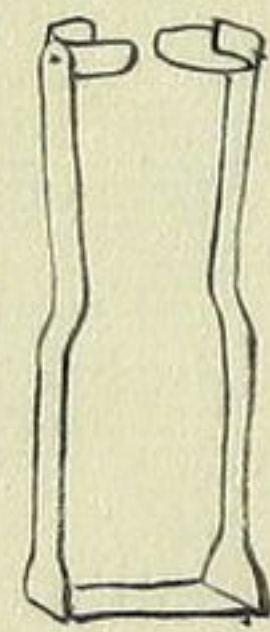
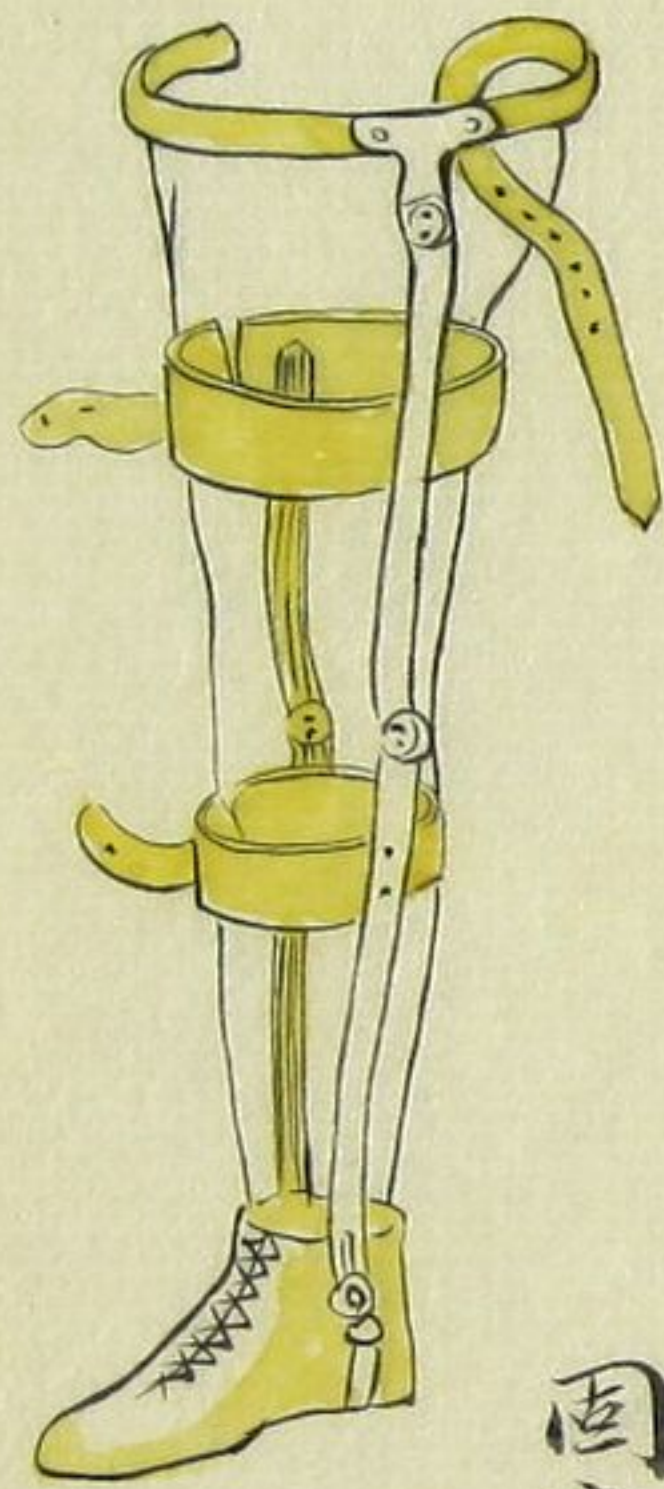


乙 右側關節固定法
 氏ノ副子



用 = 骨を前側膝・後側股
 指柱支ルフ具ヲ帶盤骨ルニ

帶盤骨ルニ施ニ在リ法節関股



α

此義布斯繙帶ヲ
 施シ健足ニハ高キ
 下駄又ハ靴ヲ穿クニ
 ノ以テ兩脚ノ長ヲ
 平均セシテ歩行
 セシム此法ハ亦殊ニ
 股関節炎ノ治癒
 期ニ於テ長ク展伸
 固定繙帶ヲ施セシ
 上ニ時ニ稱用
 セルモノニシテ
 此際上図ノ

「及膝關節又ハ下腿ニ達スルマデ當テ尚橈骨性縮ラ
 以テ胸廓・骨盤部及大轉子直下ノ大腿ヲ匣ラ
 シ又膝關節及下腿ヲモ匣ラシ腎部ニ於テハ副子ヲ適
 宜ニ屈曲シ繙帶ニ由リ之ヲ固定ス而テ患者ハ時
 々丁字杖ニ倚リテ歩行スルシガ為健側ノ足ニ高
 ク以テ固定ス患肢ヲ浮動スル如クスレバアリ（前
 乙圖）
 此他股關節ヲ固定スルニ諸種ノ装置アリ此最
 單簡ニシテ且施シ易キハ丸圓ニ示スカ如キ義布
 斯ヨリ成ル歩行繙帶ヲ施スニ在リ即テ患側ノ
 下腿ニ圓中（α）ノ如キ鉄製ノ錠狀副子ヲ
 當テ足關節ノ直上部ヨリ腰部ニ至ルマデ全

如キ骨盤帶ヲ施サント在時ニ稱用セリトモ
有ル支柱若ク用テモ可ナリ然リ而テ結構性股
關節炎ニ於テハ上述ノ如キ局所療法ノ傍ラ全
身強壯療法(滋養食餌、新鮮ノ空氣、鹽浴
海水浴等)ニ最モ注意スルキ固ヨリ言フ俟タザ
ルナリ

如上ノ療法ヲ施スモ奏效無ク病勢益々増進スル
キハ手術的療法ヲ行ハサル可カズ然レモ此際尙
保守的療法ヲ持長ス可キマ將テ手術的療法
ヲ断行ス可キヤノ問題ニ至テハ諸家各其見ル
所ヲ異ニシ之ヲ一定スルニ與シ但シ之型的ハ關節
切除術ハ可及的之ヲ制限シ又之ヲ施ス下早キコ

失ス可カラサルノ原則ハ常ニ銘心セサル可カズ是レ
切除部廣大ナルキハ後復拯テ可カラサル跛行
ヲ貽セハナリ是故ニ吾人ハ此際ニ於テモ亦只關
節ヲ切開シテ排膿ニ銳意ヲ以テ患部ヲ搔爬
スルニ止メ可及的骨ヲ保存セシメテ努力可シ然レ
モ關節ノ破壞既ニ高度ニ達シ多量ノ敗膿
ヲ蓄積シ高熱ヲ呈シ又特急性脱臼ヲ起セル者
ノ如キニ在テハ關節切除術若クハ關節離断術
ヲ行フニ躊躇ス可カズ必降侵サレタル滑液膜
ハ最モ注意シテ悉ク切除シ又綿密ニ縫合シ
検査ニ時宜ニ由リ之ヲ搔爬ス可シ而テ術後ハ
創口ニ圧度防護綿紗ヲ檢塞シ防腐繻帶ヲ

ヲ施シタル後骨盤ヲ高くシ可及の大腿ヲ外
輪セシメ牽引綯帶ヲ施ス一法ノ如クモ可シ但
關節周圍ニ既ニ數多ノ瘻口ヲ生シ又内臟器
ノ結核症ヲ續發セカキ症ニ在ラハ各療法多
クハ皆效無キヲ常トス

